

# 鬼族

kizoku



上巻

たくき よしみつ

# 鬼族（きぞく）

たくきよしみつ

福は内 鬼は内  
福は内 鬼は内  
鬼神さまはいつ来やる  
まーだまーだ来やらせん  
お宿りさまは 一らんで  
神のめえで 一らんで  
ほどけのめえで ぼうなすた  
そのわらしの名あめえは  
はあてはて なんと申します  
いかづちまると 申します  
そーの一次のわらしこ  
は一らーまーせておーくれと  
みなでおいのりしーまーしょ

ひいふうみいよおいつむうななやあ……

もういいかい？

まあだだべ

（西津軽郡鬼壁村に伝わる童歌より）



いつまで経っても気温が下がらず、寝苦しい夜だった。

目を開けると、あたりはまだ闇に包まれていた。すぐそばで、ゴミソ<sup>ばあ</sup>婆が寝息を立てている。

高倉<sup>きえ</sup>季絵は、物音を立てぬよう、静かに上半身を起こした。

婆の寝息は乱れなかった。深い眠りに入っているのだろう。

季絵は次に、自分の心の中を見つめた。

……いない。

あいつの支配力が感じられない。

やはり、あいつは今夜、女を求めて山を下りているのだ。あいつは新月の夜に里へ出ていく。今夜がそうだ。もしかしたら、今なら逃げ出せるかもしれない。

逃げる——この村から。

そう、今まで何度考えただろう。しかし、実行に移せなかった。あいつの支配力に抗うことができなかつたし、逃げたところで、その先、どこに救いを求めたらいいのか分からなかつたからだ。

夜明けまであとどのくらいあるだろうか。夜が明ければ、あいつは再び山に戻る。自分はまた、心を失った抜け殻のようになる。逃げるなら、今しかない。

季絵はゆっくり立ち上がり、婆を起こさぬよう、部屋を出た。手にしたのは、小さな懐中電灯だけだった。

新月の晩だから、家の外は当然暗い。付近には街灯などという洒落たものもない。

この家は赤座部落のいちばん奥にある。ここから先は林檎畑と杉林だけで、人家は一軒もない。道も、最後はふっと消えたように途切れる。

季絵はひたすら、逆方向の、部落の入り口に続く道を進んだ。

古い単二乾電池二本が作り出す光は、周囲の圧倒的な闇の中では、ほとんど意味をなさないくらい弱かった。それでも、季絵は重い身体を必死に引きずり、慎重に進んだ。

季絵の腹の中には赤ん坊が宿っていた。

計算では臨月はまだ大分先のはずなのに、すでに彼女の腹は異様なほど膨れていた。先月からは、身体の重さだけでなく、腹部の皮膚が引き裂かれるような痛みにも耐えていた。臍を中心に、ミミズが這ったような痕が何本も走っている。胎児の成長に、皮膚の膨張が追いつかないのだ。

こんな身体でどこまで逃げられるのだろうか。

少なくとも、この村の人間以外の人が出てくれる場所まではたどり着かなければならない。

赤座部落の人間でなければ誰でもいい。最初に出会った人に助けを求めよう。

この身体だ。きっと病院に連れていってくれるに違いない。

病院に入れば、村人やあいつも簡単には手が出せないはずだ。

そう言い聞かせながら、季絵は闇の中を歩き続けた。

やがて街灯がポツポツと現れるようになり、行く手を照らしてくれた。

ようやく、赤座部落を抜けた。幸い、誰も追ってくる気配はない。このまま行けるところまで行こう。

どれだけ歩いただろうか。

空が白み始めていた。気の早い鳥があちこちで鳴いている。

季絵の身体はもう限界だった。立っているという感覚がない。意識も朦朧としてきた。

ここで倒れたら、きっとこのまま死んでしまうだろう。それはそれで運命なのかもしれないけ

れど、なぜ自分がそんな運命を背負って生まれてきたのかと思うと、恨めしかった。

死ぬならば、せめて人目につかないところで、ひっそりと死にたい。

季絵は、ぼやけてくる視界の中で、身を隠せる場所を本能的に探した。

△△◎▽▽

と 唄  
「宿泊は十時からだよな？」

「うそ。九時からでない？」

「十時からだろ。今……九時二十五分か。十時からだと、前 長 取 延れっかな」

「いいでない、そんぐらい。ケチ！」

前方に光るラブホテルのネオンを見ながら、森園勇一と山栗 怜名はそんな会話を交わしていた

。周囲は畑と荒れ地で、人家はほとんど見えない。看板に従って入っていった進入路は、未舗装だった。しかも、すぐ目の前には、工事中を示す赤い警告灯ポールが見えている。

迂回を促す人形がヘッドライトに浮かび上がった。よくある、作業服にヘルメット姿の人形だが、意味もなく大きい。

工事箇所を避けようと、勇一がステアリングを切った途端、ガリっという嫌な音がして、車が少し右に傾いた。

「やべ！」

側溝にタイヤが落ちたらしい。

こんなところでエンコしているのを他人に見られたら、目の前のラブホテルに入ろうとしていたのが歴然だ。なんとか自力で脱出できることを祈りながら、勇一は運転席から外に出た。

ヘッドライトの光軸からは外れていたが、最悪の結果がすぐに見て取れた。右前輪が完全に溝にはまっている。

「パンク？」

助手席の怜名が声をかけた。

「まいったな。すっぽりはまってまった。とにかく降りて。何か木っ 端 みてえんたの、ねえかな

」  
「J A F 呼ぶ？」

「馬鹿。かっこ悪いべな、こったとこで」

勇一は、タイヤの前にあてがうのに都合のいいものが何かないかと、工事箇所のほうに歩いていった。

赤色警告灯の光を背後から受けて、さっき見た大きな人形が浮かび上がった。人形の腕でも外れれば、タイヤにかませて脱出できるかもしれない。そう思って近づくと、人形がゆっくりと前に進み出た。

勇一はぎょっとして後ずさった。

人形だと思いこんでいたのは、人間だった。

逆光とヘルメットのせいで顔はよく見えないが、とてつもない大男だ。身長は二メートルはあるだろう。こんな時間にこんなところで、この男は何をしているのか？ 一人きりだから、道路工事をしていたとも思えない。

男は無言のまま、ゆっくりと近づいてきた。

「あのお……」

勇一は、男が手伝ってくれるのを期待して声をかけた。が、作業服の男は無言のまま勇一の横をすり抜け、脱輪した車に近づいた。

ちょうど怜名が車から降りてきたところだった。怜名も男を見て、驚いて立ちすくんだ。

「あ……どうも……」

怜名が精一杯愛想のよい声を出したが、男は返事をしなかった。

男は怜名の前に立ち、無言で見つめた。

ヘッドライトの光で、男の風貌がようやく明らかになった。無精髭に立派な鼻。片手で車を持ち上げられるのではないかと思えるほど、筋骨隆々としている。

「タイヤが溝に落ちて……、なんがないっすかね、下にかませるような……」

背後から勇一が声をかけたが、男はそれを無視して、怜名に近づき、腕をぐいっと掴んで引き寄せた。

「きゃっ！」

怜名が悲鳴を上げる。

「何すんだ、この野郎！」

勇一はすぐに男の背後から飛びかかった。

男は怜名の腕を掴んだまま、振り向きざまに勇一を左手一本ではじき飛ばした。

凄まじい力だ。柔道や合気道の技などではない。単純に力が強いのだ。人間の力というよりは、直線的で、機械的なパワー。

背中から地面に叩きつけられた勇一は、そのとき初めて、死の恐怖に包まれた。

「この野郎、ざげやがって」

そう叫んで立ち上がったが、緊張と恐怖で喉が詰まり、かすれた声しか出なかった。

男は勇一の目の前で、怜名の身体を後ろから抱え込み、間髪入れず、Tシャツの胸元を掴んで引きちぎった。

ビリッというシャツが破ける音と、ヒッという怜名の悲鳴が混じり合って、ひとけのない周囲に響いた。

勇一は身構えながら、武器になるものを探した。素手でこの大男に勝てる自信はない。

男はひるんでいる勇一を無視するかのようになり、怜名のブラジャーも引きちぎった。怜名はもはや、悲鳴さえ上げられず、ただ身を固くしているだけだった。

勇一の目に、工事箇所を示す警告灯ポールが入った。走って行ってそれを手に取ると、すぐに男に向かっていった。

男が怜名を羽交い締めをしているため、前からは殴りかかれぬ。背後に回り込み、ポールを

振り上げると、男は怜名を抱え込んでいた両手をようやく離して勇一のほうを向いた。

勇一は思いきりポールを抜いた。

男の頭部に当たり、被っていたヘルメットが飛んだ。

大男は微動だにせず立っていた。何のダメージも受けていないようだ。

ヘルメットが脱げて、男の顔がはっきり確認できた。

大きく見開いた目は、どこか人間離れしている。それよりも、ぼさぼさの髪の間から突き出ている二本の「角」はなんだ。一瞬、なまはげの面でも被っているのかと思った。

ぎょっとして動きが止まった勇一に、大男はすっと近づき、左手で喉を鷲掴みにした。大男の太い指が、容赦なく勇一の首にめり込む。

ゴリッという音が勇一の耳の奥に響いた。苦しいなどという状態は一気に飛び越えて、頭の中で思考を束ねている回路が瞬時に引きちぎられた。

何もできなかつた。身体にまったく力が入らない。自分の首がどうなっているのか、想像するのも恐ろしい。いや、脳の働きそのものが、もはや機能していないのかもしれない。

勇一は声もなく崩れ落ちた。

勇一の気管や頸動脈は、男の片手だけで完全につぶされていた。

相手が動かなくなったのを見届けると、男は怜名のほうを振り向いた。血で赤く染まった片手をまっすぐに差し出し、怜名の身体を掴もうとする。背後の赤色警告灯の光を受けて、血に染まった手はさらに異様な赤味を帯び、怜名の目の前に迫った。怜名は声も出せず、腰が抜けたまま、わずかに後ずさりするのが精一杯だった。

怜名は簡単に組み伏せられた。

男の、光彩の大きな、どこか哀しそうな目が怜名を見下ろした。

人間の目じゃない……。直感的に、怜名は思った。夜行動物のような、あるいはぬいぐるみにはめ込まれた黒いガラス玉のような目。

〈たかが、肉体だ〉

男が何か言ったような気がした。だが、口元はほとんど動いていない。

「……お願い。やめて……」

怜名は震える声で、ようやくそれだけ訴えた。本当は「殺さないで」と言うべきだったろうが。

恋人の勇一は、もう生きていないかもしれない。犯されるところを見られなかったことがせめてもの救いなのか……。

怜名の頭の中を、様々な思いが駆けめぐった。

勇一とはこの秋に結婚することになっていた。一緒に部屋を探し、家具を揃えて、二、三年したら子供を作って、母親として人並みの苦勞を味わいながらも、それなりに楽しく暮らしていく……。そうした、漠然と思い描いていたこれからの人生が、この数分の間に全部つぶされてしまった。いや、もしかしたら、自分の命も、次の瞬間には消滅しているのかもしれない。

男の手が、荒々しく怜名のジーンズを引き下ろした。

ジッパーのタグ金具が飛び、股上の縫い目がビリビリと引き裂かれる。二万円もしたとびきり

のよそ行き用ジーンズが、紙のようにたやすく破かれた。

なんという力だ。この男には手心などは一切ないのだろう。

「お願いだから……」

最後は嗚咽に変わっていた。

〈たかが肉体だ。消えたところで、またつながっていく〉

男がまた、意味不明なことを口走った。

いや、本当に喋っているのだろうか。男の発する荒い息や呻き声のようなものは確かに耳に入ってくるのだが、それは言葉になっていない。ところが、呻き声とシンクロするように、別の言葉が怜名の頭の中に直接響いてくる。

この男は「人間ではない」のかもしれない。

怜名は改めてそう思った。

これは強姦なんて生やさしいものじゃない。人間ではない、別の生物種に襲われているのかもしれない。ライオンがウサギを食い殺すのと同じだ。男の圧倒的な力と容赦ない行動の前では、なんの抵抗もできない。無力とは、こういうことを言うのだろう。このまま気を失えたらどんなにいいだろうか。いや、もしかしたら、これは夢なのかもしれない。

怜名は固く目を閉じた。もう一度開けたとき、夢から覚めていることを祈りながら。

しかし、次の瞬間、股間に突き刺さった強烈な異物感は、夢かもしれないという怜名のはかない願いを消し去った。

△△◎▽▽

その日も、男はまだ夜が明けきらないうちから、若い実をつけた林檎畑を見回っていた。

林檎農家にとって、この時期から秋の収穫時までが、いちばん気を遣う。怖いのは台風だ。それまでの苦労が一晩で無に帰してしまう。特に、三年前の台風被害は悲惨だった。

彼は三人兄弟の長男で、自動車教習所の教官をしている。畑に出るのは、休日と出勤前、帰宅後に限られていた。

父親が腰を痛めて動けなくなってからは、こうして出勤前の早朝、畑に出ることが多くなった。

今年のエリンゴは今のところ順調だった。このまま暑い日が続けば、そこそこの出来だった去年よりも甘い実に育つだろう。

軽トラックの運転席に乗り込み、家に戻ろうとしたとき、数羽のカラスが奇妙な飛び方をしているのが目に入った。それまでは気にも留めなかったが、鳴き方も少し変だ。早朝、意味もなく鳥が鳴きわめくのはよくあることだが、カラスたちの行動に、彼はいつもとは違う何かを感じ取った。

カラスが小さな円を描いて飛んでいる真下は、林檎畑の外れあたり。軽トラックをスタートさせ、町道に出る手前で、カラスが旋回している下に目をやると、林檎の木々の間から、黒っぽ

い布のようなものが見えた。

男は軽トラックを止め、その物体に近づいた。

人が倒れている。

黒い寝間着のような服を身につけた女だ。

「おい！ 大丈夫か？」

声をかけたが、返事はない。

見かけない顔だった。少なくともこのへんの人間ではない。恐る恐る手首を取って脈を確かめると、まだ生きていた。

「しっかりしろ。どうしだ？」

両肩に手をかけて抱き起こそうとしたとき、初めて女の腹が異常に膨れていることに気づいた。

妊婦？

妊婦が、なぜこんなところに倒れているのか。

男は、女の腹部になるべく触れないようにしながら、身体を抱え上げようとしたが、思った以上に重い。

抱きかかえられた拍子に、女が身をよじるように動いた。

「大丈夫が？ 今、救急車呼ぶがら」

ポケットから携帯電話を出し、すぐに119とボタンを押した。

女の口から「ぐえっ」という、獣の呻きのような声が漏れた。その声の、あまりの異様さに、男は思わず半歩退いた。

見ると、女の異様に膨らんだ腹部が、波打つように動いている。こんなところで赤ん坊を産まれてはかなわない。

〈はい。こちら119番です。火事ですか、それとも怪我人、病人ですか？〉

携帯電話の向こうで応答があった。

「急いでくれ！ 生まれそうだ」

男は焦って、そう叫んでいた。

あまりの苦痛に意識が遠のいてから、どのくらい経ったのだろう。季絵は自分が生きているのか死んでいるのかも分からなかった。

目の前には蝋燭に照らし出された薄闇が拡がっている。

「あがしやさま そでおれさま あがしやさま めそきせねて……」

ゴミソ婆の声だ。

私は赤座に連れ戻されたのだろうか？

でも、これはおにひな鬼雛もんごん闇祭りのときに唱えるもんごん文言。これから赤ん坊を産もうとする私がなぜ？

目を凝らすと、闇の向こうに、蝋燭に照らし出された男の顔が浮かび上がった。

しかし、それは怖れているあいつではなかった。次郎太——最初の闇祭りのときの相手。

そうか、これは夢なのだ。

季絵は悟った。

死ぬ前に、過去の記憶が次々に甦るといえるが、それだろうか。次郎太はとっくの昔に死んでいる。これは夢だ。

「季絵。しんぼうせえ。<sup>な</sup>汝はお宿り様さならねいばなんねえ。しっかりお種ばいだいで、鬼神<sup>きん</sup>様ば宿すべ」

背後から、母親の声が出た。

振り向こうとしたが、首が回らない。

なぜ私だけがこんな目に遭わなければならないのか？

あのときの理不尽な怒りと絶望が甦り、季絵は叫び出したい衝動に駆られたが、声は出なかった。

次郎太が立ち上がり、近づいてきた。身体には何も身につけていない。

やめて！

叫ぼうとしたが、声が出ない。

あのときもそうだった。ゴミソ婆に飲まされた薬のせいで、意識は朦朧として、声を上げることもできなかった。

次郎太が目の前に立ちはだかる。男根には、巻き付くように龍の入れ墨が施されている。鬼雛に種を授けるために選ばれた男の印だ。

季絵は固く目を閉じた。だが、龍の入れ墨はまだ見えている。

夢なのだ。夢だから目を閉じても消えてくれないのだ。夢なら、早く醒めて……。

やめて！

もう一度、叫ぼうとした。声にならない空気の塊が、低い呻きとなって、喉を通りすぎた。

その瞬間、季絵は、自分の意識がさらに深い階層へと降りていくのを感じた。

それまでの「夢」は、漠然と夢だと感じ取れていたし、自分が誰かも認識できていた。しかし、今度は自分という存在を支えていた世界が急に取り払われ、底なしの闇の奥へと落ちていく感じだ。

とてつもない加速度を感じながら、季絵は自分が何代も先祖帰りをしていくような気がした。その中には、人間ではない時代も含まれていたかもしれない。

やがて、再び意識がどこかの階層で留まり、思考することができるようになった。

その階層……あるいはその「世界」で、季絵は多くの人間たちの前に立っていた。

人々はみな畏敬の念を抱いて季絵を見つめていた。

「……様……」

群衆の中の誰かが叫んだ。はっきりとは聞き取れないが、自分が、彼らの上に立つ存在なのだという事だけは分かる。

「なぜ……様は私たちを……ですか？」

「早く……助けて……世界を救うのは……」

人々は口々に何かを訴えていた。

私に何をしてほしいというのか。私に何ができるというのか。

彼らの目は、同じ人間を見る目つきではない。まるで神を拝むようなまなざしだ。

神？

この私が……？

そのとき、背後から何かが迫る気配がしたかと思うと、季絵の腹部に激痛が走った。

太い槍が突き抜けるような痛みと衝撃。

内臓がちぎれ、腹部の内側から外に向かって、何かが肌を突き破って飛び出したようだ。

あまりの痛みに、声も出ない。

だが、同時に、この階層での意識が消えれば、もう二度と甦り、苦しむことはないだろうという予感がした。

ほら、私は神なんかじゃない。その証拠に、こんなに簡単に身体が壊れ、死んでいく。

やがてその予感は確信に変わり、痛みはいつか、穏やかな安堵へと変わっていった。

病院に着いた救急車から、ストレッチャーが降ろされた。乗っていたのは三十代くらいの女性だった。毛布の下で激しく悶え苦しんでいる。

「しっかり！」

迎えた看護師がストレッチャーの横について、呻き続ける女性の手を握り、声をかけた。

「急いで。破水しそうだ」

救急車に乗っていた隊員が叫んだ。

運び込まれた女性は妊婦だった。顔は土気色で、生気がまったくない。しかし、身体は激しく震え続けたままだ。髪を振り乱し、完全に白目を剥いている。

ストレッチャーが救急処置室に入った瞬間、悶え苦しんでいた女性は、短く、悲鳴とも嗚咽ともつかないような動物的な声を発し、ぐったりした。

「大丈夫。頑張って！」

声をかける看護師の目の前で、妊婦にかけられていた白い毛布が見る見る血で赤く染まっていた。

何が起きたのか分からず、看護師は絶句した。

待機していた産婦人科の副主任が、毛布を剥いだ。

妊婦は丈の長いTシャツを着ていたが、下腹部から血が噴き出しているのがすぐに分かった。破水にしては異常だ。

医師は狼狽しながらも、鉏でTシャツを切り裂き、妊婦の下腹部を露出させた。

「な……なんだ？」

医師が絶句するのも無理はなかった。妊婦の下腹部、臍のあたりが破け、内臓の一部と一緒に何かが突き出していた。大量の血は、そこから吹き出したものだった。

妊婦の腹を突き破った「何か」は、動いていた。

そして、ゆっくりと顔を出した。

そう、それはまさしく「顔」……赤ん坊の顔だった。

血にまみれ、すぐには判別できなかったが、確かに人間の赤ん坊だ。赤ん坊が、産道を通らず、腹を突き破って産まれてきたというのか。

ストレッチャーを囲んで見守っていた医師や看護師たちは、自分たちが今まで一度も遭遇したことのない事態を前に、立ちすくんだ。

赤ん坊はすっかり顔を出し、その脇から右腕も外に出した。

妊婦の腹はもはや完全に引き裂かれ、絶命していることは明白だった。

赤ん坊はゆっくりと上半身を現したが、呼吸ができないのか、ひどく苦しそうだ。泣き声もない。

一同は、ただ呆然と見守るしかなかった。

医師はしかし、職業意識から、赤ん坊のほうに両手を伸ばした。

赤ん坊は、手を伸ばしてきた医師のほうに顔を向けた。

顔を向けた？

……そう、この赤ん坊は、すでに首がすわっているのだ。

目は開いていないが、まるで、気配でそこに人間がいることを知っているかのように、医師のほうを向いたまま、動きを止めた。

医師は、ありえないものに遭遇した恐怖で、思わず後ずさりした。

赤ん坊の血塗れの顔が、どんどん黒ずんでいく。まだ呼吸ができないのだろうか。魚が水のない世界に生まれ出たかのように、赤ん坊は顔を歪め、口を開け、まるで周りの者たちに何かを訴えようとしているようだった。

そのままどれくらいの時間が経っただろう。赤ん坊は「ぎえっ」と、獣のような声を発し、がっくりと首を折った。

「死んだのか？ こいつはなんだ？」

医師が、独り言のように言った。

看護師が、声になりきれない悲鳴を漏らした。

医師はこわごわとストレッチャーに近づいた。

床にまで垂れた血のぬめりが、靴底を通して足裏に伝わってくる。

目の前にいるこの生物が、人間の赤ん坊であることは間違いない。しかし、身体が大きすぎる

。

首を垂れた赤ん坊の頭を間近に見下ろしたとき、医師の身体が凍りついた。

赤ん坊の頭には、わずかだが、二つの突起が認められたのだ。

「嘘だろ……」

そう言うと、医師は再び後ずさりした。



車内アナウンスが盛岡到着を告げたとき、時計はまだ午前十一時を回っていなかった。東京駅で東北新幹線の列車に乗り込んでから、まだ二時間半も経っていない。

いなぎごうた  
稲木壕太は、どこか落ち着かない気持ちのまま列車を降りた。

父親が癌で入院し、余命幾ばくもないらしいと知らされたのが昨日のことだった。インターネットに接続して弘前への交通手段を調べるまで、壕太は自分が六歳まで育った弘前まで、なんとなく新幹線一本で行けると思いこんでいたが、それは間違いだった。

弘前は、鉄道で行くには青森よりも遠い町だった。盛岡から先は、太平洋側の八戸を經由して一旦青森に行ってから、奥羽本線で戻るような形になる。それで、少し悩んだ末に、盛岡でレンタカーを借りることにしたのだった。

東京に出てきたのは十七年前。小学校に上がる直前のことだ。以来、東北方面にはなぜか出ることがなかった。考えてみれば、仕事で日光まで行ったことがあるだけで、それよりも北には足を踏み入れたことがない。

自分が生まれた北国へ向かうことは、壕太にとっては多少なりとも感慨を伴う行事のはずだったが、あまりに速すぎる列車の窓から眺める風景からは、特に感じるものもないまま、盛岡に着いてしまった。

ホームにいた駅員に、駅レンタカーの場所を訊いた。

駅員は、思っていたのとは反対側のエスカレーターを指さした。ていねいに教えてくれた言葉には強い東北訛りがあった。その訛りに、かすかな懐かしさと違和感を同時に感じる。

かつてはこの響きの中で自分も暮らしていたはずなのに、今ではすっかり異国のトーンとして聞こえる。

教えられた通りにエスカレーターを降り、駅レンタカーの事務所に入ると、すでに二組の客が受付を待っているところだった。外には数台の車が停まっている。

前の客が、ヴィッツとフィットに乗って去っていった。壕太に残されたのは、後ろのフェンダーに凹みがあるスターレットだった。オドメーターは九万キロ近くまでいっている。

いちばん安いクラスで、車種無指定だから期待はしていなかったが、それでも落胆した。

エンジンがかたびれた音を発し、時速四十キロ前後では、嫌な振動が伝わってくる。

不安を感じながら東北道にのり、北を目指した。

無理をせず、左車線を一定速度で走る。危篤ではないようだから、一刻を争うことはない。それになにより、まだ父親に会うための心の準備ができていなかった。

父親とは十七年前に分かれたままだ。電話で話したこともない。顔もほとんど思い出せない。

壕太は小学校に上がる前まで、父親と二人で弘前市の北、十腰内という場所に暮らしていた。

父はそこで刃物専門店を開いていたが、男手ひとつで壕太を育てていく自信をなくし、東京の知人に預けたのだった。

以来、壕太は、電気工事会社を営んでいた石上<sup>いしかの</sup>という男に育てられた。養子になったわけではないし、石上を父親と思うことはなかった。

石上電工有限会社は、従業員数人の小さな会社だった。社長の石上は、二人目の妻と離婚し、通いの愛人と半同棲生活をしていて、小学生の壕太は、食事や掃除など、家事のほとんどをさせられた。

石上社長には、特に可愛がられた記憶もなければ、いじめられた記憶もない。実に淡泊な性格の男だった。なぜ自分を引き取って育てたのか、今なお壕太にはよく理解できなかった。

中学を出てからは進学せず、石上の下で働いた。

毎日エアコンの取り付けやビルの配線工事などを手伝わされたが、実子でもない自分を育ててくれたのだから、それは当然のことだと思った。

会社がコンピュータ販売の代理店も手がけるようになると、壕太はもっぱらその方面の仕事を担当するようになった。

コンピュータは、売っておしまいという商品ではない。特に、石上電工で販売するコンピュータは、店舗や小規模の事務所に納入されることが多く、売る苦勞よりも、売った後の苦勞のほうが大きかった。客の「動かない」「分からない」という苦情や相談に応じるのは並大抵のことではない。あまりにも初歩的な質問をしてくる客には、販売店はパソコン教室ではないと突っぱねたくもなるが、客にしてみれば、安売り店ではなく、わざわざ石上電工からコンピュータを複数台まとめ買いしたのは、それなりのサポートを期待したからだろう。

また、初期のサーバーマシンなどは、一台百万円以上するのが当たり前だったから、サポートを要求されるのは当然だった。

石上社長は、はなからそうしたサポート業務からは逃げていた。デジタル革命による変化についていくには、彼は歳を取りすぎていたし、プライドも高すぎたのだろう。他の従業員もコンピュータからは逃げ腰になり、結局、コンピュータ関連は、すべて壕太に押しつけられた。

意味不明な言葉が並ぶ分厚いマニュアルを毎晩読み、勉強する日々が続いた。

最初は嫌でたまらなかったが、結果として、これは壕太にとっては幸運なことだった。自立へのきっかけになったからだ。

中卒の壕太は、必要な技術や知識をすべて自力で手に入れるしかなかった。コンピュータのことを知るため、壕太は独学で英語も勉強した。コンピュータを扱うためには英語が不可欠だと分かっても、完全な英語力を得るのは困難だった。

そこで壕太は、「聞く」「話す」能力をすべて放棄して、読み書きの能力を得ることだけに専念した。例えば suddenly という単語が「突然に」という副詞だということは知っているが、それをどう発音するか、未だに知らない。壕太の頭の中で、英語は全部、一種の記号、あるいは数式のように処理される。

外国のIT企業の人間と、英文の電子メールをやりとりできるが、もし、相手がある日突然電話をかけてきたら、まったく対応できない。生まれつき耳が聞こえない人間が、文章だけで意志疎通を行うのに似ているかもしれない。

そんな風に、自分に必要だと思えるものだけを選んで勉強したため、壕太の知識や能力は極端

に偏っていた。

2進数や16進数にはめっぽう強いが、連立一次方程式が解けない。恐らく同年代の人間より言葉をよく知っているが、手で文字を書くことが少ないので、漢字は読めても、あまり書けない。UNIXのコマンドを熟知している一方で、フランス革命が起きたのが西暦何年かは知らない……。

学校に行かず、独学でコンピュータと格闘していた青春時代。教師も、友人も、自慰のネタも、すべてはデジタルだった。友人の多くは、直接会ったことがない。電話で話したこともないから、声も知らない。いや、本名や性別さえ知らないまま、何年もネット上でつき合っている友人が複数いる。

そんな壕太が十九になったとき、社長が事故で急死した。

それを機に壕太は独立し、工事現場のアルバイトや便利屋稼業などをしながら、やがて、すでに身につけていた技術と知識を生かし、自分でインターネット関連の商売を始めた。

商売も軌道に乗りかけ、このまま東京で生きていく自信がついた今になって、社長の元愛人から突然電話があり、実父が癌で入院し、あまり長くはないようだと言われたのだった。

実父には、別段愛情も憎しみも持っていないが、もう長くはないと知らされれば、やはり心は乱れる。

しかし、いくら努力しても、父親の顔は浮かんでこない。どんな顔をして会えばいいのだろうか。

心のどこかには、着いたときには危篤状態、あるいはすでに死んでいて、一言も会話を交わさないまま別れたほうが楽なのではないかという思いもあった。

男手ひとつで子供を育てるのが大変なのは分かる。しかし、それは石上社長も同じだったはずだ。石上には愛人がいたが、独身であったことに変わりはない。なぜそんな男に預けられなければならないならなかったのだろうか。

考えてみればひどく理不尽な話だが、今までは、あまり深く悩んだことはなかった。親を恨むのが嫌だから、無意識のうちに、考えまいとしていたのかもしれない。

思いが乱れたまま、弘前市内に入ったときは午後になっていた。

弘前の記憶はほとんどない。想像していたよりも大きかったが、あまり活気を感じられない街だった。

コンビニで地図を買い、父親が入院している病院に向かった。もう少しで着くところで、救急車がサイレンを鳴らして追い越していった。

その救急車の後を追うような形で、目的地の病院に入った。

受付で、父親の名前がすぐに出てこなかった。

「あの……稲木……」

「稲木さん？ 息子さんですか？」

受付にいた女性の顔がパッと明るくなった。

「よかったあ。誰も身内の人、見つからなくて、困ってたんですよ」

受付の女性は受話器を取り、誰かを呼んだ。

小柄な中年の看護師がやってきて、病室に案内する前に別室に連れて行かれた。

そこに担当医師が現れて、簡単に病状を説明してくれた。

膵臓癌で、もう長くはないという。病院としても、積極的な治療は諦め、苦しみを減らす方向で対処しているということだった。

手術が始まるとのことで、医師はすぐにまた部屋を出ていった。

「このまま誰も来ないままなのかねって、みんなで言ってたんですよ」

看護師はそう言って壕太を見た。半ばほっとしたような、半ば非難しているような表情だった

。

「昨日初めて知りまして……」

壕太は言葉を濁した。

どう考えても、父とのことを簡単には説明できそうもない。

案内された病室は三人部屋だったが、入って行くと、二つのベッドは空だった。ひとつは完全に空いているので、恐らく患者が死んだか退院した直後なのだろう。

もうひとつは身の回りの物が置いてあるので、たまたま患者が検査か何かで出ているらしい。

いちばん奥のベッドで、父親は眠っていた。

不思議なもので、十七年会っていないのに、一目見るなり、すぐに父親であることが分かった。だが、想像していた以上にずっと痩せこけ、老け込んでいた。

看護師が「稲木さん。息子さん来てけだよ」と、津軽弁で声をかけると、父親はすぐに目だけをぱっと開き、壕太のほうを向いた。

「……壕太<sup>か</sup>だが？」

壕太は一瞬、どう答えていいのか分からなかった。これだけきつい津軽弁を聞くのも十七年ぶりだ。

「はい」

気まずい空白を作らぬため、そう返事をしたものの、そこから先が続かない。六歳の頃、自分が父親をなんと呼んでいたのかも、今は思い出せない。

はい、とだけ答えた息子の顔を見て、父親は苦笑した。

成長した息子の顔が、記憶にある顔からあまりに変わっていたからか、それともすっかり津軽訛りがなくなって、「はい」などと気取った受け答えをすることがおかしかったのか。

看護師が部屋を出ていっても、父子の間にはしばらく沈黙があった。

「どうですか？ 調子は」

なかなか喋らない父親に、壕太はそう訊いた。

「膵臓癌で、全身さ転移しでるっでよお」

父親はぶっきらぼうに答えた。

「うん……それは……」

「聞いたが？」

「ええ」

「……おめえ……しっかど東京の人間さ、なってまったなあ」

「そうですか？ まあ、物心ついた頃から今まで、ずっと東京ですから」

そう言いながら、開き直ったように聞こえなければいいがと思った。ここでは共通語で喋ることが罪悪のように感じられてしまう。

幸い、父親は気にしてはいないようだった。痩せこけた顔に笑みを浮かべて話し始めた。

「板橋の大將ハア、死んだって聞いてばって」

「ええ、四年前に」

「四年かあ……そんななったが。その後も、おめえ、ちゃんど食えでんだが？」

「大丈夫です。社長のところで働かせてもらっていたときより、よっぽど稼いでますよ」

「ほーお。それはたいしたもんだ。今、何してら？」

「インターネット関連の……まあ、いいでしょ、そんな話は。簡単には説明できないし」

「んだな」

そう言うと、父親はまたふっと、複雑な笑みを浮かべ、黙り込んだ。

沈黙が訪れるくらいなら、分からなくても、インターネットの話でもなんでもしていたほうがよかったと、壕太は後悔した。

逆に、父親の暮らしぶりを訊いてみようかどうか、迷った。自分を捨てたくらいだから、楽なはずはない。下手をすると恨みがましく聞こえてしまうかもしれない。

言葉を探している息子を気遣うように、父親が再び口を開いた。

「死ぬ前に、会いに来てけで、ありがとうな」

「何言ってるんだよ」

壕太はようやく親子らしい口調を探り当てて言った。

父親はどこかほっとしたように息子を見た。

「あんなあ……、おめえには……」

心がうち解けてきたからか、父親は何かを言いかけた。だが、続く言葉がなかなか出てこない。

「何？」

「いや……」

「なんだよ。何か言いたいことあるんなら言ってよ。途中でやめられたら気持ち悪いよ」

「ああ……したばって……」

父親はさらに迷っていたようだったが、ふっと何かから解放されたような表情になって、こう切り出した。

「おめえには、しゃべっておぐべきがどうが悩んだあばって、顔っこ見だつきゃ、やっぱ  
おしえて知かへでおぐことにした」

「何？」

「おめえにはさ、母っちゃハア、死んだって知かへだばって、生きでら」

「お袋が生きてる？」

「ああ……今は知らねえけど、俺が赤座の村ば出だときだば生きだった」

「……そうなんだ……」

母親が生きている。

そんなこともあるのかもしれないと、考えたことはあった。しかし、そうだとすると、どうなるものでもないとも思っていた。今告げられても、あまり驚きはない。

あまり反応のない息子にじれたのか、父親はさらに続けた。

「名前は季絵きえって言ってな。字いは、季節の季に、絵描きの絵だ」

「うん」

ほとんど生返事にしかなかった。

なぜだろう。急に言われたから、感情が追いつかないのだろうか。それとも、もともと肉親に対する情が希薄なのだろうか。

両親が別れたのにはそれなりの背景があったのだろうし、自分が、母親ではなく父親に引き取られたということにも、理由があったはずだ。この手の話はたいてい、むしかえさないほうがいいと決まっている。

何も言わない壕太に向かって、父は告げた。

「おめえには、姉様あねさまもいる。双子の姉だ」

「双子？」

この話には、壕太もさすがに驚いた。母親のことはいろいろ想像することはあったが、自分に兄弟姉妹がいるとは思ったこともなかった。

「じゃあ、その姉さんというのは、お袋のほうに引き取られたの？」

「そんでねえ。那末なみ わあも俺が引き取った。したばって、おめえがまだ物心つぐ前に、養子さ出した」

「ナミ？ ナミっていう名前なんだ」

「んだ。字いは、任那なみなの那に未来の未だ」

「みまな？」

「昔、朝鮮半島にあったっていう国だ。日本の領土だったども、独立した国だったども言われてる。学校で教わらなかったが？」

「ああ、あの任那……」

中卒でも、日本の古代史については興味があったので知っていた。それにしても、なんと変な説明をするのだろうと、壕太は思わず苦笑した。

「お袋が季絵で、姉貴が那末……。すぐには覚えられないな。メモでもしておかなくちゃ」

冗談めかして言ったつもりだったが、父親は真に受けて、枕元に筆記具を探し始めた。

「あ、いいよ。覚えたよ。季絵と那末ね。それより、今、どこにいるんです？」

「季絵は、まだ赤座の部落さいるべ。那末は知らね」

なんとも殺伐とした話だ。壕太は軽くため息をつきながら、病室の片隅にあった丸椅子を持ってきて、父親の枕元に改めて腰掛けた。

「で、俺に、お袋と双子の姉を捜せって言うんですか？」

思いがけず、嫌みな口調になっている自分に驚きながらも、壕太は死期の近い父親に訊いた。「それはおめえ次第だべ。会わねえほうがいいがもしんね。おめえの母親は、俺ど違って選ば<sup>れ</sup>いだ血筋<sup>た</sup>の人間だはんでの」

「選ばれた血？ 貴族とかですか？」

そう言った瞬間、父親の顔に緊張が走った。

「おめ、知ってるのか？」

「知ってるって、何を？」

「鬼族<sup>きぞく</sup>のことを」

「え？」

津軽弁は、口をあまり開かず、ぼそぼそと呟くように発音する。もともと聴き取りにくいのに、病身で声に力がないから、相当注意深く聞かないと、何を言っているのか分からない。

多分「きぞく」と言ったのだろうが、津軽訛りがあるので「けぞく」に近い発音になる。

息子の当惑した顔を見て、父親はようやく自分の早とちりに気づいたようだった。

「ああ……そうでね。俺<sup>わあ</sup>が言ったんは、鬼族<sup>きぞく</sup>……鬼のことだ。季絵は……おめのかっちは、鬼の血<sup>な</sup>ィば引いでら。立派<sup>な</sup>だ血だ。誇りに思っでいい」

「鬼の血？」

壕太はますます当惑した。何を訳の分からないことを言っているのか。死期が近づき、頭が少しおかしくなっているのかもしれない。問い返す気にはなれなかった。

黙っている壕太を見て、父親は複雑な表情になった。再び悩み始めているようだ。

「何か、重要なことなの？」

壕太は気を遣って問いかけた。

「ああ。したばって、おめに言っておぐべきがどうが……」

「聞いておくよ。話してよ」

息子にそう言われて、父親は再び何かに突き動かされるように語り続けた。

「鬼の血を引ぐ人間たちが鬼族<sup>きぞく</sup>だ。鬼族の祖先は、オルカイだ<sup>だから</sup>。したはんで、鬼族は、オルカイのおさたちの記憶ば集めだ、選ば<sup>れ</sup>いだ血ば受け継いでる。オルカイたちは、日本にもともと<sup>いた</sup>いだった本物の神様たちと話がでぎだ。おめえの母っちはその血ば継いでだ。したはんで、おめえにも鬼族の血、鬼の血が流れでら」

父親の言葉は、壕太にはまったく意味不明だった。

困惑の色を隠せない息子を見て、父親はそこで一息つくと、かすかに苦笑した。どう言えば通じるのか、父も悩んでいるようだった。

少し間を置いてから、こう切り出した。

「壕太。おめえの頭<sup>つ</sup>さハア、角<sup>つ</sup>っこがあるべ」

角？

あれのことか……。

壕太は思わず自分の頭を触った。

生まれたときから、壕太の頭蓋骨には左右二か所、わずかな隆起がある。だが、角と呼べるよ

うなものでは到底なく、頭蓋骨が多少いびつだという程度のことだ。

壕太も、そのことを気にはして、今も自分の頭蓋骨のいびつさが目立たぬよう、髪を伸ばしている。

「そい<sup>れ</sup>が鬼族<sup>あかし</sup>の証だ」

頭に手をあてた息子を、どこか満足げに見つめながら、父は言った。

「俺は鬼の血を引いてるってわけか。まいったなあ」

壕太は冗談口調で言った。

真に受けない息子に向かって、父親は真剣な口調で続けた。

「おめえは男だはんで、まだいい。那未<sup>おな</sup>は女<sup>だから</sup>ごだはんで、お宿り様さ、  
させられてしまうかもしれない<sup>だから</sup>わあ<sup>の</sup>ことを  
さへらいでまるがもしんね。したはんで、俺は那未<sup>ご</sup>とおめえより早く手放して、鬼族がら遠ざ  
け<sup>ただ</sup>だっ」

父親のただならぬ言葉に、壕太もようやく真顔になった。

「壕太よ、このまま、なんも知らねえで一生暮らして<sup>くれた</sup>けだほう<sup>だろうけど</sup>が幸せだあべたって、おめえが  
<sup>会いたいなら</sup>会いてえば、探してみるのもいいべ。母っちゃんに似てれば、えらぐべっぴん<sup>すごい美人になっているだろう</sup>になってるらびょん」

父親はそう言うと、成長した娘の顔を想像するように、天井を見上げた。

看護師が入ってきた。

「そろそろいいがな？」  
<sup>いいですか</sup>

看護師は二人を見比べながら、遠慮がちに言った。

壕太は看護師に会釈すると椅子から立ち上がり、父親の痩せ細った腕を掴んだ。

父親は、その腕を握り返して言った。

「だばって、赤座には行くな。あそこには近づかねえほうがいい」

それには返事をせず、壕太は別れを告げた。

「明日、また来るよ」

「ああ。うちが心配だはんで、戻ってみでけえじゃ。鍵だば、病院さ預げてある」

「分かった」

「けれど、マンジの柱んどごに……」

「え？」

「いや……なんでもね」

父は何か言いかけたが、思い直したように口をつぐんだ。

壕太は父親の手を軽くポンと叩いて別れの挨拶に代えると、病室を後にした。



原池憲昌先生

盟由会病院の逆川です。いつもご指導ありがとうございます。

さて、先日当院に遺体解剖のため搬入された、弘前市の奇形児異常出産の件について、取り急ぎ、分かっていることだけをご報告いたします。

問題の新生児が母体の腹部を突き破って出てきたとき、まだ生きていたことは、複数の病院関係者の証言により間違いありません。

外部の第三者が母体を外から傷つけ、胎児を引き出したのではないかという問い合わせが弘前北署からもありましたが、それはありえません。

物理学的、生物学的に考えれば、胎児が産道を通らずに腹部を内側から突き破って出てくるなどあるはずがないのですが、実際に複数の医師や看護師が目の前で見たと証言している以上、否定できません。

また、私自身の検査でも、この新生児の手足の指、及び頭部には母体の内臓組織が付着していることを確認しております。新生児の指には硬い爪がついており、これを突き立てて、内部から相当な圧力で母体腹部を圧迫、ついには破って外へ出たものと思われまます。

乳児の時点でこのように固い爪を持っているということも、説明がつきませんが、この爪自体が、調べてみると通常の人間の爪とは組織組成が異なっており、極めて硬く、強度のあるものでした。この爪の件だけでも、この新生児が、遺伝子異常をうかがわせる一種の奇形であることは間違いありません。

新生児としてはとうてい考えられない筋肉の発達も認められます。口腔内には上下にすでに犬歯が生えていました。体重は6320gで、超巨大児に分類されます。

また、頭部に小さな突起が一对認められました。まるで山羊の角のように、十二ミリほど頭蓋骨が隆起しています。

センセーショナルな報道を避けるため、現在、嚴重にメディアからは隔離しており、病院関係者にも箝口令を敷いてあります。

母子ともに遺体解剖は済んでおりますが、ご指示の通り、これ以上の解剖は取りやめ、二体とも研究所に送致いたします。

死亡した妊婦の身元はまだ分かっておりません。弘前北署が捜査を始めているようですが、これは病院の管轄外ですので、そちらで直接ご確認ください。

他に、こちらでできる事前検査などありましたらご指示ください。

よろしく願い申し上げます。

盟由会病院産婦人科部長 逆川甫清

△△◎▽▽

稲木刃物店の入り口は、木製の雨戸で閉ざされていた。

鱗張りの杉板壁と、傷んだコンクリート瓦。くすんだ看板だけが、ここが商店であることをかろうじて主張していたが、事情を知っている近所の人でなければ、刃物専門店だなどとは気がつかないだろう。長いこと放置された廃屋にしか見えない。

車から降りた壕太は、しばらくは店の前に立って、十七年前の記憶をたどりながら、建物や周囲の風景を確かめた。

預かってきた鍵で入り口を開ける。鍵と言っても、簡単なシリンダー錠だ。その気になれば、子供でも開けられる。刃物店の入り口が木製の引き戸だけとは、なんと不用心なことだろうか。

暗く狭い店内には、包丁、鑿、鉈、牛刀など、刃物ばかりが並んでいるが、数は少ない。どれも手工の逸品で、工場で量産される一般用の商品はまったく置いていなかった。

稲木家は、三代前までは名工と呼ばれる刀鍛冶の家だったと、死んだ石上社長から聞いたことがある。壕太の父親も、刀剣の研磨や手入れに関しては、現存する数少ないプロのひとりらしいが、六歳で家を出た壕太は、もちろんその技を継いではいない。

こうした専門店が東北の町外れにあっても、現代ではやっていけるはずがない。父親が入院する前も、恐らく店は開店休業状態だっただろう。幼いときに他人に預けられてしまった壕太には、父親がどのようにして生計を立てていたのか知る由もない。

店の奥が住居空間になっている。台所の他には、八畳の部屋がひとつと、風呂、便所しかない。

奥の部屋に埃を被った電話機があった。受話器を取り上げてみると、案の定、発信音がしない。いつから止められているのだろうか。

ざっと建物の内外を点検すると、持参したモバイルパソコンを出してインターネットに接続した。

パソコンには、日本全国どこからでも同一ダイヤルでインターネットに接続できる専用端末カードが入っている。これのおかげで、電波さえ届けば、どこにいても仕事ができる。

壕太が今やっている商売は、具体的には、レンタルサーバーの又貸しと、インターネットを使った広告プロデュースだ。

レンタルサーバーの又貸しというのは、サーバーを一台丸ごと借りて、そのディスクスペースを切り分けて客に貸すというものだ。アパート経営のようなもので、店子がつけば、あとは毎月の使用料が自動的に入ってくる。

アパート経営と違うところは、土地や建物が目に見えないという点だろう。サーバーは数台あり、一部はカナダに、一部はフランスにある。もちろん実物を見たことはない。管理はすべて電話回線で行っている。

インターネット広告のほうは、もう少し手間がかかる。まず、誰もがよく使うデータベースサイトや情報発信サイトを構築して無料開放する。人が集まってきて、そのサイトの存在が十分認知されたところで、広告を募集し、掲載する。

これを大規模にやっているのがYahoo!<sup>ヤフー</sup>などの検索サイトだが、まともに勝負したら個人で設計したサイトが勝てるわけではない。

それでも成功した秘訣は、対象を絞り込むことにあった。

アニメオタク系のサイト、釣りやバイクツーリングなどの趣味情報サイト、ペット情報のサイトなど、客層をはっきり限定することで、広告主も広告を出しやすくなる。軌道に乗せるまでは大変だったが、今はコンスタントに広告料も入り、運営の手間も減ってきた。

この商売の利点は、世界のどこにいても、インターネットに接続できるパソコンさえあれば仕事ができることだ。最近では、旅をしながら仕事をすることもよくある。平日の昼間から温泉に浸かり、寝る前にノートパソコンでインターネットにアクセスし、仕事をする。時には、道路脇に停めた車の中で仕事をすることもある。客とのやりとりはほとんどが電子メールだし、たまに電話をよこす客には、携帯電話で受けて対応するから、事務所などいらぬのだ。

決して好きな仕事ではないが、学歴も身元保証人もない二十三歳の男がひとりで稼いでいくには仕方がないと割り切っている。

メールは数十通きていたが、ほとんどはウイルスメールとSPAM（無差別広告メール）だった。

他にはサーバーの不調を訴えるクレームメールが二通、CGIプログラムが動かないという相談が一通、広告を打ち切るというクライアントからの通告メールが一通。

それらを淡々と処理すると、後はもう、緊急に片づけなければならない仕事はなくなった。

IT関係のニュースサイトや新聞社のサイトなど、いつも巡回しているサイトをざっと見て回る。

こんな仕事だから、ネット社会の最新情報には常にアンテナを張っておく必要がある。人より先に情報を見つけ、人より先にその情報を利用することができれば、金儲けにつながる。ストレスが溜まるが、一旦踏み込んだデジタルの荒野から、もう後戻りはできない。

それにしても、WEB（蜘蛛の巣）とはよく言ったもので、張り巡らされた電子の網のあちこちに、粘着力の強い罠が隠れている。あることを調べようとサイトを巡っているうちに、全然関係ないものを見つけて読みふけてしまうことがよくある。

数年前、WEBサーフィンをしているときに、偶然「縄文村」というサイトを見つけた。

インターネット上に作った縄文村という架空の村に、縄文をキーワードにして集まってきた「バーチャル村民」が住んでいる。

トップページには地図があり、竪穴式住居のアイコンが点在している。各アイコンをクリックすると、バーチャル村民のホームページが開くという仕組みだ。

村民が集まっておしゃべりする「井戸端」というチャットルームや、テーマ別に話題を掘り下げる「囲炉裏端」という名前のデジタル会議室などもある。

縄文村の村民は変わり者ばかりだった。基本的には、古代史や考古学に興味のある連中が集まっているのだが、みんな反骨精神旺盛で、優等生タイプはほとんどいない。

さかのうえの たむらまろ  
坂上 田村麻呂を異常に毛嫌いしているアイヌの老彫刻家。銅鐸は宇宙船だったと主張しているSF作家もどき。毎年夏になると「日高見大戦慰霊祭」と称して、ひたかみ東北蝦夷の英雄・アテルイえみしが埋葬されているとされるひらかた枚方市の神社に集うグループ。天狗を教祖と崇める霊能師の夫婦……。

そうした個性の強いメンバーをうまく束ねているのは、「下倉K」と名乗る人物だった。このサイトの主催者だが、年齢も性別も分からない。超古代文明やネアンデルタール人のDNAなど、幅広い話題に対応できる博識で、他の常連からも一目置かれていた。

あまりに面白くて、掲示板を覗いているうちに、いつしか自分もそこの常連になってしまった

。「村民」にはなっていないが、「旅人」と称するゲスト格での参加だ。

WEBサーフィンの最後には、たいていここにたどり着く。ひとりで酒を飲みながら、チャットルームで縄文村の村民たちと文字でおしゃべりすることが多い。壕太は縄文村の中では〈さしみ〉というハンドルネーム（通称）で通っていた。最初に覗いたとき、たまたま鯉の刺身を肴に酒を飲んでいたので、いい加減にそう名乗ったのだが、もう少しちゃんとした名前にしておけばよかったと、多少後悔している。

身近に友人がいない壕太には、ここは仕事や損得抜きでくつろげる、大切な場所だった。

課外活動や学習塾などというものとは無縁だった。空いている時間はほとんど電気工事会社の仕事を手伝っていた。独学でやった勉強も、すべてはコンピュータを扱うためのもので、純粋な興味や遊び心から、何かを勉強したという経験がない。あらゆることに「余裕」がなかった。

独立して、今ようやく「自分の時間」というものを持ち始めたのかもしれない。

縄文村の連中に影響されて、日本の古代史にもかなり詳しくなった。もっとも、変人集団を通じて得た知識が多いから、学校で採用されている歴史教科書の知識とはかなりかけ離れているかもしれない。

いつものように、「縄文村」のサイトにアクセスしてみた。まだ日が高いうちからここにアクセスすることは珍しい。

案の定、チャットルームには誰もいなかった。ブラウザの下に、「参加者1名・さしみ」という表示が虚しく出ているだけだ。掲示板にも新しい書き込みはない。夜に出直すことにした。

しかし、この「稲木刃物店」で一泊するのはどうにも寂しすぎる。宿は手配していなかったが、今からでも泊まれる所を探そうという気になった。

検索サイトで「弘前市 ホテル」で検索し、比較的新しそうなホテルに電話をしてみたが、二軒かけたところ、どちらも満室だった。

さらに探すと、民宿のホームページがヒットした。場所は鬼沢村となっている。ここからだど、弘前市内に戻るより近い。

電話してみると、声の大きな男が出て、今からなら食事の準備も大丈夫だという。二流のホテルに泊まるよりは面白そうだったので、そこに決めた。

民宿「鬼澤荘」は、林檎畑が広がる鬼沢村のはずれにあった。

一見すると普通の農家だが、母屋と離れて、民宿用に建てたらしい新しい建物があつた。

屋根にはかなり大きなパラボラアンテナが二本と、アマチュア無線のものらしいアンテナが立っている。ホームページを作っているくらいだから、主人がこの手のことに興味があるのだろう。

出迎えたのは三十代半ばくらいの、よく日焼けした男だった。

「いやあ、今日は一組しかお客さんが入ってなくて、それもさっきドタキャンされたところだったんですよ。捨てる神あれば拾う神ありですかね」

青森の人間にしては珍しく軽口で、愛想がいい。訛りもほとんどないから、地元の人間ではないのかもしれない。

離れの部屋に案内された。新建材を多用した安っぽい部屋だったが、こざっぱりしていて悪くはない。

「あれ？ パソコンですか？」

主人がめざとく壕太のモバイルパソコンに目をつけて訊いてきた。

「ええ」

面倒だったので、あっさりと答えたつもりだったが、主人は目を輝かせて食いついてきた。

「ここでインターネットにも接続されますか？ モジュラージャックはあそこです」

「あ、どうも。携帯の電波が届けば、カード端末があるんで大丈夫なんです」

「あ、それも大丈夫です。あれは便利ですよ。うちもひとつ持ってます」

相当好きそうだったので、仕方なく、壕太は愛用のモバイルパソコンをケースから出して見せた。

内蔵ハードディスクを交換して、CPUも載せ替えて……などというマニア受けの話をするとう、主人はますますのってきて、しきりに感心しながら聞いていた。

奥さんらしい女性が外から呼んだ。食事の準備があるからと、主人は残念そうに引き上げていった。

夕食ができるまでの間、パソコンに向かった。

こんな所にまで来て、すぐにインターネットに接続してしまう性分が悲しかったが、かといって散歩に行く気分でもない。

改めてこの民宿のホームページにアクセスして、細部まで見てみた。

さっきは宿泊案内しか見なかったが、目次には「青森県の魅力」とか「ようこそ鬼沢村へ」などという観光案内らしい項目もある。

試しに「青森県の魅力」というページに飛ぶと、さらにその先には「謎深き青森」というコーナーがあった。

興味をそそられてクリックしてみると、こんなページが開いた。

---

## ■ 謎深き青森 ■

我が青森県には、ミステリアスなスポットがたくさんあります。このサイトでは、全国的に有名なものから、地元の間でもほとんど知らない裏情報まで、私が勝手に選んだ「青森の謎」の数々をご紹介します。

目次（クリックしてもジャンプしない項目はまだ準備中です）

- ◦鬼神社に眠る巨大刀剣の噂（鬼沢村）
- ◦十三年に一度開かれるイタコ最高会議（恐山）
- ◦キリストの墓に出没するマリアの幽霊（戸来）
- ◦岩木山麓で見つかった「鬼の骨」（十面沢）

-----

実に「縄文村」的な内容で、思わず苦笑してしまった。ここの主人は縄文村を知っているだろうか。案外、すでにバーチャル村民になっているのかもしれない。

父親が言っていた鬼の話が頭に残っていたせいもあり、四番目の「鬼の骨」のところをクリックしてみた。

-----

### ◎巖鬼山神社裏で見つかった「鬼の骨」

一九八九年の夏、青森県弘前市、岩木山北麓にある巖鬼山神社裏手の山で、営林署の職員がミイラ化した人間の右上腕を見つけた。

腕は肘の部分から指先まで、ほぼ完全な形で残っており、ていねいに埋葬、あるいは保存されたことがうかがわれる。かなり巨大な腕で、腕の大きさからすると、身長は二メートル近くあったのではないかと推定された。

巖鬼山神社は十腰内と十面沢の間あたりに位置しているが、十腰内や、その北にある鱒ヶ沢町の湯舟は、昔から鬼伝説が残る地である。

有名なものに「鬼神太夫伝説」がある。ざっと紹介するとこんな内容だ。

昔、鬼神太夫という怪力の刀鍛冶がいた。この鬼神太夫が、桂山の刀鍛冶長者の娘に惚れ込み、長者に、娘を嫁にくれと申し込んだ。

娘をやりたくない長者は、鬼神太夫に「一晩で十腰（本）の刀を鍛えることができれば娘をやる」と言った。もちろん、そんなことは到底できないと踏んでのことだ。

ところが、鬼神太夫は真に受けて、本当に一晩のうちに十本の刀を鍛えてしまった。長者は驚くと同時に困って、そのうち一本を盗み出し、鳴沢川に捨ててしまった。

鬼神太夫は九本しかない刀を何度も数え「十腰ない、十腰ない」と呟きながら、恨めしげに去っていった。

これが「十腰内」という地名の由来である。

鬼神太夫が鍛えた刀の一本は、今も岩木山の巖鬼山神社に祀られているという。

この鬼神太夫伝説などとも無理矢理に結びつけられ、このミイラ化した腕は「鬼の腕」として話題になった。

鬼の腕は、津軽大学の考古学研究室に持ち込まれたが、しばらくして、これは本物のミイラではなく、巧妙に作られた「偽物」で、誰かの悪戯だろうという結論が出た。

偽物であるという「公式発表」後は、いつしかこの話題は忘れられていった。

しかし、なぜ、それほどまでに凝った「偽物」を作ったのか？犯人に意図を問いただきたいものである。

★NEXT「東日流外三郡誌の別原本が鱒ヶ沢にあった！」へ

---

そこまで読んだところで、部屋の電話が鳴った。

〈お食事は六時くらいになるんですが、その前にお風呂どうですか？ もう入れますんで……〉

受話器の向こうで、主人の愛想よい声が響いた。

「ありがとうございます。いただきます」

壕太は受話器を置くと、インターネットへの接続を切った。



こだいら

弘前北署の古平警部補は頭を抱えていた。

「辛いとは思うけど、話してくれねえがなあ」

何度同じ言葉を繰り返したことだろう。しかし、ベッドの上の相手は、いつまでたっても無表情に黙り込んだままだ。

二日前の夜、岩木町で若い男女が暴漢に襲われる事件があった。ラブホテルへの進入路の途中で車が側溝にはまり、立ち往生しているときに事件は起きた。

通報によりパトカーが駆けつけたとき、男のほうはすでに絶命していた。喉のあたりをえぐり取られるように損傷していて、まるで熊に襲われたかのようなようだった。

この男の死体だけだったら、実際、人間に殺されたとは思えなかつただろう。

女は衣服を引き裂かれ、陵辱されていた。

意識はあったものの完全な放心状態で、何を訊いても一言も応えなかつた。

金品を奪われたわけではない。怨恨による暴行殺人の線もあったが、困ったことに、唯一の目撃者であるその女性が、事件後、二日経った今になっても、何も喋らないのだ。

医師は、ショックのあまり失語症に陥ったと診断しているが、今なお目もうつろで、完全に魂が抜けたような状態になっていた。

古平警部補は、その被害者女性と対面していた。

女性は病院の個室に入院している。

医師付き添いのもとで、古平警部補は部下の池田巡查長と一緒に病室にいた。ここを訪れるのはこれで何度目だろうか。

女性は精神的なダメージがひどかった。確認のため名前を訊いても答えない。視線は絶えず虚ろで、古平の質問を聴いているのかどうかも分からない有様だった。

「どんどんひどくなっているんですよ」

付き添った医師が言った。

それを無視して、古平は女性にまた訊いた。

「なんとか話してくれねえがな。君たちば襲った男のことを。このままだば、彼氏も浮かばれねえ。相手はひとりだったが？」

津軽弁が混じった言葉で、古平は懸命に相手の心を開こうとするが、女性は無反応なままだ。

古平は構わず続けた。

「すごい力でやられでるしね。だいぶ大柄の男だったべ？ 歳はなんぼぐらいがな。うん？ 思い出したいくないのは分かるばって、教えてくれねえがなあ」

「お……」

そのとき、ようやく女性が何か呟いた。

「ん？ 何だって？」

「お……に……」

「オニ？ ……ああ、鬼みてえなやつだったんだな。人間<sup>で</sup>ねえ<sup>はだ</sup>んた。うんうん。で、どんな格好したった？ 背丈はさ？」

「鬼……」

女性は同じ言葉を繰り返した。

「うんうん。そうだな。鬼だな。そんでき、その鬼の背丈は？」

「……」

結局、彼女はそれ以上何も喋らなかった。

付き添いの医師に促され、古平は部下と一緒に病室を出た。

少し遅れて出てきた医師が、未だになんの情報も得られないでいる警部補に同情するような顔で言った。

「救急車で運ばれてきたときから心神喪失状態でしてね。ただ、今のように『鬼』という言葉は何度か言っていましたよ。他にも何か意味のつながらない言葉をいくつか言っていたんですが、時間が経つに連れてどんどん言葉を失って行って……」

「他になんて言っていましたか？」

古平は語気を強めて医師に訊いた。

「確か……ヘルメットとか、角とか」

「ヘルメットと角……」

そう繰り返しながら、警部補は手帳にメモを取った。

「角の生えだ鬼がヘルメットば被っていたんですかね。ヘルメットば被っていたら、角は隠れで見えないような気がします」

池田巡査長が口を挟んだ。

古平はむっとしたように池田の顔を見たが、そのまま黙殺した。

古平は弘前市郊外にある鬼沢村の出身で、物心ついたときから鬼という言葉には親しみこそあれ、悪いイメージはまったく持っていない。鬼沢村には、かつて村を干ばつから救ってくれたという親切な鬼の伝説が残っている。その鬼を祀る鬼神社という神社もあり、社殿の額の脇には、いかにも鬼が使いそうな、巨大な鉄の農耕具が飾ってある。

こんなところで、「鬼」という言葉が軽々しく使われるのは、あまりいい気持ちではなかった。

「鬼といえは……」

医師が、少し躊躇しながら言いかけた。

「なんです？」

「いえ……関係ないとは思いますが、去年、やはり極度の自閉症状を示していた女性が、入院後、自殺したケースがありましてね。彼女も鬼とか角とか言っていた記憶があるんですよ。今ふと、似ているなと思い出しまして」

その話は古平も知っていた。

青森県内では、二年ほど前から、若い女性が失踪したり変死する事件が続いていた。失踪した女性たちは、未だ誰一人見つかっていない。かなりの人数の刑事たちが、複数の女性失踪事件を追っているが、手がかりはまったく掴めない。

もっとも、厳しい北国での生活に嫌気が差し、家族にも何も告げず、ふらっと東京へ出ていく若者は多いから、それらの失踪には、事件性のないものも含まれているかもしれない。

変死のほうは、死に方が様々だった。古平が把握しているものだけで、自殺が二件、心不全による急死が一件。どれも、一見、事件性はなさそうだが、死因はあくまでも表向きに発表されたもので、実際には違っているという噂もあった。

二件の自殺は、どちらも精神錯乱に陥ったあげくのものだった。それまでまったく普通に暮らしていた女性たちが、ある日を境に突然虚脱状態になり、そのまま精神錯乱状態に陥って自殺した。病気というには不自然だったが、失踪事件が未解決なこともあり、とてもそこまでは手が回っていなかった。

結局、その日も被害者の女性からは何も聞き出せないまま、古平は病院を後にしなければならなかった。

署に戻る車の中で、古平は頭の中で岩木のアベック暴行殺人事件についての事実をもう一度整理してみた。

強姦事件としては極めて荒っぽい。一緒にいた男をほとんど一撃で殺した上で、なんの頓着もなく女を犯している。殺伐とした事件が増えている昨今だが、これほどひどい犯罪はあまり聞いたことがない。

犯人はどんなやつなのか。

殺された青年の喉には、犯人のものと思われる指の痕がしっかり残っていたが、両手で絞めたのではなく、片手で鷲掴みにしたような痕だった。もしそんなことができるとしたら、普通の人間の力とは思えない。それだけで犯人像はかなり絞り込める。プロの格闘家、あるいは並はずれた怪力の持ち主。

それに、暴行された女性の膣内には、犯人の精液も残されていた。これは東京に送ってDNA鑑定を依頼しており、そろそろ結果が出てくる。これで犯人の血液型はもちろん、DNA情報がはっきり分かる。

被害者の女性があの状態で証言をしてくれないのは困るが、犯人の残した精液は決定的な証拠になる。

考えをまとめているうちに、車は署に着いた。

設置したばかりの捜査班を招集し、会議を開こうとしたところ、逆に署長から、待ちかまえていたように呼ばれた。

署長室に入ると、署長は今まで見せたことのないような困惑と緊張が入り交じった顔で出迎えた。

「今回の事件だが、さっき、警察庁から緊急の指示があった」

署長は古平に椅子を勧めると、意識的に一拍置くかのようにテーブルの上のライターに手を伸ばしてから言った。

「中央からの捜査スタッフが合流するまでは下手に動くなということだ」

「はい？」

古平は意味が分からず、間の抜けた声で問い返した。

ライターに伸ばした署長の手が、何もせずにまた引っ込められた。

署長も相当困惑しているようだ。

「だから……我々が勝手に捜査してはいかんということらしい。特に聞き込みは、指示があるまで中断せよとのことだ」

「なに言ってらんだっけ、署長。青森で起きだ事件さ、なして警視庁が出はってくるってらんです」

古平は思わず津軽弁でまくしたてた。

署長は青森の人間ではないので、普段、署長を相手に話すときは、意識して、ある程度方言を呑み込んでいるつもりなのだが、興奮すると、どうしてもストレートに出てしまう。

「警視庁じゃない。警察庁だ。日本の警察のいちばん上にいる警察庁。なんでかは私もよく分からん。しかし、これが単純な暴行殺人事件ではないことは確からしい」

「単純が複雑がは、俺等がこれから捜査して突きとめるわけですが。分がらねえなあ。なして、東京の連中にそつたらちよっかい出されねえばまいねんだ」

古平は強い口調で抗議した。

「中央からの命令だから仕方なからうが。それまでは、極力証拠を保全しておくようにとのことだ。特に犯人のものとおぼしき体毛、体液、皮膚組織などが残されていないかという点に相当こだわっていた。現場にもう一度鑑識を回しておいてくれ」

署長の口調も、古平に負けずに強いものに変っていた。

「……了解しました」

古平は、最後は、わざと共通語でそう答えた。



岩木山環状線と呼ばれる県道30号線から三キロほど内側に入った山間部、弘前市と鱒ヶ沢町の境界線付近に、小さな作業場がある。トタン板と廃材を組み合わせたような粗末な建物が三棟。誰に向けるとでもなく掲げられた小さな看板には、〈合名会社赤鞍鐵工所〉とある。

名前は「鐵工所」だが、本格的な工場があるわけではない。

敷地内には、なぜか原始的な製鉄炉が残されている。「たたら」と呼ばれるもので、砂鉄を原料に、木炭を還元剤にして製鉄する炉だ。

このたたらは古代遺跡などではなく、近世に作られたものだが、一体いつまで使われていたのか、なぜここにあるのかは判然としない。

赤鞍鐵工所は、今では製材と森林保守の仕事をしており、実体は鐵工所ではなく製材所だ。それなのになぜ今でも「鐵工所」という看板を掲げているのか、ここに入出入りする数少ない外部の

人間たちにもよく分からない。

敷地内には小型のユンボ、2 t トラック、それに大型のワンボックスカーが無秩序に置かれている。

深夜二時半。建物のひとつにはまだ灯りがともっていた。

そこに、軽トラックが一台やってきた。球切れなのか、片方のヘッドライトがついていない。街灯もない山道を、半分無灯火で走ってきたらしい。

軽トラックは作業場の敷地内に入って停まった。

運転席から降りてきたのは、作業服を着た中年男性だった。その数秒後、助手席のドアが開き、もうひとり、身長二メートルはあろうかという大男が降りた。この大男も作業服を着ていたが、なぜか安全帽まで被ったままだ。

二人は、灯りのついている建物のほうに歩いていった。工事現場から作業員が飯場に引き上げてきたという風情だが、それにしても時間が遅すぎる。

そのとき、アルミのドアが開き、やはり同じような作業服姿の老人が現れた。  
「まだが」

老人は二人を見ると、飼い犬を叱るような口調で言った。  
「鋼丸。頼むはんで、夜の女漁りはやめでけえ。俺等は気が気でねえ」

鋼丸と呼ばれた大男は、突っ立ったまま、低い呻き声を発すると、そのままふてくされたように黙って老人の横を通り過ぎ、灯りがついていた建物の中に入っていった。

老人は運転していたほうの男を捕まえ、すぐにこう訊いた。

「誰さも見られねがったが？」

男はばつが悪そうに首を横に振った。

老人は諭すように続けた。

「俺等は鬼神様さは逆らえねえ。身も心も、鬼神様の思し召しのままだ。だばって、鬼神様さ心を支配さいでるどぎも、万全を尽くさねばなんね。何も事故ば起こさなかつたべな」

「それが……」

男は困ったように口ごもった。

「なんがあったんだが？」

「男ばひとり殺した」

「なんだど？」

「アベックだったはんで……。男のほうば、鬼神様が……。俺は離れで見だっただけで、なんもできねがった」

「ほんじなしが。死体ばどうした？」

「そのままだ。なんもできねべ」

「誰がさ見らいだが？」

「いんや、誰もいねがった。ばって、女ゴはまだ生きでら」

「んにやまだな！」

老人は吐き捨てるように言うと、あとをつけてきた者がいないことを確かめ、男を建物の中に

入れた。

その建物は二十畳くらいの広さで、板の間にいくつかの万年床が敷かれていた。

五十代くらいの男性がひとり、胡座をかいていた。不思議なことに、さっき入っていった大男の姿はどこにもない。

「女ゴば犯すだけだあまだしも、連れの男ば殺したが。そいであうまぐねえな」

胡座をかいていた男は、そう言って少し年下らしい作業服の男を迎えた。

「鋼丸がしゃべったあが？」

老人が訊いた。

「ああ。今そうしゃべって、<sup>いおり</sup>庵さ、入ってった」

「困ったごとさなったな」

「鋼丸は、大切な生き神様だ。どつただごとがあってもならね」

「そうへったってなあ。俺等は鬼神様さは逆らわれねえがらの」

三人の男たちは自然と車座になって話し続けた。

「もうちょべっと待っててくれればの。次の鬼雛は、俺等で探すか」

「急がねばな」

「んだ」

三人は、部屋の奥のほうを見やりながら、重苦しい空気の中で話し続けた。

△△◎▽▽

民宿鬼澤荘の朝食は豪華だった。朝からイカの刺身が出てきたのには驚いた。

昨夜の食事も、近海物の刺身や郷土料理がふんだんに出てきて、下手なホテルに泊まるよりずっとよかったと思ったものだ。

「すごいですね、この朝食は」

大きな椀によそわれた味噌汁を運んできた主人に、壕太は声をかけた。

「いやあ、うちは食べ物くらいしか取り柄がないですがら」

主人は嬉しそうに答えた。

「お客さんは誰かの紹介でうちを知ったんですか？」

「いえ、ホームページを見まして」

「ああ、そうでしたかあ。あのモバイルで」

「ええ。検索していたらこのサイトがヒットしたんです。なかなか充実したサイトですよ」

「いやあ、恥ずかしいです。なにせ好きなもんで、つつい毎晩いじってまうんですよ。女房からはいやみたらたら言われてます」

そう言いながらも、オーナーはまんざらでもなさそうだった。

もてなしぶりが嬉しかったので、壕太ももう少し誉めておこうという気になった。

「青森県の紹介コーナーが面白かったですよ。あの〈謎深き青森〉というページは、ご主人が全

部書いているんですか？」

「あっははあ。あそこまで読まれましたか。そうです。私が全部書いてます。ネタはかなり怪しかったでしょう？」

「ええ……でも、面白かったですよ。鬼の腕の話とか」

「そうですか。よかった。この村は鬼沢村というくらいで、鬼には関係が深いんですよ。鬼神社にはもう行かれましたか？」

「いえ、まだ」

「ぜひ見ていってください。お客さんは東京ですよ？」

「ええ、まあ」

壕太は言葉を濁した。自分も青森の生まれだとは言えない雰囲気だった。

「鬼沢村に伝わる鬼の伝説では、鬼は悪者じゃないんですよ。昔、村が日照りで飢饉になったとき、山から鬼が下りてきて、一晩で用水路を造ってくれたというんです。おかげで村人たちは飢えずにすんで、以来、鬼を救いの神として崇めているんです。節分のときも、福は内、鬼は内って言うんですよ……」

主人は楽しそうに説明を続けた。

そのとき、壕太の携帯電話が鳴った。出ると、病院からだった。

〈……実は、稲木さんの容態が早朝に急変しまして……〉

「死んだんですか？」

〈はい。残念です。苦しまれるようなことはありませんでした。〉

そばで様子を見守っていたオーナーの顔から笑みが消えた。

「どうかしましたか？」

電話を切った壕太に、主人が恐る恐る訊いた。

「ええ……。ご主人。もう一泊させてください。すぐには東京に戻れなくなりました」

壕太は静かな口調でそう告げた。

△△◎▽▽

病院に着いたときには、父親はすでに霊安室に移されていた。

死に顔を見ても、肉親が死んだという実感はわかかなかった。

悲しいという感情もあまりない。昨日会うまで、父親がどんな顔をしていたかも記憶になかったのだから、仕方がないことかもしれない。

遺体はまるで蠟人形のように、親の死に直面したというよりも、見慣れぬ物体、つまり人間の死体に初めて接したという違和感が、感情の大部分を支配していた。

こんなときに、遺体の鼻毛が伸びているのが気になったりする自分が、別の意味で悲しかった。

。

葬儀社を手配し、葬式もせずに父親の遺体を荼毘にふした。

連絡すべき親族があったのだろうか。それも分からない。

葬儀社の人間は、一応火葬場まではついてきたが、「書類は全部代行しておきますから」とだけ言って、請求書の送り先だけ確認し、さっさと引き上げていった。葬儀もしない「客」に長々とつき合っている暇はないのだろう。

炉がひとつしかない小さな火葬場で、壕太はたったひとり、父親の遺体が燃えて別のものに変化するのを待っていた。

空には雲ひとつなく、父親の肉体が燃えた白い煙は、上空ですぐに薄くなり、消えていった。

しばらくはぼーっと煙の行方を見つめていたが、そのうちに手持ちぶさたになって、車に積んであったモバイルパソコンを取り出し、メールチェックを始めた。

肉親が骨になるまでの時間さえ惜しみ、インターネットに接続している自分が、ひどく滑稽で、悲しかった。

やがて係員が出てきて、無言で炉の扉を開けた。

焼き上がったパンを取り出すかのように、淡々と作業をする。

「ひとりしかおらんしね。これを使いますか？」

火葬場の係員は、そう言って小さなシャベルを差し出した。

立会人がたくさんいる場合は、箸で骨を拾うのだろうが、ひとりでそれをやっても空しいだけだから、最初からシャベルで拾いますかという意味だ。

「そうですね」

壕太はそう答えて、シャベルを受け取った。

用意されていた骨壺はかなり小さく、骨はとても全部は入りきらなかった。係員が慣れた手つきで押し込み、上からザクザクと砕きながら入れられるだけ詰め込んだ。

それでも入りきらなかった細かな骨は、箸とちりとりでかき集められ、厚手のビニール袋にゴミのように入れられた。

「これも持って帰りますか？」

「いえ……いいです」

「じゃあ……」

係員は、骨のかけらが入ったビニール袋を持って、さっさと事務所に引き上げていった。

火葬場には誰もいなくなった。

骨壺に入りきらなかった骨は、ゴミと一緒に捨てられるのだろうか。

壕太は軽くため息を漏らし、骨壺を持ってレンタカーに乗り込んだ。

骨壺を助手席に置いたが、すぐには車をスタートさせる気になれず、そのままシートにもたれて、物思いにふけた。

家族だとか先祖だとか、今までは深く考えたこともなかった。

小学校に上がる前に父親の元から離れてからは、自分には家族というものはないのだと言い聞かせてきた。飲んでばかりでまともに仕事もしない父親には、子供心にも愛想が尽きていたし、

自分を産んですぐに死んだと聞かされていた母親のことは、当然顔も知らない。

預けられた先の電気工事会社の石上社長は、養父というよりは雇い主だった。実際、壕太は彼のことを最初から「社長」と呼んでいた。社長が急死した後は、一生、誰の助けも借りずにひとりで生きて行く覚悟を決めたし、今も独力で生きている。

肉親に対する気持ちだけではなく、「人間全般」に対して、壕太は違和感を抱き続けていた。

この社会になじめず、親しい友人も作れない。同世代の連中を見ている、考え方、行動、あらゆる部分で共感を持ってない。

自分がこの世界に生まれ出てきたことは、何かの間違いだっただのではないかという気持ちがあった。

それが、父親の骨を隣に置き、こうして故郷の土地にいと、無性に自分の存在について知りたいという欲求がわき起こってくる。自分の肉体がいとおしく、この肉体を生じさせる原因となった両親や、同じような遺伝子を持って生まれてきた双子の姉のことが気になった。

本来、それがあたりまえの感情なのだろう。今まで人間社会に対して淡泊に接し続けてきた反動が一気に爆発しそうになっているのを感じた。

自分はなぜ生まれ、こうして生きているのか。父が言い残した双子の姉や、見たことのない母親は、本当に今もどこかで生きているのだろうか？

助手席に置いた骨壺に目をやった。骨と一緒にこれからドライブしようとしているようで、妙な感じだった。

こうなる前に、もっとなんとかすべきだったのだ。

両手で頭を抱え込む。これは、何かを深く考え続けるときの壕太の癖だった。両掌には、頭蓋骨のわずかな隆起が触れる。

瘤のようなこの隆起は子供の頃からある。これを、父が言うように「<sup>つの</sup>角」だと思ったことはなかった。角と呼ぶにはなだらかすぎる。

しかし、いびつな頭蓋骨に、今でも必要以上のコンプレックスを持っていることも確かだ。大したことでないのに、なぜそんなに気になるのか、自分でも不思議だった。

鬼の血か……。

父親が言い残した意味不明の言葉を思い出し、苦笑した。

鬼でもなんでもいい。荒唐無稽な話でも、与太話でも、昨日のプロ野球の結果でもいい。もっと話をしてみたかった。

壕太はもう一度ため息をつく、ようやくレンタカーのエンジンキーをひねった。

△△◎▽▽

その日、弘前市は、七月に入って二度目の猛暑に襲われていた。朝から寒暖計は一気に三〇度を突破し、街に行く人々は、異常気象にうんざりした顔で、いつもよりゆっくりと動いているように見えた。

弘前北署の署長室。エアコンを最大に効かせた部屋には、東京から派遣されてきた四人の男たちと、弘前北署の小笠原署長、そして「鬼事件」捜査班の責任者・古平警部補が集まっていた。

署長の小笠原は、事態の異常さを肌で感じ取っていた。県警のトップが来ることもそうそうはないのに、警察庁から直に命令を受けた人間が訪ねてきた。地方都市で起きた暴行殺人事件に、なぜ警察機構の頂点が乗り出してくるのか、まったく分からない。

四人の中のトップは伊東警視正。「警察庁刑事局付特別任務室室長」という肩書きを持つ。残る三人は、科学警察研究所主任研究員、警視庁刑事部の警部、そしてなぜか、民間人である医者という構成だった。

緊張しきった面もちの署長と古平警部補に、伊東警視正が説明を始めた。

「すでにお話ししましたように、我々が派遣されてきたのは、先日、この所轄内で起きたアベック暴行殺人事件に関連してのことです。この事件の捜査については、完全に非公開でやってもらうことになります。

指揮はここにいる警視庁の尾島警部が執ります。特別捜査班編成のために、明日にでも第一陣として百人規模の人員が送り込まれます。最重要ポイントは、犯人を秘密裏に捕捉し、メディアには発表しないということです」

「なぜです？」

古平警部補が訊いた。

「それを今、説明しようとしているんだよ」

話を遮られた伊東は、語調を変えて古平を睨んだ。

「我々が乗り出してきた真の目的は、暴行殺人事件そのものの捜査ではない。どんな残虐な殺人事件であっても、ただの殺人ならこんな扱いにはならないことくらいは分かるだろう？」

警察庁はこの事件を単なる暴行殺人事件としては見ていないんだ。

実は、犯人の残した精液をDNA鑑定した際、驚くべき検査結果が出た。内容についてはまだ詳しくは言えないが、犯人は重大な病原体を持っている……とでも言うておこうか」

伊東は完全に「ですます調」を改め、指揮官の言葉で言った。

「重大な……と言いますと、伝染病ですか？」

署長が恐る恐る訊いた。

「そうだね……どう言えばいいのかな。簡単に感染したりするものではないので、その意味では怖れることはない、としか今は言えないね」

「命に関わる病気ですか？」

「まあ……そうだ。それで、犯人は今回の暴行殺人事件だけではなく、以前から複数の強姦をしていたらしいことが分かっている」

「病気だばって強姦をしだと言うんですか？ 自暴自棄になって？」

古平が訊いた。

「そんなんじゃない。いや、そうした意味での理由はどうでもいいんだ」

「異常者の犯行だと？」

「そう考えてくれてもいい。この犯人をまともな人間だと思う必要はない、ということだ。」

それよりも、暴行事件との関連が疑われる他の事件について認識しておいてほしい。

ひとつは、七月三日に鱒ヶ沢で行き倒れていたのが発見された妊婦の事件だ。病院に運び込まれてすぐに母子共に死んだわけだが、司法解剖とDNA鑑定の結果、生まれた直後に死んだ赤ん坊は、今回の暴行殺人犯人のDNAに酷似していると分かった」

「え？ どういうことです？」

思わず、署長が確認した。

「今言った通りだよ」

「つまり……アベックを襲った暴行殺人犯が赤ん坊の父親だったわけですか」

「そういうことだ」

「だば、すぐに逮捕すればいいですが」

今度は古平が言った。

「生物学的な父親だというだけで、身元が特定できたわけじゃない。死んだ女性は、犯人に強姦された末に妊娠したのかもしれないだろう。

他にも犯人が犯した女性が異常死したり、殺された後、遺体を隠されたりした事件があったと思われる。今、こちらでも調査中だが、ここ数年内に青森県内外で起きた女性の失踪事件、自殺事件や妊婦の突然死について、もう一度徹底的に洗い直す必要がある」

それを聞き、古平は、先日会った、逆川というあの産婦人科部長の顔を苦々しく思い浮かべた。

情報の出所が逆川であることは明白だった。とぼけていたが、中央にはすでにこれだけの情報が提供されている。地元の刑事には明かせないが、中央にはすべて報告するということなのか。コケにされていたことを知り、不快感がつのったが、それを隠して、古平は伊東警視正に訊いた。

「その犯人に犯された女性たちが次々に死んでいるとしたら、病気が原因なんですか？ その……つまり、犯人が伝染させだというか……」

「そうだ」

伊東は、今度はあっさりとした。認めた。

「それは……なんだか知りませんが、そんな大切なごとを非公開のまま、捜査を進めるわけですか？ しかも、捜査担当者である我々でさえ信用されでないようで、これではどう動けばいいのか分からんですよ」

古平は食い下がった。

「パニックになる恐れがあるんでね。まだ未知の部分が多くて、なんとも説明しがたいんだが、国家的な機密事項に属することだとは言っておこう。とにかく、今後の捜査は警視庁主導になる。カムフラージュの意味もあって、捜査本部はここに置くが、弘前北署でやってもらいたいのは、むしろ対外的なガードだ。メディアに感づかれないように万全の体制を敷いてほしい。署内でも、この件に関してはトップシークレットとしてもらいたい。下部署員から外に情報が漏れては困る」

「しかし、警視庁から何人も来るとなったら、それだけでたちまち噂が立つでしょう」

今度は署長が言った。

「だから、そのへんをうまく処理してくれと言っているんだ。犯人を秘密裏に捕まえて東京に運ぶ必要がある。問答無用で隔離しなければならない。これは警察庁長官、つまりトップからの指示だ」

署長も古平警部補も、まるで納得できなかったが、大変なことらしいということだけは分かってきた。

次に、唯一の民間人である原池<sup>はらいけ</sup>病院の院長・原池<sup>のりまさ</sup>憲昌という男が言った。

「それで、例の妊婦の異常死に関してですが、その後、新しい情報などは入っていませんか？」

「いえ、それは……。アベック襲撃事件との関連性があるとは思いませんでしたし、同一犯の子供を宿していたという話も今聴いたばかりですので……」

古平はさっきまでとは打って変わって歯切れの悪い口調で答えた。

「何も調べてはいないんですか？」

原池が呆れた顔で訊いた。

民間人にそんな風に言われ、古平の不快感はピークに達したが、実際、何も分かっていないのだから答えようがない。

伊東が再び口を開いた。

「むしろこっちのほうが重要なんだよ。アベック襲撃事件よりね。すでに我々のほうで、妊婦の身元はほぼ突きとめている。

死んだ妊婦の出身地は西津軽郡鬼壁村赤座というところだ。親族はこの村を出て久しいらしいが、彼女自身は結婚もせず、なぜか村に一人が残っていたようだ。どういういきさつでそういうことになっていたのかは、これから調べるわけだがね。この捜査には君もすぐに加わってもらいたい。地元だから、土地勘はあるだろう。それに、津軽の人たち、特に年寄りには方言がきつい。君なら通訳も勤まりそうだ」

「はあ……」

古平は曖昧な返事をした。

原池が付け加えた。

「死んだ妊婦の親族については、全員検査を受けてもらいます。三親等までの親族をリストアップして、彼らの身体検査をする適当な理由を考えてください」

「はあ……検査と言いますと？」

「とりあえずは、体液や毛髪など、生体組織が手に入ればいいんです。理由なく病院に連れ込むわけにもいかんでしょうから、まずは、毛髪か何かを秘密裏に採取できませんかね」

「はあ……後で考えでみます」

「すぐに必要です」

なぜ民間人に命令されなければいけないのか？

古平は納得できないながらも、「了解」とだけ答えた。



久しぶりに降る雨の中、山栗<sup>やまぐりみ</sup>聖名<sup>な</sup>は、一人、傘もささず、濡れるに任せて歩いていた。

ここは秋田県の北端、十和田湖に近い殺風景な土地。そばには軽石の採石場があり、置きっぱなしになっているコンボが、寂しさをさらに強調している。

聖名は高校三年生。地元の高校に通っている。もうすぐ夏休みに入るが、今日は部活動を休んで、一人で家路<sup>れな</sup>についていた。

三日前、姉の<sup>れな</sup>怜名が死んだ。昨日まで、通夜、葬式と、めまぐるしく儀式が続いた。どれも、聖名にとっては現実感のないものだった。ただ、重苦しさだけは確実に身体に蓄積されていく。

ついこの間まで、姉の怜名は元気だった。姉は、高校卒業後、弘前の企業に就職して、社員寮に住んでいたが、同じ職場で恋人ができ、来年には結婚する約束をしていた。

聖名も、姉の恋人・勇一には二、三度会ったことがある。無骨で、頭もあまりよさそうではなかったが、底抜けに明るく、いい「兄」になってくれそうだと思っていた。

それが、一週間前、突然不幸が襲ってきた。姉が婚約者と夜のドライブをしている最中、ラブホテルのそばの空き地で何者かに襲われた。婚約者の勇一は首をつぶされて殺され、姉は強姦された。

姉は病院に運ばれたが、ショックのあまり口もきけなくなっていた。それでも、身体は無事だったので、ゆっくり時間をかけて元気になってくれることを願っていた。それが、三日前、病院のベッドで突然死してしまったのだ。

死因は「急性心不全」としか告げられなかった。医者も首を傾げたらしい。

こんなひどいことが、あっていいものだろうか。

聖名は何度も何度も現実を疑ってみたが、そんな気持ちを無視するように、葬儀社がやってきて、葬式の参列者がやってきて、僧侶がやってきて……ついに姉の身体は火葬場に運ばれ、わずかばかりの白い骨に変わってしまった。

親や祖父母よりも先に、三つ違いの姉が骨になってしまうとは……。

線香のにおいが立ちこめる家から逃げるように、聖名は葬式の翌日である今日、久しぶりに学校に行ったのだった。

午後から降りだした雨はだんだん強くなってきた。できることなら、家に帰りたくない気分だ

。

そのとき、一台のワンボックスカーが聖名を追い越し、数メートル先で停車した。

助手席側の<sup>うち</sup>ドアが開き、作業服を着た初老の男が降りてきて、聖名に声をかけた。

「山栗さんの家はこの先だあべか？」

男の言葉には、かなりきつい津軽の訛りがあった。葬式に出遅れた親族にしては服装がラフだ。きっと、後片づけに来た葬儀社の関連業者か何かだろう。

聖名は警戒することもなく答えた。

「はい。うちです」

「だば、後ろサ乗って。こったどごで濡れでねえで」

男はスライド式のドアを開け、聖名を招き入れた。覗くと、後部座席は空いていた。運転しているのは若い男だったが、前を向いているので顔は見えない。

服が濡れているので気後れしたが、車はお世辞にもきれいとは言い難く、座席も、濡れても平気なビニールレザー張りだった。

「すみません。ひえば……」

相手の訛りに釣られて、思わず自分も訛ってしまった。

軽く会釈すると、聖名は、男に促されるまま、ワンボックスカーの後部座席に乗り込んだ。家に帰りたくはなかったが、濡れた服を早く着替えたいという気持ちはあった。

助手席に乗っていた男は、助手席には戻らず、聖名の後から後部座席に乗り込んできた。その不自然な行動に、聖名は初めて警戒心を抱いたが、もう遅かった。

男はポケットの中から白い布を取り出し、素早く聖名の口をふさいだ。

声を上げる暇もなかった。抵抗しようとしたが、男の太い腕に、たちまち押さえ込まれた。

誘拐？ なぜ私を？

考える間もなかった。

車が走り出す感覚を最後に、聖名は意識を失った。



「大変でしたね」

民宿鬼澤荘の主人は、部屋の床の間に置かれた骨壺の包みを見やりながら言った。

「お客さんが青森県の出身だったなんて、全然分かりませんでしたよ。訛りもないし」

「ご主人も言葉はほとんど共通語じゃないですか」

座卓の上に広げてあったモバイルパソコンを片づけながら、壕太は言った。

「ええ。東京の大学に進んでからは、ずっと向こうでしたから。帰ってきたのは三年前なんですよ。オヤジが倒れましてね。林檎農園とこの民宿を継ぐことにしたんです。地元の連中の前では、今も津軽弁がかなり混じりますが、よそからのお客さんの前では、どうも東京弁になってしまいますね。情けない話ですが、学生時代、訛りにコンプレックスを持って、かなり意識して矯正したもんで」

「そうですか……」

鬼澤荘には、結局三泊することになってしまった。最初は主人の親切や饒舌が少しうるさく感じたが、今は素直に嬉しかった。上っ面の言葉ではなく、親身になって話してくれていることがよく分かる。

父親の火葬も済み、一旦東京に戻ることにした。これから精算をして、出ていこうとしているところに、主人がまだ話し足りないとも言えるかのように、わざわざ部屋を訪ねてきたのだ。

「お骨は、どこに納めるんです？」

主人は、少し気を遣いながら訊いた。

「さあ……。どうすればいいんでしょうね」

「どこかに先祖代々の墓があるんじゃないですか？」

「どうなんでしょうね。あるとしたら、昔住んでいたという村ですかね」

「行ってみましたか？」

「いえ」

「なんて言いましたっけ？」

「鬼壁村の赤座という部落らしいです。自分もそこで生まれたはずなんですが、どのへんですかね」

「赤座という部落は聞いたことがないですけど、鬼壁村はここから車で二、三十分もあれば行けますよ。行ってみたらどうです？」

「そうですね……」

主人に言われる前から、実は行ってみようかという気にはなっていた。

「行ってみます」

壕太はそう答えると、一旦鞆の中にしまい込んだ地図をもう一度引っぱり出した。

鬼澤荘を後にして、赤座に向かう前に、民宿の主人の勧めに従って、鬼沢村のシンボルになっている鬼神社を訪ねてみた。

県道弘前鱒ヶ沢線からは少し離れたところにあり、道も狭く、非常に分かりにくい場所にあった。

鬼神社は、想像していたよりずっと立派な神社だった。

鳥居には、卍の紋章が記されている。神社に卍マークというのは見たことがないので、目を引いた。

社殿前には巨大なブロンズ製の狛犬がいて、高い台座の上から、はめ込みの碧眼が見下ろしていた。

社殿には、大きな鉄の農耕具がいくつも飾られている。鬼が使うという意味合いなのだろうが、鉄の肉厚が薄い。いかにも作り物、飾り物という印象で、凄みが感じられなかった。

境内の空気はひんやりとしていたが、特に異様な感じも伝わってこない。

長居していても仕方ないので、そのまますぐに赤座部落に向かった。

赤座部落は、地図にも地名がのっていない。何度か車を停めて人に訊いたが、知らない人が多かった。

ようやく赤座に続く道を見つけるまでに、四度も車を停める羽目になった。両側は林檎畑で、道路標識の類もない。岩木山に向かって伸びる細い農道を進む。

赤座部落の入り口を示す小さな橋を渡っても、壕太の運転するレンタカーは、人にも車にも出逢わなかった。

鬼壁村の外れにある、山奥の小さな集落。恐らく、総世帯数は十世帯にも満たないのではなか

ろうか。

道に沿って段々畑と古い木造の家屋が点在しているが、家々は、一見ただけでは、廃屋なのか人が住んでいるのかも分からない。

父親が追われるように出ていった村――。

父は死ぬ前に、母はまだここにいるかもしれないと言っていた。近づくなと警告されたが、なぜだろう。山間の僻地故に、特殊な因習などがあるのかもしれないが、別に、取って食われるわけではないだろう。

道が急に狭くなり、この先は行き止まりになっていることを予想させた。スピードを落とし、戻ろうかと思っていたとき、道の脇に鎮守様を見つけた。

壕太は車を停めて降りた。

入り口には鳥居もなく、うっそうと伸びた夏草で、うっかりすると見過ごしそうだ。しかし、その奥には予想以上に広い境内があった。

樹木に囲まれているのに、なぜか蝉の声さえ聞こえない。

静かな境内の奥には、小さな社殿があった。トタン屋根に杉板張りの粗末なものだ。

額には「赤座大明神」と記されている。木の板に墨で手書きされただけの簡素な額だが、古いものには見えない。神社の歴史は古いが、社殿が喪失して新しく建てられたのか、それとも神社そのものが新しいのかはよく分からない。

たった今、鬼神社の立派な社殿や巨大な狛犬を見てきただけに、落差が大きかった。だが、境内の空気は、こっちのほうがずっと異様な感じがする。境内がすっぽりと、説明しがたい「磁場」に包まれているような気がした。

社殿の裏手には墓地が広がっていた。

不揃いに並んだ墓は、どれもが黒っぽい石でできていて、猫足型だった。新しそうな墓はひとつもない。

旅行のときにはいつも持っているデジタルカメラで、その墓地の様子を撮影した。

父が死んだ今、母と双子の片割れを探し出す手がかりはあまりない。少しでもチャンスを広げるために、どんなことでも記録しておこうという気持ちからだ。

墓石に刻まれている家名には、「赤石」と「鬼枝」が多かった。恐らく、この集落にあるほとんどの家の墓がここに集まっているのだろうが、自分の姓である「稲木」はない。父親はこの集落に住んでいたことはあっても、代々ここに住んでいたというわけではなかったのだろう。

壕太は、墓碑銘をさらにひとつひとつ入念にチェックし始めた。もし、母の季絵が死んでいたら、実家である墓に名前が刻まれているかもしれないと思ったからだ。しかし、全部見て回ったが、父親が言っていた季絵という名も、双子の姉であるという那未という名もなかった。

車に戻ろうとしたとき、境内の隅に、不思議な形をした石碑があるのを見つけた。

傘が二つ重なった茸のような形をしている。台座が丸い石二つで、これを鞞丸と見立てれば、「男石」「金精様」など、よくある男根信仰のシンボルにも似ているが、傘――つまり亀頭が二つ重なっているのが妙だ。

石の摩耗具合などから見て、新しいものではない。明治以前、江戸期の可能性もありそうだ。

その奇怪な石碑の周りには、十五センチくらいの男根の形をした石がいくつも立っていた。よく見ると、どの男根にも龍が巻き付いている。まるで、亀頭部分が二段になっている巨大男根石を取り巻いて、並みの男根が傳っているかのようだ。

石碑の裏に回ってみると、台座に細かく文字が刻まれていた。

年号と人名。どうも、一度に彫られたものではなく、かなりの時間をかけて、少しずつ追加されてきたようだ。

いちばん古そうな文字は、ほとんど摩耗して読めない。苔と泥を指先で落としてみると、年号は「天明元年」と読めないこともない。天明元年がいつ頃なのか、壕太には分からなかった。

〈鬼神様雷丸 お宿様ヨリ〉という文字も読みとれた。意味はもちろん分からない。

そこから先は、「鬼人〇〇」と「鬼雛〇〇」という文字が並んでいる。

刻まれた文字をさらに新しいほうへとたどると、最後に刻まれた年号は昭和で、二十年前のものだった。この年号の隣にも文字が刻まれている。

〈鬼神様鋼丸 お宿様高倉季絵〉

……季絵！

父が言い残した、壕太の母親の名前だ。高倉というのは母の実家の姓だろうか。それとも父と別れた後、高倉家に嫁いだのだろうか。

高倉季絵は明らかな人名だから、どうやら「お宿様」というのは祭りの役職か何かだろう。となると、「鬼神様」も同様に役職だろうか。鬼神は「おにがみ」あるいは「きしん」「きじん」と読むのだろうが、「お宿様」は「おやどさま」か？ それとも「おやどりさま」だろうか。

この高倉季絵が自分の実母だとすると、母は「鬼神様鋼丸」と並んでこの石碑に名前を刻まれる意味を持つ人間だということだ。父親が言っていた「鬼の血」と関係あるのかもしれない。

この石碑と、刻まれた文字もデジカメに収めた。

墓地に引き返し、今度は高倉家の墓を探した。

高倉家代々の墓と刻まれた墓は確かにあった。さっき確認したはずだが、もう一度墓碑銘を調べてみる。やはり、季絵という名前はなかった。

そのとき、奥の藪で物音がしたかと思うと、極端に背が丸まった老婆が出て来た。

手には籠を持っている。茸か野草でも採ってきたのだろうか。

老婆は不審そうな目を壕太に向け、立ち止まった。

「こんにちは。この土地のかたですよ？」

壕太は極力自然な口調でそう語りかけたが、老婆は訛りのない共通語を喋る若い男に警戒心を持ったようだった。珍しい動物に出くわしたかのように、壕太の全身を観察している。

「きのご採りさ来たんだが？」

老婆はきつい訛りでそう言った。

「いえ、違います。人を捜しに……」

「このあたりだっきゃ、きのごなんもね」

「いえ、茸じゃなくて、人を捜しに来たんです。高倉さんという家がありますよね？」

「高倉？ ……そごの道ばず一と回って行けば着ぐねハ。だばって、誰もいねえはんで。み

なハア、東京さ出でま<sup>うな</sup>って、戻らね。こ<sup>て</sup>ったさびしげだ村、若<sup>い</sup>げもの<sup>ま</sup>の<sup>し</sup>だ<sup>ま</sup>ば、  
みな出でい<sup>ま</sup>って<sup>ま</sup>るだ。おめえ<sup>ま</sup>さんも、東京がら<sup>ま</sup>が？」

「はい。……でも、出身は青森です。……それで、高倉の家に、季絵という女性がいませんでしたか？」

季絵という名前を耳にした途端、老婆の顔つきが変わった。

「おめえ、誰だば？」

老婆は警戒心をさらに強めた口調で言った。

「稲木という者です。父がもしかしたらこの村の出身かもしれないんで、親族が残っていないかと思<sup>ま</sup>まして……」

「稲木？ 汝、カタナヤのせがれな？」

「カタナヤ？」

父親はこの村ではそう呼ばれていたのだろうか。いや、恐らく屋号だろう。稲木家の祖先は刀鍛冶だと聞いたことがあるから、間違いない。

確かめようとしたが、老婆は血相を変えて、逃げるように立ち去った。歳と曲がった背からは考えられないような素早さだった。

壕太は呆然と老婆の丸い背中を見送った。

正直に名乗ったのは失敗だったのだろうか。

さて、どうする？

誰か他の住民を見つけて、単刀直入に訊いてみることも考えた。しかし、今の老婆の様子はただごとではなかった。「カタナヤ」と呼ばれた父親は、この村で何か問題を起こしたのかもしれない。稲木家に親族がないというのも、もしかしたら、いないのではなく、親戚からつきあいを絶たれるようなことをしたからではないのか。だから父はこの土地に「近づくな」と言ったのではないのか……。

想像が膨らんだが、壕太はとりあえず、今の老婆が言っていた高倉家を確認してみようと思った。誰もいないとは言っていたが、実母の実家なのだとしたら、一度この目で見ておきたい。

老婆が示した道は人が通った気配もなく、ほとんど藪こぎ状態で進まなければいけない部分もあった。方向としては、集落の入り口に逆戻りするような形だ。

その道の突き当たりに、かなり大きな農家が現れた。

茅葺きで杉板張り。庭のあちこちで雑草が腰の高さほども伸び、廃屋であることは一目瞭然だった。

入り口には杉板が打ち付けられ、入れなくなっている。壕太は家の周囲をゆっくり回ってみた。

今、半分藪こぎ状態で進んできた道とは正反対の方向に、ずっとまじな進入路があった。恐らく、この道は集落の入り口方向に続いていて、普通に使われていたのだろう。気づかなかったが、こっちの進入路なら、荒れてはいても、車が入ってこれそうだ。

庭の一角には物置小屋があった。ここは入り口もふさがれておらず、さび付いた取っ手を引くと、戸が開いた。

中には雑誌の山や壊れた石油ストーブなど、がらくたが残されていた。

蜘蛛の巣を手で払いながら中に入ってみた。生活用品の類は調べても仕方ない。残された雑誌や古新聞の山などをかき回していると、教科書や地図帳が出てきた。手に取ってみると、高校の教科書類だった。裏表紙に、〈鬼壁高校二年 高倉季絵〉ときれいな字で書いてある。母親が高校二年のときに使った教科書だ。

奥付を見ると、出版された年号が書いてある。今から二十一年前だ。

……二十一年前!?

自分は今二十三歳だ。もしも高倉季絵が実母だとすれば、自分が二歳のとき、母親はまだ高校生だったということになる。いくらなんでも若すぎる。ということは、高倉季絵は父親が言っていた季絵とは別人か、あるいは父親の話は嘘だったのだろうか。

推理が行き詰まり、悩んでいると、車が近づいてくる音がした。

物置小屋の入り口から見ると、さっき入ってきたのとは別の道を、箱型の四輪駆動車がやってくるのが見えた。

壕太は本能的に危険を感じ、物置小屋から出て、藪の中に身を潜めた。母の使った教科書は手に持ったままだ。

四輪駆動車は家の前に停まり、中から四人の男が降りてきた。さっきの老婆が村の男たちに告げたのだろうか。一人二人ではないところに、殺気に近いものを感じた。

気づかれぬように男たちの様子を窺うと、どうもおかしい。地元の間人ではなさそうだ。真夏なのにきちんとネクタイをした男も一人混じっている。

「ここが高倉季絵の実家です」

開襟シャツを着た中年の男が言った。共通語を話そうと努めているようだが、訛りはかなりきついで、少なくとも青森の間人であることは分かる。

「人は住んでいないんだね？」

そう確かめた声には、訛りはまったくなかった。東京あたりから来た三人のグループを、地元の役場の間人が案内しているという図だ。

「はい。高倉んどごは、だいぶ前にみな東京に出ていきました。すかす、季絵は一人でこの部落に残ったはずです」

「一人で？ 家族が東京に出ていったのにかね？」

「はい。お宿り様でしたんで」

「おやどりさま？」

「はい。このへんの祭りみてなもんで、村を救った鬼の嫁コという意味です」

「鬼の嫁？ ただの儀式的なものかね？」

「はい。詳しいごとは私らも分かりませんが、そう思っただければ」

質問をしているのは、五十前後くらいの男だ。顔はよく見えないが、声にはある種の冷徹さがにじんでいる。

「その儀式のことを詳しく知りたいな。この集落の人たちは、独特の鬼信仰を持っているのかね？」

「はいー。鬼の伝説ば、この部落だけでなく、津軽ではあだりめえにありますが、特にこの村が珍しいってこともねえんですが。例えば、ここよりずっと南さ鬼沢村では、鬼が村さ救ったという伝説ばありまして、これは有名です。あの村さ鬼神社ば、行かれましたが？」

「いや」

「そうですか。有名なんですが。それはまあいいですね。

ええと、それに比べると、ここの部落の鬼信仰はマイナーでして……。私もよく知らねえんですが一、この赤座部落には、独特の鬼神様を信仰している人たちがおるんです」

「独特の？ どんな信仰なんだね」

「大体、二百年に一度、世の中が乱いできだどぎに、神様が鬼を遣わせる、というんですね。選ばいたお宿り様の腹がら鬼が生まいできで、その鬼が、乱いだ世の中を正す……とでも言いますかね、そんな信仰らしいです」

「ということは、お宿り様というのは、鬼を産む母親ということになるのかね？」

「はいー。すかす、誰もがお宿り様にないるわけではねえんです。選ばいだ血の女すか、鬼は産めねえんです。なんせ、鬼は強えですがら、孕まさいだ女も、腹の中の鬼の種に耐えらいねえで、狂い死にするという言い伝えです。ですがら、お宿り様にないる女もまた、百年、二百年にひとりがふたりどいう、選ばいた女どいうごどになりますね」

「ほう。それで、高倉季絵は、なぜお宿り様に選ばれたんだね？」

「それは私には分がらねえです。それに、選ばいだどいっても、儀礼的なもんですがら。この部落の祭りでは、な一んが意味があるんでしようが、私ら本村の人間には分がらねえです」

「儀礼的……か」

質問をし続けている男は、何やら意味ありげにそう言うと、家の入り口に近づいた。

「中に入るぞ」

男の命令で、何人かが、入り口に釘打ちされた杉板をはがしにかかった。しかし、素手では無理だと悟り、そのうちの一人が周囲を見回して、物置小屋を見つけた。何か道具を探そうと思ったのだろう、物置小屋に近づいてくる。

壕太はさらに身を屈め、藪の中に姿を隠した。

男が物置小屋に入り、板を剥がす道具を物色し始めた。

残念ながらパールはない。だが、錆びついた鎌や鉈を見繕って手にすると、男は玄関のほうに戻っていった。

打ち付けられていた杉板が荒っぽく剥がされ、一行は家の中へと消えた。

壕太は、音を立てぬよう注意しながら藪の間を抜け、さっき来た道に戻った。

鎮守様の入り口に停めてあった車に乗り込むまで、誰にも会わずに済んだ。

ここは一旦、この集落から出たほうがよさそうだった。さっきの集団と鉢合わせすると非常にまずいことになりそうな気がした。

壕太は胸の中に言い様のない重苦しさを感じながら、レンタカーをスタートさせた。

赤座部落を出て、鬼壁村を離れ、弘前を通り過ぎ、そのまま東北道にのって、盛岡にまで戻った。

延滞料を払ってレンタカーを戻すと、いちばん早い新幹線で東京まで一気に戻った。

行くときにはなかった骨壺と、古ぼけた教科書が一冊、荷物として増えていた。

△△◎▽▽

「う・う・う……」

老人が微かに呻いた。

「はい？」

彼のおむつを替えていた看護師が、老人の顔を覗き込んだ。

別に苦しいわけではなさそうだ。糞尿で汚れたおむつを、若い女性に替えてもらうという恥ずかしさから、つい漏れた呻き声なのだろう。

看護師は「いいですよ」と言う代わりに、そっと微笑み返した。

老人は落ちくぼんだ目でしばらく看護師の顔を見ていたが、やがて静かに視線を外し、横を向いた。

この老人は余命幾ばくもない。そのことは彼女もよく知っている。

こうした残り少ない命に毎日接していると、肉体というものはかなさと哀しさを思わずにはいられない。

命あるものの定めとして、死ぬのは仕方がない。でも、せめて死と引き替えに、肉体の衰えから来る苦しみや恥辱から解放されないものだろうか。自分もいつかは、目の前の老人のように、老醜を晒しながら死んでいくのだろうか。

つつい、また同じことを考えている自分に気づき、那未は意識的に笑顔を作ってから言った。

「はい。済みました。夕ご飯の前に、また来ますね」

老人は生氣のない視線を再び向けたが、言葉を発することはなかった。

那未が部屋を出ると、院長が廊下に立っていた。まるで那未が出てくるのを待っていたかのようだった。

「何か？」

「豊畑さん、ちょっと来てくれませんか」

そう言うと、院長は先に立って廊下を歩きだした。

那未はただならぬものを感じながら、院長の後に続いた。

ここは群馬県の南端、埼玉県との県境に近い鬼石という町にある病院。同じ敷地内には養護施設も併設されている。

那未は二年前からこの病院で准看護師として働いている。しかし、今まで、院長からこんな風

に直接声をかけられたことはほとんどない。

ドアを開け、院長は那未を先に院長室の中に導いた。

軽く会釈して中に入ると、スーツ姿の初老の紳士が応接用のソファに座っていた。

医療現場にいると、医者顔というものが分かるようになる。もちろん、医者にもいくつかのタイプがあるが、その紳士は、那未が苦手とするタイプの医者特有の匂いを放っていた。

「こちら、<sup>ほらいけ</sup>原池先生だ。東京からいらした」

院長はそう言って紳士を那未に紹介した。

原池と紹介された男は、座ったまま軽く頷いた。

那未はどうしていいのか分からないまま、立ちつくしていた。

「あの……」

困って院長を見たが、院長は黙って那未に椅子を勧めただけだった。

椅子に座っても、腰が落ち着かなかった。

院長が最後に自分の椅子に座った。

そこでようやく、原池という男が口を開いた。

「高倉那未……いや、今は<sup>とよはた</sup>豊畑那未さんですね。探しましたよ」

その口調に、那未はさらに緊張した。

那未は幼い頃から常に、誰かに追われているような圧迫感を覚えながら生きていた。原池という男を目の前にした今、理由は分からないが、ずっと悩まされていた圧迫感の正体を見たような気がした。

高倉という姓には覚えがない。「今は豊畑」とはどういうことなのだろう。

那未が訊き返す前に、原池は落ち着いた口調で自己紹介を始めた。

「私は東京で原池病院という病院をやっています。専門は産婦人科ですが、今は主に、遺伝子治療の仕事をしていて、病院での治療行為にはあまり関わっていません。特殊法人・生命倫理研究協会の理事長も務めています」

そう言いながらも、名刺を差し出すわけでもない。

偉い先生であることは分かった。しかし、それが自分となんの関係があるのかと問いただいたい衝動を抑え、那未は原池の話聞いた。

「いきなりこんな話を聞かされてもびっくりするでしょうけど、実は、あなたのお母さんが先日亡くなったんです」

「え？」

那未は初めて驚きを声にした。

「先日……って……。母とは昨日も電話で話しましたけれど」

父母は伊勢崎市内に住んでいる。この病院で働くようになってからは、行き来は少なくなったが、ときどき電話で互いの近況などを知らせあっている。

「いや、それは養母でしょう。豊畑……敏江さんでしたっけ。養父が豊畑謙吉氏。あなたは一歳半のとき、豊畑家の養子になっていますね」

原池は手元にあった数枚の書類に目を落としながら、まるで業務の伝達のように淡泊な口調

で言った。

那未はすぐには応えられず、黙って原池を見た。

「知らされてなかったんですか。それはそれは。驚かせてしまいましたね。でも、本当ですよ。ちゃんと調べましたから」

そう言うと、原池は書類の中から戸籍謄本のコピーを抜き出して那未の前に差し出した。

「とても興味深い謄本ですね。あなたの実父は稲木俊満さん。実母が高倉季絵さん。

高倉季絵さんは、あなたを産んだとき、まだ十五歳。稲木俊満さんは四十歳です。二人はもちろん結婚していません。親権は高倉家の戸主・高倉史郎兵衛となっています。その後、なぜか一年後に親権が父親の稲木俊満に移り、さらに半年後、豊畑謙吉・敏江夫妻の養女になっている。あなたは一歳半までの間に、何度も親が変わっているわけですね。まあ、一歳半では、何も覚えていなくて当然でしょうが」

「.....知りませんでした」

那未は書類に目を通しながら答えた。

まったく予想もしていなかったことではない。自分が両親の実の子ではないのかもしれないという思いは、漠然とだが、何度か抱いたことがあった。顔や体質が似ていないし、性格も違う。それに、両親は高齢で、実の子だとすれば、母親が四十を過ぎてから産んだ子供だということになる。

だが、那未はそのことを自分から積極的に確認しようとはしなかった。

豊畑家には那未の他に子供はいなかった。両親には可愛がられていたし、家庭は平和だった。自分から真相を無理に知ろうとするのは、親への裏切りのような気がしていたのだ。

子供の頃から抱いていた圧迫感というのは、自分の出生の秘密をいつか知ることになるという不安から生じていたのだろう。

那未は今、はっきりとそう悟った。

「それで、あなたの実母のことですが.....」

原池は那未の心中などおもんばかりの素振りもなく、話を続けた。

「あなたの実母・高倉季絵さんが、先日亡くなりました。そのとき、彼女は妊娠していたんです」

「妊娠.....ですか？」

那未は思わず問い返した。

「ええ。あなたの母親は、あなたを産んだとき、まだ十五歳でしたからね。今、あなたは二十三歳。お母さんもまだ三十代なんです。妊娠しても全然おかしくはない。

しかし、あなたの母親は、その妊娠がもとで亡くなった。それも、妊娠中毒症や不正出産といったよくある死因ではなく、まったく未知の病気がもとで亡くなったんです」

「なんの病気ですか？」

「未知の病気ですから、名称もまだついていません。

この病気に関する詳しい説明は控えますが、ひとつ、大きな問題があります。それは、この病気が、一種の遺伝病であるらしいということです。つまり、子供であるあなたもまた、同じ病気

にかかる、いや、すでにかかっている可能性がある」

話がさらに思わぬ方向に展開し、那未は緊張で身体をこわばらせた。心の準備が何もできていないまま、死刑を宣告されるような恐怖。口の中が乾き、力を入れていないと、身体が震え始めそうだった。

「いや、すまない。いきなり驚かせすぎたかな。もちろん、まったくなんでもないかもしれない。それに、病気と言っても、癌やエイズのように、発病してどんどん進行していくというのではなく、恐らく妊娠しなければ命に関わるようなことはありません」

「妊娠しなければ？」

「そう。この病気は、妊娠が引き金になる。妊娠しなければ、まったく健康なままで生きていける可能性が高い。だから、あなたが今妊娠していない限りは、当面、命の心配をする必要はありません」

「妊娠はしていません」

那未ははっきり宣言した。

本当は、処女だと宣言したかった。今時、二十代になってもセックスの経験がないなどというのは変人扱いされかねないかもしれないが、特別なことだとは思っていない。男を好きになったことはあるが、性交するまでに至らなかったというだけのことだ。健康な人間が風邪薬を飲まないのと同じようなものだと思っている。

今、つきあっている男性もいない。ましてや、子供を作るなど、可能性があったとしても、まだまだ先の話だ。

「うん、うん。それならとりあえずは安心ですね。でも、安心だ、で終わらせるわけにもいかないんです」

原池は続けた。

「この病気については、緊急に研究しなければなりません。最近、若い女性の変死事件が増えていますが、その中にはこの病気が原因と思われる例もあるんです。

とりあえずあなたは今、健康であるらしい。でも、あなたと同じ遺伝形質を持つ若い女性の中には、潜在的なこの病気に気づかないまま妊娠して命を落とす人もいるでしょう。そうなる前に、この病気についての研究を進めないともまずい。分かりますよね？ それには、あなたの協力が必要なんです」

「協力というのは……？」

「いや、別に大したことではないです。血液を採取させてもらうとか、その程度のことです。お願いできますよね？」

有無を言わさぬ口調だった。

「血液採取だけですか？」

那未はすかさず確認した。話の内容から、それだけで済むとは思えなかった。准看護師として、ある程度は予測がつく。

「ええ……まあ、できれば卵子の採取も」

卵子の採取……。

何度か不妊治療の患者も見ている那末には、それがどれだけ屈辱的で苦しいことか分かっていた。

「これは、あなた自身のためでもあるんですよ」

原池はそう言って那末の目を見つめた。

那末は返事ができなかった。



たった四日離れていただけなのに、東京駅に降りた途端、壕太は説明しがたい違和感に包まれた。

やはり自分のルーツは東北にあり、東北の空気が合っているのだろうか。壕太は手に持った父親の骨壺を気かけながら、電車を乗り継いで家へと向かった。

アパートのある多摩地区に向かう京王線の中で、初老の紳士と若者三人のグループが何やら言い争っていた。周囲の客は彼らを避けるようにしている。

シルバーシートを占領していた三人に、初老の紳士が注意したことが発端らしかった。

幸い、三人が次の駅で降りたため、言い争いは暴力沙汰にまでは発展せずに済んだ。車内に広がっていた緊張した空気も消えていった。

降りた三人は、恐らく歳は自分と同じか、いくつかわ若いくらいだろう。なぜあんな風に感情を暴走させるのか、壕太には分からない。

もしかしたら、自分が抱えている、この「世界」に対する違和感を彼らも持っていて、自分とは違う形で外に向けているのだろうか。

そんなことを思いながら、壕太はホームを歩いていく青年たちの背中をぼんやりと見つめていた。

ドアが閉まる瞬間、小さな人影が二つ、無理矢理飛び込んできた。最初のひとはぎりぎりでドアをくぐり抜けたが、もうひとは入れず、両手に持っていたスーパーの買い物袋をドアに挟まれた。

ホームにいた駅員が駆け寄り、閉まったドアをこじ開けようとした。車掌は見えていないのか、ドアは開かない。

ドア付近に立っていた壕太も手を貸してドアをこじ開けた。

少し広がったドアをすり抜けて入ってきたのは少年だった。

ドアは最後まで開かず、そのまま勢いよく閉まった。ホームに立っていた若い駅員が、ムツとした顔で車内に飛び込んだ子供二人を見ていた。

「馬鹿！ さっさと走れよ」

先に飛び込んできた子供が毒づいた。女の子だった。

二人とも小学校高学年くらいだろうか。両手に大きな買い物袋を提げている。店に用意してある袋では最大のものだろう。中には何が入っているのか分からないが、日用品や食料には見えない。

叱られたほうの少年は、ふくれっ面のまま黙っていた。

乗客は二人の子供をやや遠慮がちに観察していた。二人の周囲には異様な空気が漂っていた。

恐らく姉弟だろう。顔が似ている。二人とも頬が膨れていて、目が細い。姉らしいほうは、髪を黄色に染めているが、手入れしていないので、ひどく汚らしく見える。背格好からは子供に違いないのだが、子供らしい表情はみじんもない。場末の飲み屋で毒づいている娼婦のようだ。

弟らしいほうは、汚れたシャツとズボンを身につけていて、あまり風呂にも入っていないという風情だった。

親に言われて何か買い物に行かされた帰りなのか、それともどこかの店で派手な万引きでもして逃げてきたのか。

いずれにせよ、生まれてこの方、およそ幸福というものとは縁遠い暮らしをしてきたに違いなかった。いつもいつも何かに堪え続けてきたことが、この歳で痛々しいほど顔に刻み込まれている。

壕太はこの二人の子供に、自分と、まだ見ぬ双子の姉・那末の姿をだぶらせた。

親の元を離れずに暮らしていたら、自分もまた、こんな風に荒んだ暮らしをしていたのかもしれない。

社長のもとに預けられて暮らした子供時代、幸せだと思ったことはないが、特別に不幸だと思ったこともなかった。

絵に描いたような一家団欒などは、最初から縁のないものだと言っていたし、それほどほしいとも思わなかった。

ひとりで生きていくぶんには、あらゆることを自分で決められる。本当に嫌なことはしなければいいし、飢えても、路頭に迷っても、その結果、誰かを悲しませることはない。その気楽さが自分には合っているような気がしていた。

目の前の姉弟を見ていると、やはり双子の姉・那末の存在など、知らないほうがよかったのかもしれないとも思えてきた。

不幸の匂いが染みついた姉弟は、壕太が電車を降りてもまだ乗っていた。どこまで帰るのだろうか。

アパートに戻り、玄関の前に立ったとき、何か異様な空気を感じた。

中に誰かがいるような、あるいはどこかから見られているような気がしたのだ。思わず周囲を見回したが、前の道を、作業服を着た男がひとり歩いていくのが見えただけだった。

ドアを開け、中に入った。留守にしていた時間分、「よどみ」があってもよさそうだが、部屋の中の空気は、ついさっきまで動いていたような、妙な感触だった。

どうしたのだろうか。今までそんなことはなかったのに、弘前に行ってから、あらゆる場面で無意識のうちに周囲の空気を敏感に嗅ぎ取っている気がする。

留守番電話には、無言のメッセージが数回入っていた。発信人の電話番号は記録されていない。

机の上のメインマシンの電源を入れ、メールをチェックした。

仕事関連のメールは一通もなかった。ほっとする。

ウイルスメールや、いくつかの<sup>ス</sup>広告<sup>ム</sup>メールに混じって、鬼澤<sup>バ</sup>荘の主人からのメールが届いていた。

-----

To: 稲木様

From: onizawa-so

Subject: 山倉@鬼澤荘です

山倉@鬼澤荘です。このたびはご利用ありがとうございました。無事、帰着できましたでしょうか。

当所にご滞在中のご不幸、心よりお悔やみ申し上げます。本当に大変でしたね。ご心痛、お察し申し上げます。

赤座部落には行かれましたか？ また、何かご縁がありましたら、遠い場所ではありますが、ぜひお越しく下さい。心よりお待ち申し上げます。

弘前 鬼沢村 民宿鬼澤荘

簡単に「お世話になりました」という内容の返信を書いていた。

冷蔵庫から冷酒を出してくると、つまみなしで飲みながら、いつものように縄文村のサイトを訪れた。

会員専用チャットルームに人がいることを示す青いアイコンが出ていた。

チャットルームというのは、同時にインターネットにアクセスしている人間が、文字で会話をする場所だ。縄文村のサイトでは、会員登録をしないと、チャットルームに入るパスワードが貰えないのだが、登録会員はそれほどいないので、チャット中の会員に遭遇することはあまりない。

入ると、サイト管理者の下倉Kと、常連のひとり、レミーが話し込んでいた。

二人の会話が画面に映し出される。

レミー >じゃあ、田村麻呂は津軽まで行っていないの？

下倉K >そういうこと。坂上田村麻呂は、今の岩手県あたりまでしか進軍してきてないはずなんだよね。青森のねぶたのルーツは田村麻呂だっていう説もあるけれど、青森にまで到達したのは、田村麻呂の次の征夷大將軍のはず。

レミー >なんていう人？

下倉K >えーと、なんだっけ。あ、思い出した。ぶんやのわたまる。字はね……文室綿麻呂だ。特製人名変換辞書に入ってたよ。一発変換。便利だね、IMEってのは。

レミー >特製って、どういう辞書なのよー（笑）。それにしても博学だよなー。いつもいつも感心しちゃうわ。でも、征夷大將軍って、東北蝦夷にとっては侵略者でしょ？ それがなんで英雄になっちゃうのー？

下倉K >そのへんが日本の歴史の面白いところだよな。後の支配者がうまく情報コントロールをしたんだろうね。

・・・さしみさんが入室しました・・・

下倉K >ん？ さしみさんだ。久しぶりだね。

さしみ >こんちは。ちょっと留守にしていたんですよ。

レミー >旅行？

下倉K >どこに？

さしみ >弘前に。

下倉K >へえ、今ちょうど、東北蝦夷の話をしていたところ。

レミー >下倉さん、すごい博学でさー。

さしみ >学者だから。

レミー >えー？ そうなのー？ >下倉さん

下倉K >違うよ。

さしみ >比喩的に言ったんですよ。

下倉K >あ、そ。ところで弘前へは観光で？ 土産話はないの？

さしみ >土産話っていうのとは違うけど、いろいろありましたよ。

レミー >なにになに？ >さしみ

さしみ >何から話せばいいかな。まず、父親が死んだ。

そこで一瞬、画面が動かなくなった。

下倉K >それは、なんと言っているか。じゃあ、弘前のご実家なの？

さしみ >実家……と言えるのかどうか分からないんですけどね。とにかく、たったひとりで葬式してきましたよ。

下倉K >ひとりで？ なんだかいろいろわけありみたいだね。

さしみ >わけありですよ（苦）

下倉K >あんまりきいちゃいけないか。

さしみ >そんなことはないけど、簡単には説明できないことばかり。ちょっと疲れましたね。

下倉K >それはそうでしょう。お疲れさまでした、って言っているのかな。なんか変だけど。

さしみ >あ、いや、そんな気を遣わないでください。チャットのムードを変えてしまったかな。ごめんなさい。

レミー >あ、ごめんね。ご飯だって呼んでるから、私、落ちる。

さしみ >バイバイ>レミー

下倉K >じゃあな>レミー

・・・レミーさんが退室しました。・・・

やはりムードを壊してしまったのだろうか。壕太はだんだん気まづくなってきた。

さしみ >父親が死んだ話から始めたのがまずかったですね。東北蝦夷の話の続き、よかったですらしてください。ぼくもちょうど弘前に行ってきて、そのへんのことには興味があるところですから。

下倉K >どこから始めればいいのかなあ。猿賀神社の話は？

さしみ >いえ、知りません。

下倉K >行ったことある？ 弘前のそばだけど。

さしみ >いえ、ないですね。

下倉K >猿賀って町があるでしょ。弘前の東に。

さしみ >いえ、知らないです。

下倉K >あれ？ 弘前出身ではないの？

さしみ >弘前にいたのは小学校に上がる前までなんです。以後はずっと東京。父親にもそれ以来会ってなくて、顔もほとんど覚えていなかったくらいです。

下倉K >なんかいろいろ大変みたいだね。あ、わるい。来客だ。続きは明日にでも。明日の夜もチャットルームに常駐しているから。でも、なんか、チャットでやる話でもないのかな。よかったら今度メールしてください。

さしみ >ええ。

下倉K >もしかして、結構深刻な状況にあるのかもしれないけど、私によければいつでも話相手になりますから。

さしみ >ありがとう。

下倉K >じゃあね。また近いうちに話しましょう。いろいろ大変でしょうけど、元気出してくださいね。

・・・下倉Kさんが退室しました・・・

誰もいなくなったチャットルームに、壕太はひとり残された。

下倉Kもレミーも、直接会ったことはないし、電話で話したこともない。年齢も性別も知らない。恐らく、下倉Kは中年男性で、レミーはまだ若い女性だろうと想像しているが、それも彼らが自分たちで作り上げたキャラクターで、本当は逆なのかもしれない。

インターネットの世界は、いつでも虚実が複雑に同居している。それが壕太には一種心地よかったし、今まではこうした質感のないコミュニケーションのほうが気が楽だった。

だが、今は違う。何か違う、実体のあるつながりがほしかった。

動かなくなった画面を眺めながら、壕太は無性に「人」と触れあいたかった。

これ以上あてのないネットサーフィンに出たいとも思えなくなり、壕太はインターネットとの接続を切った。

麻酔が覚め、気がつくと、ベッドの上に寝かされていた。

病室にしては広すぎる。どこなのだろうか。

原池病院の中ということは見当がつく。

原池病院に連れてこられてすぐ、那未は、検査と称して身体をいじり回された。採血され、レントゲンを撮られ、尿検査もされた。最後に診察台に寝かされ、検査薬と称する薬物をのまされてから、意識がなくなった。騙されて、全身麻酔をかけられたのだった。

自分の姿を確認すると、見覚えのないパジャマを着せられ、ブラもショーツもしていない。

那未は恐る恐る、パジャマの下の肉体をチェックした。

陰毛が一部剃られている。

ひどい。

何が「血液検査程度」だ。無理矢理全身麻酔をかけて、やりたい放題ではないか。

股間に違和感が残っていた。膣口から器具を挿入され、何かの検査をされたに違いない。腕には注射の痕も残っていた。

なぜこんなことになったのだろう。

このままでは秘密裏に実験動物扱いされてしまう。

那未は自分が置かれている状況に慄然とした。

那未が勤務していた病院は群馬県鬼石町にあり、名の通った医療法人が経営するかなり大きな病院だった。その院長室に呼ばれ、原池と名乗る東京から来た医師に衝撃的な話を聞かされたのが二日前。院長にも「協力」を命じられ、ほとんど強制的に東京に連れてこられた。

伊勢崎市内に住む年老いた両親には、心配をかけないように、新しい業務に関する長期講習があるのでしばらく東京に行くと言明した。実の親ではないと分かっても、そのことは一言も口にしなかった。

あの日のうちに新幹線で東京に連れてこられて、ここ、原池病院に入った。思えば、あまりにも急な展開だ。

那未は、まるで自分の身体全体が、移植用の臓器として扱われているような気分だった。鮮度が落ちないうちに、アイスボックスに入れられ、移植患者のもとに運ばれる。完全に「物」としての扱われ方ではないか。

同僚たちがいる職場で自分が「検査」されるのは嫌だったので、連れられるままに原池病院にまで来たが、どこか不自然だ。遺伝病という説明も、今となっては素直には信じられない。

そもそも、一体どんな権利や理由があって、彼らは私の身体を勝手にいじりまわすのか。

准看護師資格を取り、医療現場で働くようになってまだ日が浅いが、現代医療の問題点については、日頃からいろいろ考えさせられることが多い。検査漬けの果てに死んでいく患者を見ていると、治療という名目で行われている人体実験なのではないかと思えるケースもあった。

患者が生きているうちから、肥大した心臓や癒着した卵巣を「サンプル」として欲しがって

る医師もいる。

私の身体もまた、医師たちにとっては喉から手が出るほど欲しい貴重なサンプルなのだろうか？

逃げなければ。

このままでは殺されてしまうかもしれない。

そう決意したとき、ふいに部屋のドアが開いて、白衣を着た人間が二人入って来た。

一人は、あの原池という医師だ。

もう一人は、三十代後半くらいだろうか、白衣に身を包んだ女性だった。しかし、明らかに看護師ではない。この女性も医者だろう。整った顔をしているが、那未にはそれがかえって嫌みに感じられた。優秀な頭脳を持って生まれ、エリート教育を受けてきたのだから、その上、顔の造形まで美しいのでは不公平というものだ。

「麻酔は醒めたようね」

その、顔立ちの整いすぎた女医が言った。自信に満ちた口調が、さらに那未に嫌悪感を抱かせた。

「何をしたんです。一方的に麻酔をかけるなんて、あんまりじゃないですか」

那未は毅然とした態度で抗議した。

「ごめんなさい。怒るのも無理はないわよね。私が最初からついていれば、こんな強引なことはさせなかったんだけど。……でも、誤解しないで。これはあなたのためでもあるんだから」

「私のため？ 嘘！ 私は健康です。何をしたんです、一体」

「安心して。血液や卵子を採取しただけよ」

「だけですって？ なぜそんなことをするんですか。きちんと説明をしてください」

「説明はしたつもりだよ」

那未の怒気を封じ込めるかのように、今度は原池が言った。

だが、那未も黙ってははいられない。

「全然してないですよ。未知の遺伝病？ そんなの変です。病気だと言うなら、ちゃんとした病名を教えてください」

「未知の症例だから、名前はないと言っただろう」

「そんなんじゃ、納得できません。私は健康です。検査して、何か異常でも認められたんですか？」

「今のところは何も。健康そのものだ。処<sup>ヒ</sup>女<sup>ン</sup>膜<sup>メ</sup>も完全で、きれいなものだった」

原池は、悪びれずに言った。

那未は怒りと恥辱で言葉を失った。こんなことが許されていいはずがない。

那未の心中を見透かしたかのように、原池が言った。

「君が納得できないのは無理もない。でも、急がなければならない事情があつてね。強引だったことはお詫びしたいが、我々としても、最善を尽くしているつもりだ」

「冗談じゃないわ。私が何をしたっていうの？ 検査はもう済んだんでしょ？ 異常なしだったんでしょ？ それなら帰してください」

「まあ、そう興奮しないで。話はそんなに簡単じゃないんだ。これは個人的な問題にとどまらず、社会的、国家的な問題に関わることなんだ。もう少しここにおいて、協力してもらいたいんだよ」

「どういうことですか？」

「簡単には説明できないが、とにかく信用してほしい」

「信用ですって？ 無理です。帰ります」

「帰すわけにはいかない」

原池は、完全な命令口調になっていた。

「何の権限があってそんなことができるんですか。私は罪人じゃないし、法定伝染病患者でもないんですよ」

「そうだね。もっと難しい立場にあるかもしれない」

「警察に連絡します。これじゃあ監禁じゃないですか」

「警察か。残念ながら、警察のトップもこのことは承知しているんだ」

そう言うと、原池は意味ありげな目で那未を見つめた。

その視線に異常なものを感じ取り、那未は思わず身を固くした。

那未が身体をこわばらせたのを見て取り、女医が原池をやんわりと制するようにして、再び話し始めた。

「ごめんなさい。急がなければならない理由があって、かなり無茶をしていることは確かだわ。でも、信じて。あなたに悪いようにはしていないから。今すぐには分かってもらえないと思うけど……。

私たちとしても、気を遣ってはいるのよ。とにかく、私たちはあなたの味方よ。それも、大切な味方だと思うわ。そのうち、必ず分かってもらえるはずよ」

「あなたは……？」

那未は不安と懐疑に満ちた目で女医を見つめた。ほんの少しでもいいから、彼女の言葉に誠意が込められていることを祈りながら。

「あら、ごめんなさいね。挨拶が後になってしまって。

私は<sup>あかいし</sup>赤石 礼子。生物科学研究所の主任研究員で、専門は遺伝子治療……」

「お医者さんじゃないんですか？」

「医師免許は持っているけれど、仕事としては医師とは言えないかもしれないわね。治療の現場にいるわけじゃないから」

「でも、ここは病院なんですよ？」

「ええ。れっきとした病院よ」

「なぜあなたは……いえ、私はここにいるんです？」

「それは……、これから少しずつ話していくわ。とりあえずは、よろしく。私はあなたがたの味方よ。忘れないで」

「あなたがた？」

「ええ。弟さんはまだ見つかっていないけれど、近いうちに……」

「弟？」

那未は驚いて問い返した。

那未の反応を見て、赤石礼子と名乗った女性は、意外そうな顔で原池のほうを振り返った。

「ああ、彼女にはまだ伝えていなかったんだ」

原池が言った。

「最初に君の出生の秘密を教えたとき、言ってもよかったんだが、いっぺんに多くのことを伝えても混乱するだけだと思ってね」

「なんなんですか？」

那未は少しうわずった声で訊いた。

「君の母親・高倉季絵は、君と同時に男の子を産んでいる。つまり、君には双子の弟がいるんだ。双子だから別に兄でもいいんだが、戸籍上は君が姉ということになっているようだ」

「嘘……」

「本当さ。こんな凝った嘘をついてどうする」

「双子の弟？ 私に？」

「そうだ」

「名前は？」

「壕太。稲木壕太という名前だ。稲木は君の実父の姓だ」

「ごうた？」

「そう。壕は土偏にオーストラリアの豪。それに太いという字の<sup>た</sup>太だ。そこまでは分かっているんだが、父親が子供のときに手放していてね。今、行方を追っているところだよ。まあ、すぐに見つかるだろう」

那未は驚きのあまり、言葉をなくした。

その様子を見て、赤石礼子が、改めて言った。

「私はあなたがたの味方よ。あなたがたのことは、私が責任を持ってお世話しますから、安心して」

礼子は不思議な笑みを浮かべていた。

那未は何か言おうとしたが、喉がからからに渴いて、言葉が出てこなかった。

△△◎▽▽

コンビニへ食料を買いに行くためにアパートの玄関を出たとき、またあの違和感を感じた。

弘前から戻ってきたときに感じた、誰かから見られているような感覚だ。

思わず周囲を見回してみたが、人の姿はなかった。

すぐ近所のコンビニに行くだけだったが、念のため、ドアには鍵をかけた。

アパートの前の道を歩き始めたとき、背後に、今度ははっきりと人の気配を感じた。

振り返らず、わざと路地を曲がってみた。さらに狭い路地へと入り込み、誰かがつけてきてい

ないかどうか確かめた。

数分待ってみたが、誰も追ってはこなかった。

気のせいだったのだろう。どうも弘前から戻ってきて以来、感覚が妙に鋭敏になっている気がする。

念のため表通りには戻らず、そのまま少し遠回りをしてコンビニに入った。

食料を物色していると、作業服を着た四十代くらいの男が入ってきた。なぜかその男の存在が気になった。

作業服……。

そういえば、弘前から帰ってきて、アパートに入ろうとしたときも、外に作業服を着た男がいた。顔までは見えなかったから同じ男かどうかは分からないが、思い出した途端、ますます気になり始めた。

車で乗りつけてはいないので、歩いてきたことになる。近所に住んでいるか、付近に仕事の現場があって、そこを抜け出してきたのなら分かるが、どちらもあてはまらないような気がした。

男は雑誌コーナーに行き、立ち読みを始めた。しかし、男の神経は雑誌には向いていないように見える。

壕太はわざとその男の隣に立って、同じように雑誌の立ち読みをするふりをして観察した。

男は無精髭を生やしていた。顔を見られるのが嫌だとでもいうように、微妙に身体を回して壕太に背を向ける。

よく日に焼けているから、実際に外で仕事をしていることは間違いない。

やはり気のせいかと、雑誌を戻し、レジに向かおうとしたとき、男のポケットから出ているキーホルダーが目にとまった。

燻し銀の小さな飾り。その形には見覚えがあった。

二段のくびれがある亀頭を持つ男根に龍が巻き付いている。

——そう、赤座部落の墓地で見かけた、奇怪な石碑と同じだ。

壕太は思わず息を呑んだ。が、男に悟られぬよう、すぐに何食わぬ顔でそばを離れ、買ったものをレジに運んだ。

コンビニを出てからは、さっきの作業服の男がつけてくるかどうかを確認した。

男はすぐには追ってこなかったが、明らかにガラス越しにこちらの動きを目で追っていた。

アパートに戻ってからも、しばらくは落ち着かなかった。

作業服の男が部屋の前まで追ってきた様子はなかったが、あいつに見張られているのかもしれないという疑念は膨らむ一方だった。

なぜ？

男根に龍は、なんのシンボルなのだろう。それとも、自分が知らないだけで、結構ありふれたものなのだろうか。

壕太はインターネットに接続して、「男根 龍」というキーワードで検索をかけた。

〈中国に伝わる風水思想では、すべてのエネルギーは龍脈という言葉で表される。龍脈、すなわ

ちエネルギーの流れの行き着く果ては龍穴である。男根が女陰を求めるように、この世を動かしているエネルギーの帰着する場所としての龍穴こそ、母なる大地の根源である。

龍穴を守るのは鬼である。

鬼は龍穴の入り口、すなわちこの世とあの世の境界線に立ち、二つの世界を同時に見守っている。龍脈は龍そのものといってもよく、母なる大地に突き刺さるペニスである……>

そんな訳の分からない文章がヒットしただけで、何の解決にもならなかった。

しかし、思いがけず「鬼」という言葉が出てきたことで、壕太は死んだ父親が言っていた「鬼族」のことを思い出した。

鬼は空想の生き物だとしても、鬼を崇拝する集団は現実にいるのかもしれない。その集団のシンボルマークが「男根に龍」だとしたら、さっきの作業服の男もそのメンバーなのだろうか？

いろいろな想像が頭の中をめぐるが、考えとしてはまとまらなかった。

……と、そのとき、壕太はあまりにも単純なことをし忘れていたことに気づいた。

高倉那未、高倉季絵という名前を、インターネット上で検索してみることをしていなかった。まさかとは思うが、やってみない手はない。

すぐにGOOGLEで試してみたが、どちらもヒットしなかった。

那未も季絵もそれなりに珍しい名前ではあるから、次に名前だけを入力してみた。今度は、季絵は九十三件、那未は一万千七百件もヒットしてしまった。

那未は、ほとんどが中国語のサイトの中に出てくる文字列だったので、改めて日本語のサイトに限定して検索してみると、百七件にまで絞り込めた。その中には、江那未や魅那未などという名も含まれる。世の中には珍奇な名前があるものだ。

それらを除外し、明らかに年齢的にあてはまらないものも除いていくと、季絵も那未も数件にまで絞り込めた。

が、そこで急に徒労感を覚えた。姓が特定できない以上、あまり意味はないではないか。

これで最後にするつもりで、ほとんどふざけ半分で、「那未」「鬼」という二つの単語を組み合わせさせて検索してみたところ、こんなものがヒットした。

<星魅那未 >おお、カインよ。罪深き聖標（ミシルシ）の者よ。怖れることはない。この檻はただの記号にすぎません。

ケイン・ルーク >人間とは、彼方と此方を結ぶゴーゴンの魂。少女はそのとき暴君の記憶を甦らせた。

星魅那未 >猫耳の少女はそのとき初めて知った。檻に繋がれた少年の髪は深い碧。頭に生えているのは短い角だろうか。

ケイン・ルーク >角があるのは鬼族の標かと。でも、改造後なら先入観は禁物ですね。……>

アニメオタク系サイトのチャットログらしい。これはパス。

こんなものもヒットした。

<鬼石町健康マラソン 5kmの部 結果 .....女子13位 豊畑那未（帝国良生会育英病院）.....>

思わず苦笑が漏れてしまった。

アニメオタク系のチャットログよりはるかに「可能性」はあるが、やはり雲を掴むようだ。鬼石町とはどこだろうか。その町が主催したマラソン大会で、豊畑那未という女性が5kmの部で13位に入った（5kmでマラソンと呼べるのか？）。病院に勤務しているようだから、看護師か女医かもしれない。

もしかしたら、この女性が、豊畑という男性と結婚したり、養子になったりして姓が変わった、双子の姉という可能性もないではない。その気になれば、調べられるはずだ。その病院に電話をかけてみればいい。しかし.....。

なんだか、考えただけで面倒になってきた。要するに、人捜しは根気とやる気の問題なのだろう。

いろいろと検索しているうちに時間が経ち、夜になっていた。

そういえば、下倉Kが、今夜もチャットルームに常駐していると言っていた。いるだろうか。縄文村のチャットルーム「井戸端」に入ってみると、下倉Kだけが入室していた。接続していますよという意思表示だけして、誰か来るのを待っている状態だ。

壕太はすぐに自分も入室して、下倉Kに声をかけた。

・・・さしみさんが入室しました・・・

さしみ >こんばんは。

下倉Kから返事はなかった。多分、接続したまま別の仕事をしているか、席を外しているのだろう。

そのまましばらく待っていると、ふいに画面が動いた。

下倉K >あ、ごめんごめん。気がつかなかった。こんばんは。

さしみ >お言葉に甘えてやってきました。

下倉K >昨日は途中で落ちてごめん。弘前の話の続きをやりましょうか。

さしみ >それより、下倉Kさんは、男根に龍が巻き付いているシンボルって見たことありませんか？

下倉K >???

さしみ >すみません。今ちょっと気になっていて。

下倉K >男根に龍.....どこかで読んだ記憶があるけれど、今すぐには思い出せないなあ。

さしみ >読んだ記憶ってありますか？

下倉K >どこかの鬼伝説に関連した資料だったかな。大江山じゃなくて、広島……ああ、忘れた。

ここでも鬼という言葉が出てきたことで、壕太は少なからず驚いた。

さしみ >大体でいいですから教えてください。それって、何かの集団のシンボルマークじゃないですか？ 鬼を崇めている集団とかの。

下倉K >あれ？ さしみさん、すごいですね。鬼族のことを知っているんですか？

鬼族！

まさに、父親が言っていた言葉が下倉Kから発せられたことで、壕太は画面に釘付けになったまま息を呑んだ。

さしみ >鬼族ってなんなんですか？

下倉K >あ、やっぱり違うか。失敬失敬。

さしみ >いえ、違わないです。鬼族でいいんです。鬼族のことを教えてください。

下倉K >いや、私はよく知らないですよ。さしみさんが知っているなら逆に教えてくださいよ。

さしみ >ぼくは全然。なんか、そんな集団がいるらしいということくらいしか。

下倉K >私も同じですよ。

さしみ >でも、今下倉Kさんのほうから「鬼族」って言い出したんですよ。これ「きぞく」ですよ？

下倉K >おにぞくっていう人もいるみたいだけど、私はきぞくって言っているなあ。

さしみ >教えてください。その鬼族のこと。危ない連中なんですか？

下倉K >危ないって、どういう意味で？

さしみ >狂信的で、暴力を肯定しているとか、そういう意味です。

下倉K >そこまではちょっと分からないけど、以前、鬼の腕事件というのが話題になったことがあって、そのときに鬼のことをいろいろ調べたんですよ。男根に龍というの、そのときに読んだなんかの資料に出ていた気がするんだけど、詳しくは覚えていないなあ。大体、鬼族が現代にもいるのかどうかは確信が持てないし。私が知っているのは、鬼族のルーツは山で暮らしていた製鉄民で、中央政府に支配されることを拒み、全国に散らばっていったということくらいです。サンカに似ているよね、そういうところは。

さしみ >すみません。サンカのことは知らないし、この際どうでもいいんです。知りたいのは鬼族のほうです。製鉄民って、鉄を作っていた人々ということですよ？

下倉K >そう。鬼っていうのがそもそもそうですよね。山奥で鉄を作っていた連中のことを鬼と呼んだんじゃないかという説がありますよね。特に、岩木山周辺の鬼伝説は、全部、鉄がらみでしょう？

さしみ >いえ、それもよくは知らないんです。

下倉K >じゃあ、なぜ鬼族のことを知りたいの？

そう訊かれて、壕太は答えに窮した。どう言えば分かってもらえるのだろうか。

さしみ > ぼくが鬼族と何らかの関係があるかもしれないからです。

思いきってそう入力した。

下倉K >え？ さしみさん、鬼族なの？

さしみ >いえ、それは分かりません。少なくとも自分ではそういうつもりはないんですが、鬼族のほうではそう思っているかもしれない、というか。

下倉K >???

・・・レミーさんが入室しました・・・

さしみ >すみません。変な話で。やっぱりチャットでは限界があるので、この話は改めてメールします。

レミー >あれ？ あたし、じゃまだったあ？

さしみ >レミーさん、こんばんは。そうじゃないよ。全然関係ない。

レミー >うっそー。なんか怪しいなあ。さしみさんと下倉Kさんって、怪しい関係だったりして？

下倉K >あ、ばれた？

レミーが入ってきて、鬼族の話はすっかり寸断された。

しかし、ちょうどいいタイミングだったのかもしれない。パソコンで会話するには、あまりにも難しい話だ。

壕太は、レミーを交えての馬鹿話にしばらくつき合っていたが、きりのいいところでチャットルームから抜けた。

その夜はなかなか寝つけなかった。

明け方近くになって、壕太は再びパソコンに向かい、下倉Kにあてて長いメールを書き始めた

。

---

To: Shimokura-K

From: sashimi

Subject: さしみです

下倉K様

さしみです。

先ほどはいろいろ質問攻めにしてすみませんでした。変に思われたかもしれませんが、いきなりなんなんだ、こいつは、と。

実は今、自分のルーツについて悩んでいます。

まだ直接会ったこともなければ、どのようなかたかも存じ上げない下倉Kさんに、こんなことを書くのはどうかと思いますが、よかったら少しだけおつきあいください。

私は五歳の時に親元から離され、他人の家で、丁稚のような形で育てられました。母親の記憶はまったくありません。記憶にあるのは父親だけですが、その父は先日、癌で死にました。

病院から人伝えに、もう長くはないという連絡が入ったのですが、見舞った翌日に亡くなりました。

私ひとりの手で茶毘にふし、遺骨は埋葬すべき墓も分からないまま、今、手元にあります。親族なども、いるのかいないのか分かりません。

父は死ぬ前に、私には死んだと聞かせていた母が、実はまだ生きているかもしれないことと、私には双子の姉がいることを告げました。予期せぬ告白で驚きました。

父の話では、母と姉は別々の場所にいるようです。やはり、気にならないと言えば嘘になります。どうしても探し当てたいという気持ちとはちょっと違うのですが、会えるものなら会いたいと思うようになりました。平穩に暮らしているのなら、このままお互いの消息を知らないままでもいいのかもしれませんが。

で、話を「鬼族」に戻します。

どうも、私の家系には、何やら「鬼」にまつわる因縁がついてまわっているようなのです。父は死ぬ前に、母は「鬼族（きぞく）」の血を引いていると言いました。

母の出生地は、西津軽郡の鬼壁村赤座という小さな集落です。

実は、弘前から戻る前に、その赤座という集落に行ってきました。すでに廃屋となっている母

の生家に、警察関係者とおぼしき集団が訪ねてきて、何やら調査をしていました。

彼らもやはり、鬼がどうのこうのという話をしていました。

こうなると、やはり単なる好奇心以上の問題として、鬼のことが気になります。

下倉Kさんは、「鬼族（きぞく）」について、もっとご存じなのではないでしょうか。あれだけ博学（それも一般的な知識とはかけ離れた部分での情報ばかり……汗）な下倉Kさんのことですから、きっとまだ何か、いろいろご存じではないかと思うのですが。

あるいは、調べる手だてをお持ちではないですか。何かヒントになることだけでもいいんです。「鬼族」の情報がほしいのです。

ちなみに、父の姓は稲木、母（どうやら父とは未婚だったようです）の姓は高倉といます。

問題の赤座という集落には、赤石と鬼枝という姓が多いようでした。赤石、鬼枝、高倉……これらの姓と「鬼族」は何らかの関係があるのかもしれませんが。でも、鬼枝はまだしも、高倉や赤石は珍しい姓とは言えませんしね。姓から調べていくのは無理かもしれません。

赤座部落で撮影した写真画像もいくつか添付します。話に出た「男根に龍」の写真も入れておきます。

なんだか変なことを書いてしまいました。面倒に感じましたら、このまま無視してください。ネット上の人間関係に、こうしたプライベートなことを持ち込むのはルール違反かもしれません。そうお感じになったら、ほんと、完全に無視してください。私は少しも不快には思いませんので。

ではまた。 さしみ

---

最後の署名のところで、少し悩んでから、「さしみ（こと、稲木壕太）」と、本名を書き添えた。

インターネットの世界では、こんなことにもとても気を遣う。

縄文村では、本名を名乗っている者もいるが、ハンドル名だけで、正体を積極的には明かさないう者もたくさんいる。女性名、例えばレミーというハンドルにしても、女性風の名前だから女性だとは限らない。

下倉Kは多分男だろうが、もしかしたら男性のふりをしている女性かもしれない。

自分が使っている「さしみ」というハンドルにしても、男か女か、年齢がいくつかなどは想像がつかないだろう。

普段はお互いそんなことはあまり気にとめないし、深く追及もしない。年齢や性別、職業や社会的な地位を超えて、純粋に理性と理性だけでコミュニケーションできることがネットの魅力でもあり、お互いの素性については言及しないことが暗黙のルールになっているようなところがある。

今まで一定の距離を保っていた下倉Kとの関係を、実名を確かめ合う煩わしい関係に移行させるのは気が引けた。

何度か悩んだが、夜明け近くまで眠れないほど脳が覚醒しきっていたことも手伝って、最後は送信ボタンを押してしまった。

赤座で撮った写真も、適当な大きさにファイルを加工してから添付した。写真をつけることが、いささか重い内容のメールを送る言い訳になるような気もした。

赤座部落はもう一度訪ねてみる必要があるだろう。あそこには確実に母・高倉季絵の情報があ

る。多分、再訪の時期はそう遠くはないだろうと思いながら、壕太はまだ興奮が鎮まらない脳を、枕の上に横たえた。

△△◎▽▽

どこからどこまでが敷地なのか分からないような農家。

軒先まで車を入れようとした古平<sup>こだいら</sup>警部補に、助手席の岡辺<sup>おかべ</sup>警部が声をかけた。

「このへんに停めて、歩きましょう。いきなり玄関先に警察車両を何台も乗りつけるのは、ちょっと無神経でしょうから」

「はい」

古平は素直に指示に従った。

岡辺は警視庁から派遣されてきた警部だ。

東京からは百人を超える特別捜査班が派遣されてきた。青森県内で強姦事件を重ねている「鬼」を探し出すためだ。

岩木のアベック暴行殺人事件は、今や古平の想像を超えた大事件へと発展していた。当初、自分が指揮を執るはずだったのが、警視庁から来た年下の警部にこうして命令されて動く羽目になっている。

古平としては当然面白くなかったが、それ以上に、この事件の本当の意味を、未だに掴めないことに苛立っていた。

東京から極秘裏に大規模な応援部隊が青森入りしている。その理由は、アベックを襲った男が未知の伝染病に罹っていて、人に感染させる恐れがあるからだという。しかも、その病気というのは、「国家機密」に関わるほどのものらしい。

だが、そうだとしても、詳細を教えられないまま捜査しろと命じられるのは納得できない。

上層部は、何か重大なことを隠しているに違いない。それを感じながら、命令には従わなければならないという自分の立場が、古平には無性に歯がゆかった。

岩木アベック暴行殺人事件の犯人は、男を素手で殺した後、女を犯した。

被害者の女性・山栗<sup>やまぐり</sup>怜名<sup>れな</sup>は、暴行されたショックで心神喪失になり、五日前に入院していた病院で死亡した。医師たちも、なぜ怜名が急死したのか、まったく分からないと言う。しかし、実際に、怜名の心臓は突然止まってしまったのだ。

未知の伝染病という話に、古平は最初半信半疑だったが、怜名が原因不明の死を遂げた今は、

かなり現実味を帯びて感じられるようになった。

古平は岡辺警部と共に農家の前に立った。古い家で、ドアフォンはついていない。

煤けた表札には〈山栗〉と書いてある。先週、病院で急死した山栗<sup>すす</sup>怜名の実家だ。

怜名の葬儀が終わったばかりの一昨日、今度は怜名の妹の<sup>みな</sup>聖名が突然失踪した。高校からの帰り道、そのまま消えてしまったのだ。

青森県内で起きていた若い女性の失踪事件が、秋田にまで飛び火したような形だった。

山栗家の中には、すでに聖名の失踪事件担当として回された捜査班が待機していた。念のため、電話の逆探知装置などもセットしてある。だが、たとえ聖名の失踪が誘拐によるものだとしても、身代金要求などはないだろうと捜査班は踏んでいた。

山栗家は、資産家とはとても言えない、ごく平凡な農家だ。怨恨や変質者の犯行だとすれば、聖名はすでに殺されている可能性もある。

本来なら、家人への聞き込みは、主に怨恨の線をもとに行われるだろう。怜名・聖名の姉妹に共通した知人はいないか。父親か母親に恨みを持つ者はいないか……というように。

しかし、怜名が強姦された事件は、ただの事件ではない。怜名は未知の病気を持った「鬼」に強姦されたのだ。聖名はそれに関係して消えたのだろうか。

聖名もまた「鬼」に襲われたのか。だとすれば、なぜ「鬼」は青森と秋田という別々の場所で姉妹を襲ったのか。山栗姉妹には襲われなければならない理由があるのか……。

山栗家の人々の聴取は、めぼしい情報も得られないまま進んだ。誰もが怜名の死にショックを受けていて、気持ちの整理がつかないまま、今度は妹の聖名が失踪。両親には何を訊いても、解決の糸口になりそうな答えは引き出せなかった。

岡辺警部は、最後に、山栗家の中で、いちばん歳をとっている人物を呼んだ。

山栗<sup>いちぞう</sup>市蔵 八十八歳。怜名や聖名の曾祖父にあたる人物だった。

「身代金目的の誘拐でねえ？ あたりめえだ」

岡辺と古平の前に現れた市蔵は、高齢のわりにははっきりした口調で喋った。

「では、あの姉妹や、山栗家に恨みを持つ者の犯行ですか？」

「そんなんでもね」

「では、おじいさんはどう思われるんですか？ 怜名さんが暴漢に襲われたのは偶然で、聖名さんが失踪したのは、家出ですか？」

岡辺が訊いた。

「その『おじいさん』という呼び方はやめでもらえにゃが。俺はおめえの<sup>じっちゃん</sup>祖父ではねえ」

市蔵は岡辺を睨み据えて言った。

無表情だが、言葉は極めて明瞭だった。恐らく、自分の知力に相当な自信を持っているのだろう。

「すみません。では……<sup>いちぞう</sup>市蔵さん、でいいですか」

「ああ。おじいさん以外だば、<sup>いい</sup>なんでもえ」

「では、市蔵さん。市蔵さんはどうお考えです？ 曾孫の怜名さんが襲われたのは、何か理由が

あると思いますか？」

「どうだがな」

「聖名さんはどうです？ 聖名さんが、襲われたり誘拐されたりする理由があるとするなら、なんですか？」

市蔵老人はしばらく黙って岡辺の顔を見ていたが、やがてこう切り出した。

「俺の言うごと、まどもに聞くが？」

「もちろんです」

「俺、気になってるごどはひとつだけだ。んだども、それをおめえらに話す気持ちになれねえ」

「もったいぶらないでくださいよ。我々はどんなことでも真面目にうかがいます」

岡辺がそう言っても、市蔵は再び沈黙し、なかなか次の言葉を発しなかった。

しびれを切らした岡辺が言った。

「鬼がさらったとか、河童の祟りだというような話であっても、我々は真面目に受け止めます」

それを聞いて、市蔵の濁った目にかすかな光が宿った。

「ほう……。ほんどだが？」

「ええ。お約束します」

「んだば喋るが。もしかひえは、鬼族きぞくが関係しているかもしれねえな」

「きぞく？」

「鬼の血ちをひく引ぐと言われてる連中だ。青森中心に、日本中さ散らばっている。その数は多くはないが余計ではねども」

「ぜひ聞かせてください」

岡辺はそう言うと身を乗り出した。口先だけでなく、本当に興味を示していることは、隣にいた古平警部補にも分かった。

「この山栗家は、四代前めえからこの地さ住んでいるども、さらにその前めえには、青森にさ、いだ。青森にはさ昔から様々な鬼伝説は残っている。鬼沢村の鬼伝説。鱒ヶ沢湯船の鬼神太夫伝説なんか有名だども……」

思いもかけず、出身地・鬼沢村の名前が出たが、古平は話の邪魔にならぬよう、黙っていた。

市蔵老人の話は続いた。

「……中でも変わってるのは、鬼壁村赤座部落きしんの鬼神きしんにまつわるものだ。

昔むがし、東北には、土着の民が平和に暮らしていだ。森や土や川の精霊と折り合いをつけながらな。

んだども、大陸がら来た連中が大和朝廷を作り、東北を支配下に置こうと、何回も攻めてきた。連中は稲作で富を蓄えかまどよくし、民を農奴として服従させるごどで、この国を支配しようとした。かまどよくするごども、民を服従させるごども、昔むがしの人にはよぐわがらね考え方だった。

土着の民は、朝廷からは蝦夷えみしと呼ばれ、蔑視され、敵対視された。朝廷は何回も軍隊を派遣してとごやって、北さ北さと攻めでいって、領土を広げていった……」

思いもかけぬ日本古代史の講義が始まり、古平警部補は面食らった。しかし、岡辺は黙って市蔵老人の話に聞き入っている。

岡辺の態度に気をよくしてか、市蔵老人はますます名口調になって話を続けた。

「……東北蝦夷の英雄・アテルイが大和朝廷軍の手にかけられ、死んでからは、蝦夷たちはどんどん勢いなくした。武力や懐柔策、騙し討ちによって、朝廷の子分にささせられてひえらえでいった。そんな中で、生き延びた蝦夷の知患者、勇者たちは、北上し、最後にその怨念を、聖地・岩木山にさ宿る精霊にさ託そうど、オルカイに頼んだ。

オルカイは、岩木山の精霊と人間の間をとりもつ特殊な力を持った山の民だ。

精霊は、もともと神の世界に属している。俺ら人間には、普通には見えん。精霊は、神の世界と人間の世界のあいだ間にいる。オルカイは、精霊に語った。朝廷がこの東北の地も支配しようとしているごどを。

精霊は怒り、悲しんだ。そして、人間の世界の怨念を吸い上げ、別のものに生まれ変わってしまった。

これが鬼の始まりだ。

世間一般で言っている鬼は、オルカイも含めて、山の民、川の民のごどだ。精霊と話ができる連中を、鬼だの河童だの天狗だのと言って、異端の存在と決めつけたんだな。これは朝廷の政策でもあった。

朝廷は仏教を利用して、この国の民を精神的にも支配しようとしていながら、昔からの精霊や、精霊と話ができる山の民の存在はうまくなかった。だから、鬼だの天狗だのという名前をつけて、山奥に封じ込めようとした。

だども、本当の鬼は、また別にさいる。本当の鬼は、山の民一般を呼ぶ鬼と区別するため、俺たちは鬼神様きしんさまと呼ぶ。

鬼神様は、人間の世界に肉体を持って生まれてくるども、心の半分は神の世界にさ属している。んだがら、蝦夷たちにとって、本当の鬼は、神にさつながる聖なる存在だ。邪悪な敵ないではね。東北さ残る鬼信仰というのは、こんたら歴史がいろいろ変化し、伝説や風習として残っていったものだ。

オルカイたちは、鬼神様になってしまった精霊をなだめ、いつかまた、元通りの精霊に戻っていただくため、鬼族として鬼神様に仕え、鬼の血を守ることを誓った。

鬼、つまり、鬼神様は、肉体に持っているが、半分は神さ所属するから、孤独な存在だ。人間の心と神の心がぶつかったとき、この世に生まれくる。鬼が生まれるのは、大体、二百年に一度、世の中が乱れ、人の心が狂ったときだと言われている。

鬼は人間の女と交けれどわたねえりども、その種はあまりにも強すぎで、普通の女は、鬼と交わった後、狂い死んでしまう。

運よく鬼の子供を産むだけの強い女がいだとしても、産まれる子供は鬼ではなく人間だ。だども、鬼の血ちイ引いているので、この人間おにとは『鬼人』と呼ばれる。

鬼人の子孫もまた、鬼の血引く人間ということになる。こうして鬼人たちは、自分たちの血を子孫に引き継がせていく。鬼人たちの集まりを、鬼族きぞくという。

鬼が最後にこの世に出たのは、今から二百年以上前の天明元年。徳川家いえなり齊の時代だったとよ。鬼壁村の山奥にさある赤座という部落さ、鬼が生まれた。

鬼は、生まれたときから頭<sup>に</sup>角がある。育つのは人間より早く、十五にもなれば大男になる。そのとき生まれた鬼は<sup>いかづちまる</sup>雷丸と名付けられた。

鬼は人間の女の腹から産まれるども、鬼を産むには、特別な力を持っていねばならぬ。鬼を産んだ女は『お宿り様』と呼ばれる」

そこまで一気に語ると、市蔵老人は目の前のふたりの刑事を睨み据えるように見比べた。

古平警部補は思わず視線を逸らした。事件とは関係ありそうもない老人の戯言につき合っているのが苦痛だと思っていただけに、心中を見透かされる気がしたのだ。

だが、若い岡辺のほうは真剣な表情を崩していなかった。

「山栗家も、その鬼族の一員なんですか？」

話を途切れさせた老人に、岡辺が訊いた。

「いんや、山栗家は鬼族<sup>に</sup>さは属してね。だども、先祖をたどると、二百年前に雷丸を産んだお宿り<sup>に</sup>様さつながっていると伝えられている」

「血筋的には鬼族とつながっているわけですね？」

岡辺が念を押した。

「ああ。鬼族ではねども、<sup>ちィ</sup>血は引いてる。お宿り様の血を引く家は、山栗家だけでなく、日本中<sup>に</sup>さいっぱい散らばっているはずだ」

「そうした家から、鬼が生まれることは考えられますか？」

岡辺が真面目な口調でそう訊いた。隣にいた古平は呆れるのを乗り越して驚いた。まさか岡辺は本気で老人の話の信じているわけではないだろうに。

だが、市蔵老人は岡辺の態度にますます気をよくしたのか、こう続けた。

「鬼は二百年に一度、世の中が乱れ、人の心が狂ったときに現れると言ったども、雷丸が現れてから二百年以上経っている。もうそろそろ、次の鬼が出てくる頃かもしれねえ。

怜名はもしかしたら、鬼<sup>に</sup>さ犯されたのかもしれねえ。遠い先祖にお宿り様がいるから、その<sup>えにし</sup>縁でな。

となれば、聖名は、鬼<sup>に</sup>か鬼族さ、さらわれたのかもしれねえ。

鬼は自分の子孫を残そうとする。鬼神が、鬼人、つまり人間ではなく、自分と同じ本物の鬼の子、次の鬼神を残すことができだとき、人間の世界は再び神の世界への道を見つけ、世の中は昔のように、自然と折り合いをつけた本来の世界にゆっくりと戻っていく。そのとき、鬼族たちの使命も終わる。鬼族たちはそう信じている」

そこまで一気に話すと、市蔵老人は目の前にいる二人の刑事の顔を見た。

岡辺は、市蔵老人の長い話を復習するかのよう、視線を落とし、黙っていた。古平は口を挟むわけにもいかず、居心地の悪い沈黙を甘受していた。

そのままどれくらいの時間が経っただろう。

市蔵は黙って立ち上がると、挨拶もせず部屋から出て行ってしまった。

古平は呼び止めようと腰を浮かしたが、岡辺は視線を畳の上に落としたまま、何かを考えているようで、市蔵には声もかけなかった。

「岡辺さん」

古平警部補は、たまらず岡辺に声をかけた。

「もう、いいんですか？」

「ええ」

岡辺は生返事をする、ようやく顔を上げた。

「まいりましたあねえ。じいさまに、変てこな歴史講釈だか民話の類をさせただけだったですね」

「いや……まあ……」

岡辺の返事には、まったく意志がこもっていなかった。

二人が山栗家を辞したのは、それから間もなくだった。

車を運転しながら、古平は助手席の岡辺に訊いた。

「岡辺さん。さっきのじいさまの話、やけに熱心に聞いていましたね」

「そりゃそうでしょう。唯一出てきた有力な手がかりなんだから」

「有力な？ まさか鬼の話、信じているわけではないでしょうね。ああ、そうが。鬼の話は論外としても、鬼を狂信する連中がいるとすれば、我々には理解不能な教理というか、信仰に基づいて、馬鹿げた犯罪を犯す可能性はあるという意味ですか」

「ええ、まあ……それもありますかね……」

岡辺の答えには、誠意がまったく込められていない。

古平は苛立ちを隠せない口調で言った。

「岡辺さん。そろそろ話してもらえませんか。私ら、弘前北署の刑事だちには秘密にしてら情報があるんでしょう？ なんなんですか。私らを、そんなに信用できんのかね。このままでは、捜査もうまくいがねえと思うんですが」

「ええ……そうですね」

「まさか、本庁は本当に『鬼』がいると考えているわけではないでしょうね」

「いや……まあ……ね」

岡辺は相変わらず言葉を濁したままだった。

△△◎▽▽

壕太の二度目の弘前行きは、気が急いでいたせいもあり、飛行機を利用した。

家を出るとき、下倉Kからメールが届いているのを確認していたが、時間がなかったので読まずに羽田に急いだ。

壕太が下倉からのメールを読んだのは、飛行機の中でだった。

-----  
To: sashimi

From: Shimokura-K

Subject: 下倉です

さしみさん（呼び慣れてしまったもので、メールでは当分こう呼んでもいいですか？）こんにちは

下倉K、こと、下倉数彦（かずひこ）です。

メール拝読しました。添付されていたデジカメの画像も興味深く拝見しました。

えーと、まず、ぼくは別に、匿名のコミュニケーションに固執するタイプじゃありませんのでご安心を。ネット上ではいろんな人がいるので、普段、自分から進んでは名乗らないだけのことです。

この際ですから簡単な自己紹介を。

世田谷の自宅で、コンピュータ関連のサービス業をやっています。昔は高級手造りアンプなどを作って売っていたんですが、最近ではオーディオマニアもめっきり減ってしまい、そっち方面の楽しい仕事だけでは生活できなくなりました。

ウイルスに冒されたパソコンを救出しに行ったり、小さな企業の社内LANを構築したり、簡単なCGIプログラムを書いたり、まあ、コンピュータに関する便利屋稼業ですね。

こういう仕事はストレスがたまるので、縄文村で発散しているというわけです（笑）。

さて、鬼族の話でしたね。

やはりこうした内容はチャットでは無理ですね。メールでも結構まどろっこしい気がします。できれば直接お話ししたいところですが、逆に、メールのほうがすっきり伝わることもあるでしょう。ああ、長くなりそうです。

鬼族については、いろいろ聞いたことはありますが、詳しくはありません。また、情報が断片的なので、改めて「鬼族とはなんぞや」とたずねられると、答えに困ってしまいます。自分の中で今イチ整理ができていない証拠ですね。

とまあ、言い訳はこのくらいにして、と。

何から書いたらいいでしょう。順序が逆のような気もしますが、まずは送っていただいた写真画像について書きます。

男根に龍のシンボル。こういうものでしたか。実は、私自身は実物を見たことがありません。すごいですね、これ。しかも亀頭が二段構えになっている（苦笑）。

男根は一般に蛇や龍に見立てられることが多いので、その意味ではこうしたシンボルはそれほど珍しいものではありません。日本でも、島根県の出雲地方（八束郡美保関町）に伝わる「龍神祭」などに見うけられます。

送っていただいた石碑の画像は、私が知る限りでは、明治期に消滅したと言われている「出雲鬼族社」という宗教結社のシンボルに似ています。と言っても、実物を見たわけではなく、学生の頃、写真で一度見ただけなので、断言はできないのですが。

出雲鬼族社の資料を探し出すのに半日かかりました。

非常に難解な資料で、あちこち不整合や意味不明の記述もあるのですが、私流に大胆に解釈し

、ざっと説明すると、こんな教義を持つ集団だったようです。

- 古代日本を最初に治めたのは、アマテラスを始祖とする現天皇家ではなく、スサノオの系譜である出雲神一族である。出雲神の系譜（出雲王朝家）は、傍系、あるいは、単なる対立概念としての創作ではなく、実在した正統の王家である。
- 当初、大和の地を治めていたのも出雲王朝である。しかも、記紀神話にほのめかされているように、神武天皇の東征により大和朝廷が成立したわけではない。すでに大和にいた当時の出雲神・ニギハヤヒが、九州から東上してきた新興勢力を受け入れ、新しい国家体制を共立しようとしたのである。
- 出雲神一族は、日本列島の先住民たちを武力制圧するのではなく、うまくコントロールしながら支配下におこうとしていた。そのために、先住民が崇拜の対象としていたそれぞれの土地の神、自然界の精霊たちとの融合もはかろうとしていた。
- 銅鐸は、出雲神と先住民たちの土着信仰との融合を示すシンボルだった。しかし、後から入ってきたニニギ系の渡来人（天孫族）たちは、出雲神がすでに進めていた融合政策を受け継ぎながらも、武力行使も行って、列島支配を急いだ。そのシンボルが剣や鉾であり、銅鐸に取って代わって新たなシンボルになっていった。
- 大和朝廷成立後は、大陸から遅れて入ってきた別の渡来貴族の勢力が実権を握っていった。大和朝廷内部で、出雲神一族は次第に追いやられながらも、物部氏として、宗教的な地位においては権威を持ち続けていた。本来、「もの」という言葉は単なる物質だけでなく、あらゆる「もの」に宿る霊力、魂のことも含めた意味を持っていた。その「ものの霊」を解く役割を持っていたのが「もののべ」氏であった。
- しかし、朝廷主流派は、仏教を取り入れると同時に、仏教を利用して民をさらに強力で統制する政策を採った。そのためには、従来の土着的宗教観に根ざし、宗教儀礼を司っていた物部氏が邪魔になった。
- そこで、朝廷主流派は、物部氏を追い落とすためのクーデターを起こした。聖徳太子というのは、そのクーデターを正当化するために、後に「発明」された架空の人物である。
- クーデター後、物部氏は崩壊したが、一族が全滅したわけではなかった。出雲神の系譜を継ぐ渡来人の一部は東北に逃れた。朝廷側はそれら出雲神の流れを汲む一族を「鬼」と位置づけ、隔離する政策を採った。
- しかし、物部氏消滅後、朝廷には予期せぬ不幸が続いた。主流派は、それを、出雲神の祟り、あるいは、出雲神が懇意にしていた、日本の地に古来から宿っていた精霊たちの仕業と考え、恐れおののいた。
- そこで、王朝は、出雲神の亡霊を鎮めるため、民衆には悟られないよう、秘儀をもって出雲神を祀り、同時に、古来からの精霊たちの怒りをも鎮めようとした。
- 現天皇家の秘儀にもそれは脈々と受け継がれている。大嘗祭<sup>だいじょうさい</sup>や、伊勢神宮の心の御柱<sup>しん みはしら</sup>に隠された秘儀には、出雲神の存在がかいま見える。

- 一方、出雲神の血を引く「鬼」たちは、日本各地に散らばり、先住民との混血を重ねながら、山の民、川の民として生き続けた。その姿は、各地で鬼や天狗、河童の伝説として語り継がれた。
- 鬼の血こそ、日本という国を守る選ばれた民の証である。鬼の血が絶えるとき、この国は滅びる。

……ずいぶん乱暴な説明ですが、こんな感じでしょうか。

出雲王朝正統説というのは、この結社に限らず、あちこちに存在します。古史古伝の世界では有名な「九鬼文書」<sup>くかみもんじょ</sup>や、偽書として徹底的に叩かれた「東日流外三郡誌」<sup>つがる そとさんぐんし</sup>なども、多かれ少なかれこうした出雲神、物部氏、ニギハヤヒ系列の側に立って書かれているのはご存じの通りです。

細部ではいろいろなバリエーションがありますが、共通しているのは、古代に、陰謀とクーデターによって消された王朝、王の血筋があるという点です。鬼とは、その「消された一族」のシンボルであるという解釈も、そんなに特別なものではなく、結構広く知られています。

実はぼくも、概ねこうした異端的な古代史観に近い考えなんです。まあ、縄文村のキャラクターをよくご存じのさしみさんには、ぼくの「異端好き」は、今さら説明するまでもないことでしょうか（笑）。

この際ですから、ぼく自身が推理した古代史も聞いてください。

出雲神一族は、大陸から渡ってきた渡来人のグループですが、大陸で長く続いた戦争に嫌気がさし、この日本列島に古くから根づいていた素朴な宗教観との融合をはかろうとしていたふしがあります。

大和、つまり畿内には、その出雲族の拠点がありました。もちろん、現在の出雲地方あたりまでは十分に勢力圏内でした。

一方、九州には後にやってきた別の渡来人グループが、地方国家と呼べるものを築きつつありました。これが後に、天照大神を始祖であるとし、日本の歴史を支配していくことになる天孫族<sup>てんそん</sup>です。記紀、つまり古事記と日本書紀は、この天孫族の側から書かれた歴史書ですね。

余談ですが、邪馬台国は九州にあったのか畿内にあったのかに関して今でも論争が続いていますが、ぼくは基本的には九州説です。でも、当時、畿内には先発組（出雲族）が、すでにもっと大規模な国家を作っていたことも確実でしょう。つまり、九州にも畿内にも、国家に近いものがすでに存在していたのです。国の規模は、出雲族の畿内国家のほうがずっと大きかったはずですから、当時の主流があくまでも九州ではなく畿内だったという意味では、邪馬台国畿内説も正しいわけです。

中国大陸側の資料である魏志倭人伝に出てくる邪馬台国は、文脈を素直に読む限りは九州に位置しています。これは、九州組（天孫族）が中国（魏）に対して、畿内には出雲族によるもっと大きな国家があることを伏せたまま、自分たちの国の情報だけを伝え、倭国として認知させることに成功したということの意味していると思うのです。

九州組はその後「天孫」を名乗り、畿内にすでに一大勢力を持っていた出雲神一族と結合します。このくだりを記紀では神武天皇の東征という形で伝えていますが、実際には単純な征服ではなく、取引や契約、姻戚工作などを複雑に重ねた上での合体だったと思います。

出雲神は、日本古来の宗教観を取り込んで、先住民を精神的にコントロールする技術と経験を持っていた。後から来た天孫族にも、後々列島全体を支配するためには、そのノウハウがどうしても必要だった。

しかし、武力は天孫族のほうが圧倒的に勝っていたんですね。これには製鉄技術が大きく関係しているはずです。後からやってきた天孫族のほうが、はるかに進んだ武器を持っていたんでしょう。

銅鐸文化圏と銅剣銅矛文化圏というのがありますが、ぼくは、銅鐸（祭事の道具）が出雲神のシンボルで、銅剣・銅矛（つまり武器）が後発の天孫族のシンボルのように思えてなりません。

この国を支配するためには、宗教政策と武力、どちらも必要だったのです。だから両者は手を結んだ。

銅鐸と銅剣が一緒に出土するのも、これらが次第に合体したことを意味しています。また、銅鐸が壊されて、まるで埋葬されているかのように出土するのは、最終的には、銅鐸に象徴される出雲神の精神支配が、天孫族の武力信奉によって打ち破られたことを意味しているような気がします。

まあ、この話はし始めると長いので（苦）、このへんにしておきましょう。

ともかく、出雲神はその後政治の中心からは追放され、鬼として隔離されていくわけです。出雲鬼族社も、その延長にあると言えるでしょうね。実際、彼らが出雲神の血を引いているのかどうかは分かりませんが（そもそも、これだけ混血が進んだ今日、血がどうのこうのという話は馬鹿げています）。

話を戻しましょう。

出雲鬼族社のシンボルが、なぜ「男根に龍」なのかはよく分かりませんでした。男根も龍も「男」を表すシンボルで、それが二重になっているというところに何か意味がありそうですけれどね。

さしみさんが、赤座部落の鎮守でこれを見たということは、やはり、赤座の「鬼」が、どこかで出雲神の流れを汲む者たちだという証拠なのかもしれません。

出雲鬼族社は、私の中では製鉄民の鬼族とはあまり結びつかず、新興宗教のひとつというイメージでした。

製鉄民をルーツにした鬼族は、出雲神とはまたちょっと違うイメージなんですよ。

全国に鉄をご神体とした神社というのがいくつかあって、その多くは寂れているんですが、そうした神社は鬼族ゆかりの神社だと聞いたことがあります。岩木山周辺の鬼伝説にしても、どっちかというところの「鉄の民」に属する話で、ニギハヤヒ系の鬼とは無関係だと思っていました。

でも、同じシンボルが赤座にあったとなると、やはり関係があるのかもしれません。

今言えるのはこのくらいでしょうか。

うーん、これだけ書いても、鬼族とはなんなのか、結局、何も分かっていませんね。

さしみさんのメールを読み、添付されていた写真画像を見ていると、好奇心が抑え切れません。すぐにでも弘前に飛んでいきたいところです。もし再訪するようなことがあれば、一声かけてくれませんか。ぜひ一緒に行ってみたいのです。

その前に、もう少し下調べをしておいたほうがいいですかね。

何か分かったら、また連絡しますね。

ではまた。 下倉K

-----

長いメールだった。

何度か読み直すうちに、飛行機は着陸態勢に入った。客室乗務員に注意されて、モバイルパソコンをしまわなければならなかった。

青森空港からは、レンタカーで弘前に向かった。

すぐに赤座部落に向かおうかとも思ったが、その前に父親が住んでいた稲木刃物店に寄った。この店が父親の完全な所有物だったのかどうかもよく分からないが、いずれそれなりの処理をしなければならない。その前に、少しでも整理をしておこうと思ったのだった。

店の中は、この前訪れたときよりも黴臭くなっていた。

改めて家の中を調べ始める。しかし、粗末な生活用品の他には、拍子抜けするくらい何もなかった。本や雑誌もない。新聞も取っていた気配はない。いくら探しても、預金通帳さえ見つけれなかった。一体どういう暮らしをしていたのだろう。それとも、誰かがすでにそうした書類を持ち出しているのだろうか。

次に、店の商品をチェックした。

造りのいい刃物ばかり置いてあったが、数は多くない。ステンレスや合金製品はなく、すべてが鋼でできているため、中には錆が浮いているものもあった。

父が死んだ今、これらの商品をどう処分したものだろうか。刃物だけに、無人のこの家にいつまでも残しておくのは危険きわまりない。かといって、売りさばく方法も知らない。

とりあえず、並べて置いてあるのは目立つし、まずいだらうと思い、段ボール箱や木箱を探してきて、その中にしまい始めた。鋏などは後回しにして、包丁や牛刀など、危険なものを優先してしまった。

その作業に一時間ほどかかった。

刃物を入れた箱は、押入の奥や天袋に隠した。

ようやく片づけて、台所に行って手を洗った。

そのとき、ふと、流しの脇にある黒ずんだ柱が目に入った。柱の上のほうに、卍が記されたお札のような紙が貼り付けてある。

「それど、マンジの柱んどごに……」

「え？」

「いや……なんでもね」

病院で父と別れたとき、最後に交わした言葉が突然脳裏に甦った。今まですっかり忘れていたし、気にも留めていなかったが、確かに父は別れ際、「マンジの柱」と言っていた。

マンジの柱とは、これのことに違いない。

柱を上から下まで見てみたが、変わったところはなかった。蜘蛛の巣が張り、汚れているだけの杉の柱だ。

いや、「柱のところに」と言うのだから、柱そのものではない。

かがみ込み、柱の付け根を調べた。黒ずんだ床板が、柱の下のところで細かく継ぎ合わされていることに気づいた。

今片づけたばかりの刃物の中から、平鑿<sup>のみ</sup>を見つけ出し、板の隙間にこじ入れて剥がした。

床板の下に小さな収納スペースが現れた。そこに、桐箱がひとつ入っていた。

取り出して、中を確かめると、絹の布にくるまれた鍔のない短刀が出てきた。柄には卍紋と五芒星が彫られている。

鞘から抜くと、赤味を帯びた、刃渡り三十センチほどの刃が現れた。両刃<sup>もろは</sup>で、刃紋は片側が波形、片側が直線になっている。

刃が赤味を帯びているのは、錆びているわけではなく、鋼そのものが赤いのだった。箱の内側には、墨で「ヒヒイロカネ」と、あまりうまいとは言えない字が書き込まれていた。

ヒヒイロカネ？

どこかで聞いたことがある気がするが、思い出せない。

試しに包んでいた絹の布に刃先を当てると、布は音もなく二つに裂けた。

壕太は慎重にそれを鞘に戻すと、再び布でくるんだ。

どういうものなのかは分からないが、父の形見として持ち帰ることにした。しかし、これを飛行機に持ち込むわけにはいかない。たちまち所持品チェックで引っかかるだろう。少し考えた末、宅配便で送ることにした。

ここで時間を取っているわけにはいけないので、戸締まりをし、レンタカーで赤座に向かった。途中、宅配便の幟を立てている酒屋を見つけたので、忘れないうちにと思い、さっき見つけた短刀を自宅宛に送った。中身は「スプーンセット」としておいた。

赤座部落は相変わらず人の気配がなく、静かだった。

点在する農家には、人がいるのかどうかも分からない。闇雲に訪ねていく勇気もなく、自然と、この前と同じように、神社の入り口まできていた。

道路脇には、軽トラックが二台停まっていた。

軽トラックから少し離れた場所に車を停めて降りた。周囲には誰もいない。壕太は用心深く、神社の境内に入っていった。

例の石碑のところに行ってみた。社殿は安っぽく、新しく建てられたものであることが歴然としているが、この石碑のほうは、やはり江戸期のものに見える。

しゃがみ込んで、台座の銘をもう一度よく見ようとすると、社殿の中から、人の声がかすかに聞こえてきた。停めてあった軽トラックの主たちだろうか。

壕太は身を屈めるようにして社殿に近づき、足音を忍ばせながら裏手に回った。

裏手の明かり窓から、低い話し声が漏れてくる。

「……<sup>しかし</sup>したって、姉のほうも、すぐ死んだんだべ？ 妹も、お宿り様さはないねえべな<sup>にはなれない</sup>」

「<sup>やってみなければわからない</sup>やってみねえば分がらねえべ」

「んだ。やってみねえば」

社殿の中には、少なくとも三人はいるようだった。姿は見えないが、声の感じからして、そのうちの一人はかなり歳を取っているようだ。みな、壕太が知っている津軽弁とも微妙に違う、独特の方言を操っていた。

何の話かすぐには分からなかったが、壕太は必死で耳を澄ませた。

「<sup>何歳に</sup>なんぼさなるば？」

「十五だ」

「若すぎんでねえな」

「<sup>に</sup>季絵がお宿り様さなったのも、<sup>か</sup>十四が十五のどきだや」

「<sup>はらまされたとき</sup>違うべえ。十四でカダナヤさ孕まさいだどぎの子は、<sup>わらし</sup>鬼神<sup>きしん</sup>ではないね。<sup>はがねまる</sup>鋼丸はその後、<sup>じろうた</sup>次郎太<sup>やみ</sup>が閻祭りで孕まへだ子<sup>わらし</sup>だ。したはんで、<sup>だから</sup>季絵がお宿り様さなったのは、十七のどきだ」

「カダナヤは鬼族でねえがらだべ。次郎太は鬼族の血いだべや」

「<sup>うす</sup>薄い血いだどもな」

「鬼神が産まいるときは、お宿り様の力のほう<sup>れ</sup>が問題なんだべ。種は<sup>それほど</sup>そらほど関係ね」

「<sup>言った</sup>そったごと、誰がへったば」

「<sup>ばあ</sup>ゴミソ婆だ」

「<sup>ほんどう</sup>ゴミソ婆がそったごと<sup>ほんどう</sup>言ったんだが？ 本当が？」

「<sup>ほんどう</sup>本当だ」

「<sup>しかし</sup>んだば、お宿り様は、やっぱ季絵がいちばんでねえが」

「<sup>もったいない</sup>したども、季絵は死んだはんで、<sup>生まれたはずなのに</sup>しかたねえべな」

「<sup>生まれはしたが</sup>いだわすいごとをした。鬼神様が<sup>生まれはしたが</sup>生まいだっちやあんでねえが」

「<sup>生まれはしたが</sup>生まいだばって、すぐハァ死んだどいう話だ」

「<sup>生まれはしたが</sup>惜すいごとした」

「<sup>それにしても</sup>まったぐだ。したども、季絵は大したもんだ。もう<sup>すこし</sup>ちょべつとで、<sup>おにあっちゃんさま</sup>ほんまもんの鬼母様さ<sup>なれた</sup>ないだんだばっての」

「<sup>生まれはしたが</sup>んだ。したばって、死んだもんはしかたねえべ」

社殿の壁一枚を隔てて盗み聞きしていた壕太の身体が震えた。

高倉季絵——母は死んだのか？

母が十五歳で自分を産んだというのは、やはり本当のことらしい。しかし、今の話では、もう生きてはいない。

身体中から力が抜けた。

なぜそんなに早く死ななければならなかったのか？

呆然とする壕太をよそに、社殿内での会話は続いていた。

「季絵にはさは、最初に産んだ双子のわらはこどもたちんどがいだべ。あの娘っこのほうはどんだ？ 季絵の血  
いば引いではんで、お宿り様サなれる力だばあるはずだべ」

「だばって、どどこにさいるんだか分がらねえ。カダナヤが隠したからな隠しだはんでな」

「探さねばの……」

そのとき、背後で「うぎゃあ」という獣のような声がした。

振り返ると、以前、ここの墓地で出逢った老婆だった。老婆は壕太を指さして叫んだ。

「たいへんだ。みな、出こいであべ。カダナヤのせがれだ」

その声を聞きつけて、社殿の入り口が開き、中で話していた男たちが飛び出してきた。

最初に出てきたのは、真夏だというのに、獣の皮でできたチョッキを素肌の上に直に着た、三十代くらいの男だった。少し猫背で、太く毛深い腕には大きな傷跡が見えた。

後ろには、白髪の老人と、藍染めの作務衣を着た赤ら顔の男が立っていた。

「カダナヤのせがれだ！」

老婆がもう一度叫んだ。

「カダナヤの？ ……、おお、壕太かが？」

白髪の老人が言った。

壕太の背中に冷たいものが走った。

こいつらは俺を知っている！

しかも、男たちの顔には殺気がみなぎっていた。

自分が今、どういう立場にいるのかがまったく分からなかった。この連中が自分にとって味方ではないらしいことは感じ取れるが、ここはむしろ、思い切って懐に飛び込み、自分の出生の秘密を聞き出すべきなのだろうか。

「本当に壕太かが？」

赤ら顔の男が言った。

三人の中ではいちばん背が高く、訛りもきつくない。髪が黒々として、体格も立派なので老けては見えないが、顔には深い皺が何本か刻まれている。もしかしたら、かなりの歳なのかもしれない。

「カタナヤというのが父のことでしたら、先週死にました。膀胱癌でした」

壕太は静かな口調で答えた。

「こいつ、東京弁でしゃべってらじゃ」

猫背の、いちばん若い男が、苦々しそうに言った。

背の高い赤ら顔の男は、それを無視して続けた。

「俺等わんどはずっとおめえを探しでだ。おめえど那未なみを。カダナヤは、おめえだち双子のわらはこどもたちんどを、俺等わんどがら遠ざけようとした。弘前あたりで小さだ店なをやっているごどは知ったが、深追わんどいはしねがった。俺等わんどには、季絵がわんどいだがらな。季絵は俺等わんど鬼族きぞくの宝だ。二百年に一度、いや、二千年に一度のお宿り様がもしれん」

「どういうことか分からないんです。鬼族だのお宿り様だの。その話、俺に分かるように説明してもらえませんか？」

壕太は素直に訊いてみた。

「おめえが鬼族に戻るんだら、どのみち話さねばなんねえはんでな。ゆっぐりどの」  
男はそう言うと、初めて微かな笑みを浮かべた。



目を覚ましたとき、<sup>みな</sup>聖名はまず、自分が何も身につけていないらしいことに気づいた。背中には畳が触れている感触がある。仰向けになっているのは分かるが、なぜこんなことになっているのか分からない。

頭が重く、目も開かない。これはまだ夢の中なのだろうか？

ここはどこなのか。何をしているのか。なぜここにいるのか。

全身がだるい。身体を動かそうとしても、手足が自分の意志をはねつけるように重い。

聖名は気力を振り絞って目を開けようとした。

瞼は開いた気がするが、視界はまだぼやけている。

頭を左右に強く振ってみた。後頭部が畳にこすれる感触がある。

周囲を見ようと、必死に目を凝らした。やがて、少しずつ周囲の光景が網膜に像を結んでいった。

部屋の広さは六畳ほどだろうか。

天井がなく、傾斜した屋根の裏側が直接見えている。壁は昔ながらの白い塗り壁。背中の下はやはり畳敷きだった。

家具の類はない。白い壁と古い畳、それにむき出しの屋根裏で囲まれた空間に、聖名は素っ裸で横たわっているのだった。

誘拐！

そうだ。あの津軽弁を話す男たちの車に乗せられ、薬を嗅がされたのだった。私は誘拐されたのだ……。

そこまで、ようやく理解できた。

全裸にさせられているということは、あの男たちに玩ばれたのだろうか。

「気づいたがの」

近くで、しわがれた声が出た。

「若<sup>わげ</sup>えおなごの肌は張りがあるねな」

声の主は小柄な老婆だった。白い和服を着ている。

「誰？ ここはどこ？」

恥ずかしさよりも、恐怖のほうがはるかに大きかった。起きあがろうとしたが、身体はまだ言うことを聞かない。

「なんで動けないの？」

もしかしたら、脊髄を損傷して半身不随になっているのだろうか。そう思った途端、恐怖でますます身体中がこわばった。

「おぢづけ。汝は、てえせつな<sup>おにびな</sup>鬼雛<sup>せ</sup>だはんで、お宿りの闇祭りまでは、誰も手ば出さねえて」

聖名はようやく首だけ動かすと、老婆のほうを見た。

顔には深い皺が刻まれ、白髪はかなり薄くなっている。真っ白な衣装は、恐山のイタコを思わ

せる。

「とにかく、何か着させて」

そう懇願したが、老婆は首をわずかに横に振った。

「今日一日はしんぼうせえ、な？ 汝はこいがら、お宿り様さなるための準備ば、しねえばなんねえ。霊気ごと身体さ吸い込ませで、お宿り様さなる力ばつけねえばなんねえ。服は邪魔だんでな」

「何を訳分かんないこと言ってんのよ！」

そう叫びながら、聖名はさらに身体を動かそうとあがいた。

「やめれ。俺が術ど薬でしびれさせでらはんで、動げねえんだ。無理すつど、肌が破げら。肌が破げれば、鬼神様も悲しむべ」

そう言うと、老婆は聖名に近づき、両肩に手をあてた。

老婆の皺だらけの手から、何か得体の知れないエネルギーが身体に伝わってきた。と同時に、聖名の身体から、抵抗しようという気力が一気に抜けていった。

「あがしやさまそでおれさまあがしやさまめそきせねて……」

老婆は意味不明の呪文のようなものを口の中で唱え、聖名の裸の肩を軽くさすり始めた。

起きあがりかけていた聖名の身体が、再び畳の上に吸い付くように横たわった。

駄目だ。抵抗できない。

老婆は、人間の心をコントロールする力を持っているのだろうか。

聖名は諦めて、全身の力を抜いた。

聖名が静かになったのを確かめると、老婆は意味不明の呪文をやめ、子供をあやすような口調で告げた。

「汝は今夜、お宿りの閻祭りさ出ていぐ。蠟燭の火の中で、鋼丸様の嫁こさなる。鋼丸様のお種ばいだだいで、鬼神ば宿らせるだ。汝の姉こはハア、お種ばいだだぎながら、お宿り様さないねえで死んでまった。汝は姉こみでえに、弱えおなごが？ 違うべ。しっかりお種ばいだだいで、鬼神様ば宿すべ」

老婆が語る内容は、聖名にはほとんど理解不能だった。いや、理解したくなかった。

動かせない身体を恨みながら、これが夕子の悪い夢であってくれと祈るばかりだった。

だが、時間が経つに連れ、現実感が増している。

雨に濡れながら家に帰る途中、作業服の男二人が乗る車に連れ込まれ、麻酔薬をかがされたことは現実だった。はっきり、記憶に刻まれている。

そして、さらわれ、裸にされ、この部屋に寝かされている。そばには頭のおかしな老婆。

……これは全部現実なのだ。これから先、何が起きるのか、怖くて、とても想像したくない。

老婆はどこからか茶筒のようなものを取り出し、中に入っていた白い粉を手にとり、聖名の身体につけはじめた。

風呂上がりの赤ん坊にベビーパウダーを叩くように、軽く、粉を伸ばしていく。

聖名のまだ膨らみきっていない胸の隆起を、老婆は白い粉にまみれた手でゆっくりと愛撫するように触れた。

「鋼丸様ば産んだ季絵様も、お宿り様さならいだんは、汝くれえの歳だった。汝が鋼丸様のお種ばいだだいて、鋼丸様の子ば産んだら、その子はきっと神様の変わり身だ。腐れきったこの世ば救ってくださる神様だ。汝は、てえしたお宿り様さ、なるかしんね」

そう言いながら、老婆は白い粉を聖名の胸から腹へとのぼしていった。

臍の周りを、入念に指で円を描きながら撫でる。

「こさ、宿すんだんだ。きっと、宿すんだんだ。ヒヒイロカネの力も助けでけらはんで、きっと宿すんだんだ」

そう呟きながら、老婆は白い粉にまみれた手で、聖名の臍から陰部にかけて、何度も何度もさすった。

手足が動かないのに、聖名の肌の触覚はどんどん鋭敏になっていた。

まだ男を受け入れたことのない聖名の身体に、潮のうねりのようなものが満ちてくる。身体中の細胞が急激に変調を来し、分裂を始めたような気分だった。

「こさ宿すんだんだ。きっと宿すんだんだ……」

老婆はまだ呟き続けていた。

△△◎▽▽

神社の社殿から出てきた三人の男たちは、壕太に一方的に敵意を持っているわけではなさそうだった。

恐らく、父親の稲木俊満には何らかの怨恨があるのだろうが、その息子である稲木壕太と父親俊満とは別物と考えているのだろう。あるいは、「稲木俊満の息子」ではなく、「高倉季絵が産んだ男子」と見ているからかもしれない。

「おめえさは、ゆっくりど話をしねばなんねえけど、今日は特別な日だ。今夜はお宿りの闇祭りがあるがらな。これがら、赤倉さ行がねばなんね。おめえも来い。話はその途中です」

赤ら顔の男はそう言って、壕太を自分の軽トラックに乗せた。

壕太は素直に従った。

他の男二人と老婆も、別の車に乗り込み、赤ら顔の男が運転する軽トラックの後に続いた。壕太の運転してきたレンタカーにも別の男が乗り込んで運転し、最後尾につけた。

赤倉は、鬼壁村より南に位置していて、岩木山の北麓にある。一行は広域農道を通って一旦県道に出てから、また農道に入って岩木山の中心部方向へ進んだ。

赤ら顔の男は、助手席の壕太に向かって自己紹介を始めた。

「俺は鬼枝周治。屋号で『クマヤサ』と呼ばれでら。カダナヤよりは十ばっかし若え」

壕太は、赤座部落の墓地に、鬼枝、赤石という姓が刻まれた墓が多かったことを思いだした。「俺等は鬼人どいって、鬼の血を引ぐ一族だ。おめえとは敵同士ではねえ。おめえの親父のカダナヤは腐れ外道だったが、息子のおめえには恨みもなんもねえ。なんせ、母親はお宿り様だ。おめえも立派だ鬼族だばってな」

「その鬼人とか鬼族というのが分からないんですよ。一体なんなんです。俺の母親が『お宿り様』というの、詳しく説明してもらえませんか？ さっきの話では、母は死んだとか」

壕太は極力ていねいな口調を意識して言った。

「どごがら話せばいいんだがな。おめえの母親のごとがらだべな」

クマヤサと名乗った男は、<sup>と</sup>そう言うと、少し間を空けてから話し始めた。

「おめえの母親は高倉季絵<sup>よ</sup>ていって、赤座でいちばんめんこいおなごだった。頭もい<sup>た</sup>がった。<sup>あ</sup>あん部落では、みんなが、季絵を村の宝だと思ってあ<sup>い</sup>った。

逆に、カダナヤは嫌われもんだった。仕事はしねえ。飲んだぐれで、嫁こももらわ<sup>しょうね</sup>いね。性根がひんまが<sup>っ</sup>とって、いざこざも絶え<sup>な</sup>なんだ。

そのカダナヤが、あるどぎ、酔っぱらって、季絵を犯<sup>だ</sup>した<sup>た</sup>。

季絵はそ<sup>ん</sup>どぎまだ十四。中学生<sup>わらし</sup>だ<sup>っ</sup>た。もちろんおぼ<sup>こ</sup>で<sup>あ</sup>った。

そ<sup>い</sup>だ<sup>の</sup>に、季絵はカダナヤの<sup>こ</sup>子<sup>を</sup>は<sup>ら</sup>ん<sup>で</sup>ま<sup>っ</sup>た。それを誰<sup>さ</sup>も言<sup>わ</sup>な<sup>が</sup>った<sup>は</sup>んで、親も妊娠<sup>さ</sup>気<sup>づ</sup>か<sup>ね</sup>が<sup>っ</sup>た。

墮<sup>ろ</sup>す<sup>に</sup>も手遅<sup>れ</sup>さ<sup>な</sup>って、季絵は<sup>こ</sup>子<sup>を</sup>産<sup>ん</sup>だ。男と女の双子<sup>だ</sup>った。

男は壕太、おめえだ。女は<sup>な</sup>那<sup>み</sup>末<sup>と</sup>名<sup>づ</sup>け<sup>ら</sup>い<sup>だ</sup>う。

高倉の親父<sup>さん</sup>はカダナヤを殺<sup>す</sup>ど騒<sup>い</sup>だ<sup>が</sup>、産<sup>ま</sup>い<sup>で</sup>きた<sup>こ</sup>子<sup>の</sup>顔<sup>を</sup>見<sup>て</sup>、諦<sup>め</sup>だ<sup>よ</sup>う<sup>だ</sup>った。

おめえ<sup>だ</sup>ち二人は、最初、高倉の家<sup>で</sup>育<sup>で</sup>ら<sup>い</sup>た。した<sup>は</sup>んで、季絵は翌年、鬼雛<sup>おにびな</sup>に<sup>れ</sup>選<sup>ば</sup>い<sup>で</sup>、『お宿りの闇祭り』さ出<sup>る</sup>ご<sup>と</sup>さ<sup>な</sup>った。高倉家は鬼族<sup>の中</sup>でも由緒<sup>正</sup>しい家柄<sup>だ</sup>った<sup>が</sup>ら<sup>な</sup>」

「その、鬼族<sup>という</sup>のはなん<sup>なん</sup>です？」

壕太は思<sup>わ</sup>ず口<sup>を</sup>挟<sup>ん</sup>だ。

「鬼<sup>の</sup>血<sup>を</sup>受<sup>け</sup>継<sup>い</sup>で、守<sup>る</sup>一<sup>族</sup>だ」

「鬼<sup>の</sup>血<sup>？</sup> それ<sup>って</sup>、何<sup>か</sup>の風習<sup>として</sup>言<sup>っ</sup>て<sup>い</sup>る<sup>ん</sup>で<sup>す</sup>か。まさ<sup>か</sup>本<sup>当</sup>に鬼<sup>が</sup>い<sup>る</sup>という<sup>わ</sup>け<sup>じ</sup>ゃ<sup>な</sup>い<sup>で</sup>し<sup>ょう</sup>？」

「鬼<sup>は</sup>い<sup>る</sup>。おめえ<sup>も</sup>す<sup>ぐ</sup>に分<sup>が</sup>る」

クマヤサは、なん<sup>の</sup>誇<sup>張</sup>も<sup>て</sup>ら<sup>い</sup>も<sup>な</sup>く、さら<sup>り</sup>と<sup>言</sup>っ<sup>て</sup>の<sup>け</sup>た。あ<sup>ま</sup>り<sup>の</sup>自<sup>然</sup>体<sup>に</sup>、壕太<sup>は</sup>か<sup>え</sup>っ<sup>て</sup>拍<sup>子</sup>抜<sup>け</sup>し<sup>た</sup>。

「じゃあ、あ<sup>な</sup>た<sup>が</sup>た<sup>が</sup>言<sup>う</sup>通<sup>り</sup>、鬼<sup>は</sup>い<sup>る</sup>と<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>ょう。で、その鬼<sup>って</sup>、そ<sup>も</sup>そ<sup>も</sup>なん<sup>なん</sup>です？ 人<sup>間</sup>で<sup>は</sup>な<sup>い</sup>わ<sup>け</sup>で<sup>す</sup>か？」

「鬼<sup>は</sup>、人<sup>間</sup>ど神<sup>様</sup>の<sup>間</sup>を埋<sup>め</sup>るお遣<sup>い</sup>だ。おめえ<sup>は</sup>、人<sup>間</sup>と神<sup>様</sup>の<sup>違</sup>い<sup>が</sup>分<sup>か</sup>る<sup>か</sup>？」

「い<sup>き</sup>な<sup>り</sup>そ<sup>う</sup>言<sup>わ</sup>れ<sup>て</sup>も<sup>ね</sup>。……なん<sup>なん</sup>です？」

「ひ<sup>と</sup>つ<sup>は</sup>、身<sup>体</sup>の<sup>あ</sup>る<sup>な</sup>し<sup>だ</sup>な。も<sup>う</sup>ひ<sup>と</sup>つ<sup>は</sup>、棲<sup>ん</sup>で<sup>い</sup>る<sup>世</sup>界<sup>の</sup>階<sup>層</sup>だ。

人<sup>間</sup>は、身<sup>体</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>け</sup>ど、神<sup>様</sup>の<sup>い</sup>る<sup>世</sup>界<sup>は</sup>見<sup>え</sup>ね<sup>え</sup>。神<sup>様</sup>は身<sup>体</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>け</sup>ど、人<sup>間</sup>が棲<sup>む</sup>世<sup>界</sup>の<sup>外</sup>側<sup>に</sup>あ<sup>る</sup>、も<sup>っ</sup>と大<sup>き</sup>な<sup>世</sup>界<sup>に</sup>い<sup>で</sup>、人<sup>間</sup>が住<sup>む</sup>世<sup>界</sup>を<sup>支</sup>配<sup>し</sup>と<sup>る</sup>」

「ま<sup>あ</sup>、そ<sup>れ</sup>は分<sup>か</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>よ</sup>。神<sup>様</sup><sup>って</sup>、世<sup>界</sup>中<sup>ど</sup>こ<sup>で</sup>も、そ<sup>ん</sup>な<sup>イ</sup>メ<sup>ー</sup>ジ<sup>で</sup>し<sup>ょう</sup>。じゃあ、鬼<sup>は</sup>ど<sup>う</sup>な<sup>ん</sup>で<sup>す</sup>？」

「鬼は、その境界に棲んで、両方見えで。身体もあって、人間の世界さ住むごどもできるし、心では、神様の世界も見えで。

鬼には身体が必要だ。だはんで、人間のおなごの身体に宿ってから生まれでくる。バテレンの MARIA みてえに、処女がいぎなり孕むわけではねえ。孕ませる男が必要だ。相手の男は鬼人だ」

「なるほど。……で、あなたも鬼なんですか」

壕太は、揶揄しているともいないともとれる、微妙なニュアンスを込めて訊いた。

クマヤサは即座に、しかも真剣に答えた。

「馬鹿言うんでねえ。鬼人は鬼ではねえ。人間だ。鬼の血を引いででも、人間だ。本物の鬼は鬼神様と呼ばれるだ」

狂っている。

壕太は確信した。

この連中は完全に狂っている。やっかいなカルト集団だ。

しかし、口には出さなかった。まだ様子を窺うべき時だろう。

「で、俺の母親——高倉季絵はどうなったんです？」

壕太は話の続きを促した。鬼がどうのこうのより、母や姉のことを聞き出さなければならない

。「季絵は高倉の一人娘だったはんで、お宿りの闇祭りさ出さいるごどさなつた。あんどぎ、赤座には、他に若い鬼族の娘こはいながったがらな」

「お宿りの闇祭りというのは？」

「よく晴れた新月の晩を選んで、鬼人が鬼族の女ど交わる儀式だ。鬼神様を授がるようにと神様さおねげえして、鬼族の男ど女が交わる。鬼族の間で、千年以上続いてきだ祭りだ」

「祭りですか。まあ、祭りにセックスはつきものですからね。でも、高倉季絵——俺の母親は、まだ高校生になったばかりでしょう？」

「歳は関係ねえ。若えほうがお宿り様さなれると言われでだ。それに、季絵はカダナヤさ孕ませいで、おぼこでなぐなつたごどもあつたべな」

「ひどい話だ。あんたら、やってることの意味が分かっているんですか？ 大体、そんなことまでして、今までに、一度でも鬼は生まれたことがあるんですか？」

「ある」

「え？」

「大体、二百年に一度、鬼神様が生まれる。人間の世界が腐ってきだどぎ、鬼神様が現いで、神様さ報告する。この世界をこのまま生がしておいでええのがどうが。神様さ相談する。そして、今がその、二百年に一度の時だ」

「生まれたんですか、鬼が」

「ああ。おめえの母親は、おめえだちを産んだ二年後に、鬼の子を産んだ」

「今、どこにいるんです？ その鬼は」

「これがら行くどこさ」

「会わせてもらえるわけですか？」

「ああ。おめえも、鬼神様さ会えば、気持ちが定か<sup>さ</sup>なるべ。鬼神様は鬼族の心のよりどころだ。俺等<sup>わ</sup>は鬼神様のそばさいると、気持ちが定か<sup>さ</sup>なる。おめえも、鬼族の一員として、俺等<sup>わ</sup>と協力していくがええ。なんせおめえは、鬼神様の兄貴<sup>に</sup>さあたるわけだからな。大いばりで仲間さなれるべ」

なんということだ。

鬼と兄弟関係か……。あまりに現実離れした話に、壕太は驚きや恐れといった感情を通り越して、思わず苦笑してしまった。

「それで、高倉季絵——俺の母親は、死んだんですか？」

「ああ……」

クマヤサは、そこで少し言葉を詰まらせた。

「もったいねえごどをした。お宿り様は、二人目の鬼神を孕<sup>た</sup>んで<sup>に</sup>いただ<sup>の</sup>ばって、二人目は死んで<sup>い</sup>生ま<sup>う</sup>いだ。お宿り様も一緒に死んだ。生<sup>は</sup>ぎであつたら、あの二人目の鬼神様こそ、この世を救<sup>い</sup>う神様の遣<sup>い</sup>だつたはずだつたんだばって」

やはり母は死んだのだ。「鬼の子」を宿した挙げ句に……。

傷心を抑えて、壕太はなおも訊いた。

「高倉季絵……いえ、母は、二人目の鬼を孕<sup>た</sup>んでいたわけですね。その父親は最初の鬼のときと同じですか？」

「いや、最初の鬼神様を孕<sup>は</sup>かせ<sup>か</sup>だ鬼人は、すぐに死んだ。鬼神様に精を吸い取ら<sup>い</sup>だんだべ。二人目の鬼神様を孕<sup>は</sup>かせ<sup>か</sup>だのは鋼丸<sup>はがねまる</sup>——本物の鬼神様だ。

鬼神様の本物の子供が生ま<sup>う</sup>いだどぎ、この世は救<sup>い</sup>われるんだ。したはんで、鬼神様は、俺たち人間の世界を救<sup>い</sup>うために、ご自分の跡取りを作ろうどなさるだが、鬼神様の子供<sup>わ</sup>を産<sup>う</sup>めるおなごはほとんどいねえ。季絵はその可能性ば秘<sup>ひ</sup>めてあつた、奇跡のようなおなごだつたばて……ほんにもったいねえごどをした」

「鋼丸は母が産<sup>う</sup>んだんでしょう？ それじゃあ近親相姦<sup>いんしんさうかん</sup>だ！」

壕太は思わず大声を上げた。

母は、自分が産<sup>う</sup>んだ子に犯<sup>か</sup>され、孕<sup>は</sup>み、それがもとで死<sup>し</sup>んだ……。なんということだ。

だが、クマヤサは、壕太を諭<sup>な</sup>すように言った。

「馬鹿言うんでねえ。鬼神様はお宿り様の腹<sup>はら</sup>を借<sup>か</sup>りて産<sup>う</sup>まいでくるけど、人間ではねえ。だから、お宿り様の子供<sup>こ</sup>でもねえ」

「……」

壕太は絶句した。

この男に、いや、鬼族と名乗<sup>な</sup>るこの連中<sup>れんちゆう</sup>には何を言<sup>い</sup>っても無駄<sup>むだ</sup>なのだろう。

こんな狂気の集団からはさっさと逃<sup>に</sup>げ出<sup>で</sup>したい。しかし、その前に、まだ確認<sup>かくん</sup>すべきことが残<sup>のこ</sup>っている。「鬼」を見届<sup>み</sup>けるまでは、逃<sup>に</sup>げ出<sup>で</sup>すわけにはいかない。

薄汚<sup>うす</sup>れた教祖<sup>きょうそ</sup>面<sup>めん</sup>をした男<sup>おとこ</sup>だろうか、それとも怪力<sup>かいりき</sup>だけが取り柄<sup>とりがら</sup>の、粗暴<sup>こつぼう</sup>で頭<sup>あたま</sup>の弱<sup>よわ</sup>い男<sup>おとこ</sup>だろうか。いずれにせよ、それが自分と同じ母親<sup>はは</sup>が産<sup>う</sup>み落<sup>お</sup>とした人間<sup>にんげん</sup>だとしたら、考<sup>かん</sup>えただけで気<sup>き</sup>が滅<sup>めつ</sup>入<sup>い</sup>る。

いや、そんな男のことよりも、今は双子の姉・那未の安否だ。自分と血を分けた肉親が生きているのだ。那未をこんな狂気の集団と関わらせるわけにはいかない。

クマヤサの説明は分かりにくいところがたくさんあったが、壕太は、自分が置かれているおおよその状況を知ることができた。

父親がなぜ赤座部落を追われるように出なければならなかったのか。自分や、双子の姉が、なぜ父親と離れて暮らさなければならなかったのかも分かってきた。

父・稲木俊満は、当時まだ十四歳だった高倉季絵を犯し、孕ませた。それだけでも村から追放されるには十分だったろうが、季絵はその後、鬼族の男と交わる儀式で「鬼」を孕み、出産した。この時点で、季絵は「お宿り様」として、鬼族たちにとって特別な存在となった。

同時に、先に生まれた自分と那未は、「お宿り様の子」「鬼神様の兄・姉」として鬼族たちに認識されることになった。

恐らく父は、鬼族というカルト集団から我が子を遠ざけるために部落を去り、さらには自分と一緒にいては、いつかは鬼族たちに連れ戻されると判断して、血縁のない人間に預けたのだろう。

高倉季絵は鬼族の狂った信仰の犠牲になったが、那未にもその狂気が及ぶ恐れがある。父は何よりもそれを怖れたに違いない。だからこそ、息子よりも先に、娘のほうを他人に託したのだ。その判断は恐らく正しかった。父と母が死んだ今、那未を守れるのは自分しかない。

そう確信したとき、案の定、クマヤサが訊いてきた。

「おめえは、那未の居場所を知ってらが？」

「知りません。自分に双子の姉がいるなんてことさえ今まで知りませんでしたから」

「本当が？」

「嘘じゃないですよ。母親も、とっくの昔に死んだと聞かされていまして。最近まで生きていたなんて、知らなかった」

「そうが……。まあええ。<sup>わ め</sup>俺等と一緒に探すべ」

やはりそうだ。鬼族たちは那未を探しているのだ。お宿り様の娘……つまり、次のお宿り様最有力候補として。

ここまで分かった以上、下手な動きはできない。今はまだ、この連中に警戒心を抱かせないことが重要だろう。一旦仲間になったふりをして、那未の安全を守る手だてを探るのが得策だ。

そんな風に考えをまとめているうちに、車は狭い林道に入っていた。

もとより人口密度の低い土地だが、このへんまで来ると、すれ違う車もない。道は未舗装になり、さらに岩木山のほうへと続いていた。途中、いくつかの分岐点があったが、どこをどう走ったのか、壕太には分かるはずもなかった。

到着したのは、雑木林に囲まれた作業所のようなところだった。

三つの建物がコの字型に配置されていて、敷地内には、何か所かに分けて、切り出した丸太が積まれていた。

「ごごだ」

クマヤサは車から降りて、壕太を事務所風の建物のほうに案内した。

後に続いてきた車からも、鬼壁村赤座部落の神社にいた男たちが降りてきた。

事務所は、古い木造の建物の一部にプレハブを増築したような、奇妙な作りだった。入り口にはなぜか〈赤鞍鐵工所〉というかすれた看板が掲げられている。どう見ても鐵工所ではなく製材所なのだが、昔は鐵工所だったということなのだろうか。

背中を押されるようにして入り口を入ると、中は思ったより広かった。

薪ストーブが据えられたままの土間。その奥には煤けた板の間が続いている。粗末なテーブルと椅子。あるのはその程度で、事務機器のようなものはほとんど見あたらない。

中には男が二人いた。一人は白髪わげものの男。歳はかなりいっていそうだが、肉体はまだ立派なものだった。もう一人は四十代くらいだろうか。大柄で、身長は百八十はありそうだ。

「その若者は？」

白髪の男は、挨拶もなしで、いきなり壕太のほうを顎でしゃくって言った。

「驚ぐな。カダナヤのせがれだ」

クマヤサが答えた。

「カダナヤのせがれ？ 見つけたんか」

「ああ、自分から村さ戻ってきた」

「那末も一緒に？」

「いんや、那末は行方知れずだど」

「なんじゃ、しょうもなし。せがれのほうには用はねえべ」

「まあそう言うなって、鬼神わらわ様がいるがら、鬼人おにはいらねえ言っても、こいつはお宿り様、季絵のせがれでもあるべ。俺等わらわ鬼族の一員なんだはんで、邪険にしねくてもいいじゃな」

「邪険にすうつもりだばねえばって、鬼族の誓いも掟も知らねえやつごと、すぐハア仲間ど認めるわけにはいがねえじゃ」

そう言うと、白髪の男は壕太の顔を無遠慮に睨み据えた。

壕太は黙って相手の目を見返した。

「カダナヤのせがれが。太え面構えだ。カダナヤは腐れ外道がだったばって、せがれのほうはまだ見所があるがもしらね。名前はなんてへったったっけ」

「壕太です」

壕太は素直に答えた。

愛想を振りまくつもりはないが、鬼とやらに対面するまではこの連中の感情を逆撫するような言動は控えるつもりだった。

「ああ、そった名前だったっけがな」

白髪の男はそう言うと、ぷいっと視線を外した。

「今夜の鬼雛おにひなはどした？」

クマヤサが白髪の男に訊いた。

「今、事務所の二階で、ゴミソ婆が化粧ば為してら」

「鬼神様は？」

「さっきまで飯場さいだばって、今はいおり庵さ戻ってら。もう、だいぶん息が荒えな」

奇妙な会話だった。

鬼神様と呼び、鬼を崇めながらも、飢えた野獣に生き餌を与えるかのような言い草だ。この連中にとって、鬼とは一体どういう存在なのか。

とにかく、もう少しで、鬼に会える。

壕太は緊張を隠しながら、その時を待った。

---

以下、第二巻へ続く

---